T2R2 東京科学大学 リサーチリポジトリ
Science Tokyo Research Repository

論文 / 著書情報
Article / Book Information

標題	華
Title(English)	ka
発行者	TIT建築設計教育研究会
Publisher(English)	TIT society of architectural design education
巻号 / vol.	018
発行日 / Pub. date	1999, 12
権利情報 / Copyright	本著作物の著作権はTIT建築設計教育研究会、および、収録されている論文・記事等の執筆者に帰属します。本著作物は、TIT建築設計教育研究会の許可のもとに掲載するものです。ご利用にあたっては「著作権法」を遵守してください。

Powered by T2R2 (Science Tokyo Research Repository)

本館1F-東工大出版物
華 : ka
19990000 18
大岡山 20100720 00014802 (2009)

ka018

Autumn/Winter, 1999-2000

巻頭:地域施設のデザイン

「ハコ物」という言葉がある。
これは税金を使って公共の施設を建てたはいいが、地域の中での在り方や、運営プログラムが良く考えられていないために、あまり利用されない建物を指しており、
結局儲けたい土木建設業者と何か目に見えるものを残したい首長の欲を満たし、環境を破壊しただけではないか、という批判が込められている。
前回の都知事選の演説でも、格好のバッシング対象になっていた。
そういう批判を聞くと、建築に関わる者としては耳が痛い思いと、自分だったらこんな提案をするのになという思いが混じり合って、妙な責任を感じたりする。
でも、建物と地域の結び付きを観念的に考えれば考えるほど、建物としての施設と個々の具体的な地域はズレてしまう。
考えるための具体的な材料をつかまないことには、なかなか埒が開かない問題である。

そこで本号では「地域施設のデザイン」と題して、
デビュー作である坂本龍馬記念館以来、多くの公共施設、特に地域施設の設計に取り組まれてきた建築家の高橋晶子氏と、
農村計画や文教施設の研究が専門の本学の藍澤宏教授を迎え、両氏の作品や研究を通した体験を基に、
地域施設のデザインの現状と、展望について議論していただきました。

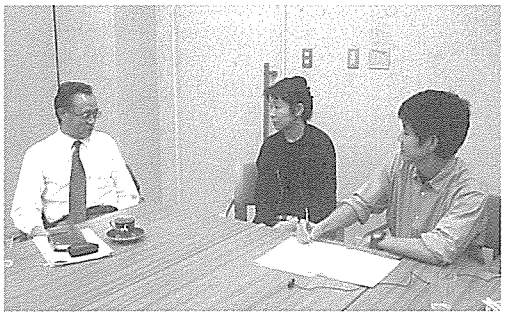
Headline: District Facilities

華[ka]1999-2000年 秋冬号
[巻頭記事]対談:地域施設の全体性(藍澤宏+高橋晶子)/小論:環境化する地域施設—都市郊外におけるリアリティから(小川次郎)/[98年度後学期建築設計製図]/[98年度大岡山建築賞]/
[ニュース・投稿]スライド・レクチャー:建築のノーテーション(小嶋一浩)、
講演会レポート:都市の中の新しい公共性の提案—MvRdV講演会報告(谷川大輔)、福島駿介特別講義、オレ・ボーマン講演会/
[INFORMATION]

東京工業大学
22.7.20
附属図書館

対談:地域施設の全体性
District facilities: Feedback/Network/Complex/Symbol

藍澤宏[教授]+**高橋晶子**[ワークステーション]
AIZAWA Hiroshi (Professor, Tokyo Institute of Technology), TAKAHASHI Akiko (Workstation)
司会:**塚本由晴**[講師]
TSUKAMOTO Yoshiharu (Lecturer, Tokyo Institute of Technology)



高橋晶子[写真中央]
TAKAHASHI Akiko
1958年 静岡県生まれ 1980年 京都大学建築学科卒業
1986年 東京工業大学大学院博士課程修了後、篠原一男アトリエ(1988年まで)
1988年 高橋寛とワークステーション設立
1992年「高知県立坂本龍馬記念館」でJIA新人賞受賞
主な作品:高知県立坂本龍馬記念館、横浜市仲町台地区センター、大沢野町健康福祉センター、岐阜県営住宅ハイタウン北方(高橋棟)、佐川町立桜座

藍澤宏[写真左端]
AIZAWA Hiroshi
東京工業大学文教施設研究開発センター教授

以下は1999年6月24[木]に行われた対談の模様を、学生編集員の高橋寛(M1)、大村卓(M1)がレポートしたものであり、文責は編集部にあります(敬称略)。

[計画と利用のフィードバック]

塚本——日本の施設建築の成立を考えると、近代化とともに成立してきた社会活動を単位空間に分節し、それを組織することで組み立てられてきた施設計画の体系があります。それらは確かに建物としては成立しているかもしれませんが、それが建つ場所との関わりが希薄で、いかにもトップダウン的につくられたものだなと思えるものが多い。国とか県の大きな施設ならまだしも、市町村や区というような小さな行政単位に対応する地域施設の場合、その地域の広がりの中で捉えなければいけない内容があると思うのです。こうした見方をすると、地域施設は建物の中だけで設計を考えてきようなデザインの方法を更新していく上での良い材料になるし、結局は大きな施設にも跳ね返ってくる重要な問題だと思います。そこでまず藍澤先生ご自身が計画学のなかで地域施設をどう捉えられているかお話して下さいますか。

藍澤——地域施設については、いわゆるトップダウンで施設が与えられて、住民が利用するという見方が一方にありますが、私は利用者が施設をどう有効に活用するか、利用者の需要に対してそれをどう供給するかという、利用者サイドを含めたデザインのしくみが重要だと考えています。そのために施設の使われ方調査を実施して、利用者、運用者、管理者による使われ方と、その矛盾点、利用の需要と空間の供給の対応関係を調べ、設計者と利用者のあいだの不一致点の解消方法、あるいは新たな空間創造を計画の指針に取り込む。これは空間構造の発展過程といえます。

次に地域施設は地域の中でのシンボル性が非常に高いものなので、その空間全体のデザインの位置づけが重要だと思います。ただこの件に関しては、住民サイドの調査研究からはアプローチするのは難しい。また、地域施設間の関係と施設自体の規模のどちらを優先するかという問題があります。住民が直接利用する施設と小規模施設の管理者教育のための中央施設とでは、利用者が異なったり施設機能が複合化する場合もある。その場合にはデザインが規模によって大きく異なってくるのです。こうした見方は建築計画サイドでも異なった立場をとる研究者もいるし、建築家の人たちの考え方と相当違うところがあると思います。

塚本——高橋さんは、実際に地域施設を設計されていてどういうことを感じられていますか。

高橋——私は具体的にいくつかの地域施設を設計監理した立場として、非常に満足のいく仕事ができたと思った場合と、地域施設をつくるということのほんの一部にしかタッチできない無力感を味わった場合と二通りあります。横浜市のように人口が多く地域の分化が進んでいながら、行政単位としてはひとつの市であるといった地域の場合には、同じプログラムを市民に平均的に与えることが第一で、その都度改正されたプログラムが一方的に与えられる。しかしそのプログラムが、果たしてその場所に本当にフィットしたものなのかが最後まで分からないので設計になかなかのれない。また使われた後のことを館長さんや利用者の方にも聞くのですが、それはあくまで個人的なもので情報として流通しない。やはりつくった後で生じた問題があれば、藍澤先生がおっしゃった使い方調査を通して原因などは客観的に明らかにして欲しいと思います。

ただもうひとつの高知県佐川町の桜座というホール(Fig.1)の場合では、基本構想も基本計画もほとんどないままに、設計者が敷地の相談からプラグラムづくり、それから設計監理というところまで関わるチャンスをいただけたので、要は「よろずや」になっていきまして、プログラムのリアリティを感じとることができて非常に充実した仕事ができました。それでも満点が取れたわけではなくて当然反省点もあるのですが、設計をする、建築することに対する不安と期待を直接感じることができました。

塚本——行政の方では、今「ハコ物行政」などといわれている公共施設への批判に応えて変えていきたいと考えているんですか?

高橋——はい。それで地域懇談会や近隣説明会を行うのですが、自然発生的ではなくてシステムに組み込まれていると、アリバイづくりみたいになる。横浜市の場合ある程度設計を進めた上で公開する説明会はありますが、それは構想レベルの話ではないし、意見をいうのも町内会の会長さんなどの特定の有力者で、実際の利用者の声は直接聞こえませんでした。

藍澤——それは建設のプロセスの問題です。横浜は集会所等の地域施設の整備が遅れているので、中学校区や小学校区単位に地区センターをつくるという話にはみな賛成なんですが、その規模や予算は決まっていて、ただ順番にそれを消化していくだけです。発注の形態自体「箱もの」の基準面積と単価があるので、建築家はプロセスの歯車になってしまっている。決められた空間配分の中でデザインするから、全体に対する構想というものがでてこないのです。

塚本——やはりまだトップダウンの中でデザインというものが位置づけられている。

藍澤——トップダウンであっても、トップの中に建築家が初期から入っていればいい。そのやり方のなかでどういう立場を築けるかが重要です。たとえば施設の利用調査の成果を理解した建築家が企画段階から入っていれば、それは空間構成としてフィードバックできる。高橋さ

22.7.20

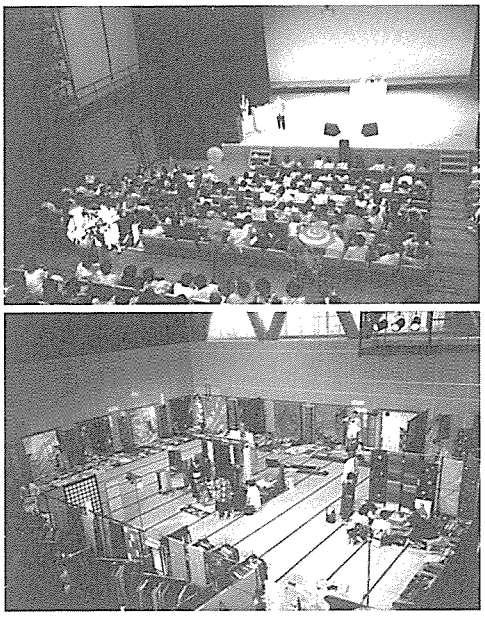


Fig.1 桜座メインホール、客席利用による芸能祭(上)と平土間での呉服展示販売会(下)(写真提供:桜座)

んの四国の方の仕事でも、初期の段階から入っていたから自分なりにフィードバックできるわけです。

高橋——それは施設の使い方へのフィードバックにもつながる話だと思います。建築家にとってはプログラムができたから終わりというわけではなく、最後にはひとつの建物にそれをまとめていくわけですから、当初検討材料として挙がっていても、設計の過程で落ちていく何かが必ずあります。そうした経緯を共有して運営してもらえる場合と、それを全く知らずにクレームだけを言われる場合、また1年ぐらい経ってから評価が変わってきた場合などがありますが、やはり後々の使い方というのも、建物のデザインそのものとは違う話として、地域施設を考えていく上で非常に重要だと思います。

塚本——一般にプログラムとかいわれているけれど、もっと具体的な「使い方のデザイン」とでもいうべき内容が、建築家の仕事の中で増えた方がいいのかもしれません。高橋さんの桜座では、建物ができてからのアフターケアとか、一緒に企画を考えるとか、具体的にはどのように関わっていらっしゃいますか。

高橋——こちらとしてはメインホールが平土間になるから、ギャラリーとかパーティーとかもっとできればと思うのですが、催し物が入ってくる合間にまとまった展示用の時間を取りにくいとか、それをどうしたらうまくできるだろうとかコミュニケーションをとっている段階です。1年間の使われ方がわかったところなので、これから動こうと思っています。

[ネットワーク/農村と都市郊外]

高橋——桜座の地元ではサークルの活動が活発なのですが、既存の公民館がその活動場所としてすごく使い込まれて、発表の場としてはあまりに古くなったという声が桜座建設の背景としてありました。それで公民館との役割分担の意味もあって、防音効果を考えた部屋をつくりました。そうしたら夜中まで音を出してもいい便利なところができたおかげで、隠れたニーズが如実に現れてきて、その部屋が使いすぎでぼろぼろになってしまいました。桜座は夜中12時まで開いてるのですが、職員はもう帰っているから、鍵をどこに返すかが問題になる。それでもっと遅くまで開いている近くのコンビニに預けて帰っているのです。

藍澤——その鍵の話は農村の知恵なのです。だいたいどんな地域でもひとつの集会所の鍵は3つあります。ひとつは館長さん、もう一つは地域の責任者、そしてもう一つは商店がもっているのです。これらの3つのどこかに行けば鍵が借りられ、また返すことができる。そういうシステムは都市にはありません。農村には確実にあるから、例えば私たちが農村に調査に行って場所がないとき公民館を借りるのです。そのとき朝7時とか8時に近くの商店に行って鍵を借りて公民館を開けて、帰るときは夜の9時とか10時にその商店に返す。

塚本——それはいい仕組みですね。いわば違う施設間のネットワークができているということだと思うのですが、同じ規模でたくさんつくられる横浜の地区センターでは、設計をするときに施設間のネットワークの問題は考えられているのですか。

高橋——情報端末を将来置く話があったくらいで、それ以上のことは聞いてません。多分問い合わせれば情報は提供してくれると思います。

藍澤——ネットワークというのをどう捉えるかなんですよ。いわゆる人のネットワークと建物のネットワーク、それと情報のネットワーク。よく行われているのは情報のネットワークですが、たとえば5つの施設が情報のネットワークを組むといっても、それは施設側にとっては都合がいい話で、各施設が年に1回何か催せば、ネットを組んだことでひとつの施設が5回催したと評価されてしまう。これが果たしていいかどうか。それで協賛とか主催とか色々言葉がありますが、実際何もしていないのに表面上の実績づくりになってしまうということがある。要は利用者にどのようなメリットを与え得るかが重要です。

塚本——都市部での施設間のネットワークと農村部での施設間のネットワークというのではだいぶ事情が違いますね。農村部のように地域のコミュニティに根ざしたネットワークが明確に見えているときというのはやはり設計しやすいというわけですね。

高橋——しやすいです。それは意見調整についてもいえて、桜座では話し合いの場として「寄り合い」というのを行ったのですが、すべての人が同じ意見を持っているわけではないので、人が来れば来るほど意見は拡散したわけです。しかし驚いたことには、だんだんみんなが意見をまとめようとし始める。

藍澤——そう。私の場合は企画の段階からしか入りませんが、とてもできないような無理な課題を投げかけるわけです。すると1、2日経つと解決策をちゃんと相手が考えてきてくれる。

塚本——例えばどういう課題ですか。

藍澤——小学校と中学校を併設するという話があった場合、中学校は閉鎖的な教室型だったのでオープン化計画について中学校の先生に話しても、無理だといわれるだけです。そのとき小学校の方はオープン化の方向で進行しているという情報を与えると態度が変わる。つまり中学校の先生のプライドというものがある訳で、小学校でできることなら自分たちにもできるはずだと気がつく。翌日会合を開くと中学校の先生はどういうオープン化ですかときいてくるわけです。

塚本——なるほど。プライドがかかっているわけだ。

藍澤——そういう地域にはこれまで長い間かけてできた意見の統合の仕組みがある。その仕組みを理解しているから、無理な問いかけができるわけです。その内部調整力というのは捨てたものじゃない。

高橋——桜座の場合は農村の地域社会が残っている場所なので、今先生がおっしゃったとおりだと思うんですが、地域といっても農村だけではなく、横浜の都市郊外のような曖昧なところもありますよね。

藍澤——その場合は難しい。頓挫する寸前までいって誰かが責任を持つという人がいればまとまるんですが、皆さんそれがイヤだから、結局行政に与えられたままそれを消化することになってしまう。地域施設を計画するときには、意外と農村的な社会が残っている方が建築家はやりたいことができると思います。

[施設の複合化/機能の複合化]

塚本——先ほど話に出た、人や建物のネットワークの問題を考えると、施設の立地条件や周辺との関係が重要になると思うのですが、それでもやはり学校区を基準にして施設を配置することが有効なのでしょうか。

藍澤——利用者が平等にアクセスできるという前提に立つと、歩いて15分くらいで住民が平等に利用できる日常生活圏としての学校区という話になるのです。

塚本——アクセシビリティが多少わるくても、近くに川があればその横につくった方がいいというのもあり得ませんか。

高橋——それは施設の複合化の問題と絡むと思います。このごろは車での移動が増えたため、周囲を駐車場が取り巻いた単一機能の施設がぽつぽつと分散しているところが多いのですが、これらは地域のアクティビティの連鎖、あるいは街の理念的なアイデンティティとしては全然機能していない。でもそれらが手をつなげば1+1=2以上の相乗利用ができるだろうし、目的以外の快適さや気軽さが得られるという期待が、施設の複合化の理由としてあるのではないでしょうか。

塚本——高橋さんの作品ではどういう複合化がありますか。

高橋——大沢野町健康福祉センター(Fig.2)では、福祉施設と健康ランドがひとつの建物に並んで入っています。デイケアに来る老人達は、健康ランドが空いている平日の時間に、そのプールを機能訓練場として利用できたり、健康チェックができる。地元のあらゆる年代の人に平日も休日も利用してほしいとの計画です。

藍澤——先ほどの横浜の場合には、既存の施設がもともとなかったという背景もあり、かなり施設の複合化が進んでいると評価されています。アクセシビリティの問題から小中学校の敷地の一部にコミュニティスクールと呼ばれる集会所を併設する。すると集会所の建設と複合化が同時にでき、放課後に児童生徒が利用できるし地域住民もだいたい均等に行ける。そういうかたちで立地の問題から横浜の場合は複合化が一応できている。逆に既存の施設のあるところのほうが複合化が難しい。

高橋——既にあるものを使い分けながらうまい連携を保つのは、設計そのものよりも難しいですね。

藍澤——単純に複合化といってもいろいろあります。ひとつは敷地の有効利用や建設コストの軽減という理由だけで二つの施設が併設されたもの。もうひとつは二つの機能が統合されて新しい機能になる、機能の複合、活動の複合です。相互に利点や交流があって、たとえば小学校が小学校とは違う機能をもつようになる。それが本来の複合化だと思います。山形の酒田市にある「ふれあいセンター・マイ夢の里」(Fig.3, 4)では小学校と保育園と公民館が一体化されています。運営主体は全部違うのですが、学校の体育館が使われてないときには保育園児が運動場代わりにかけずり回っている。少人数で何かをやりたいときには、公民館の集会室も使える(Fig.5)。同じように小学校の児童も三つの施設を自由に使えます。各施設の管理者のあいだに信頼関係があって、どの施設が何を優先して使っていいのかが約束事として決められているのです。現実には利用者が三種類あってひとつの施設を利用していると考えた方がいいようなものになっている。

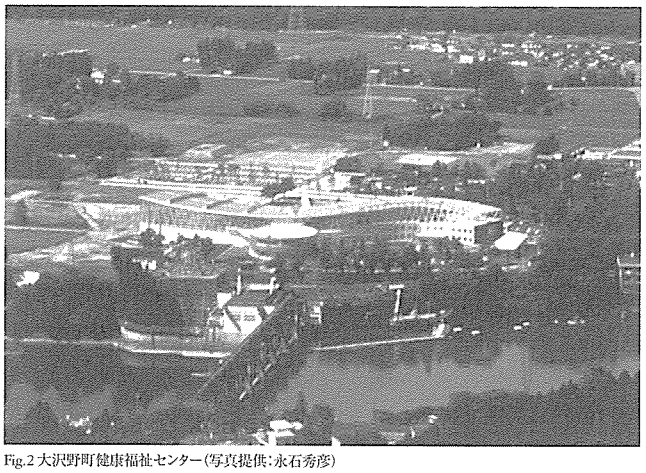


Fig.2 大沢野町健康福祉センター(写真提供:永石秀彦)

高橋——三つの施設が対等な関係にあるわけですね。

塚本——民間の施設が複合してくるような例もありますか。

藍澤——山形の川西町といって、井上ひさし氏の出身地にある生涯学習施設なのですが、敷地の横に郊外型の大きなパチンコ店と宴会場とそれらの駐車場があるのです。行政の方ではそんな場所はとんでもないということだったのですが、結局こういう土地では食事をするのも宴会場ですから、そこに来た人たちが施設を使ってくれればいいという判断で、集会所とか図書館が入った立派な生涯学習施設をつくった。また館長が有能な方で施設の企画段階から関わっていて、演劇集団をつくってその参加者にも生涯学習センターの運営に入ってもらう。生涯学習施設で演劇などの大きな催しがあったときは、お弁当等を横の宴会場に頼む。人がたくさん来て駐車場が足りなくなったらパチンコ屋の駐車場を借りる。パチンコ屋の店長さんも当然施設の運営に参加してもらう。お互いに持ちつ持たれつですね。「遅筆堂」という図書室には井上ひさしの数万冊の蔵書が寄付されていて、放課後の児童生徒が毎日たくさん来ている。おもしろい建物です。

塚本——見事な相互依存ですね。必ずしも目的的ではない活動で全体ができている。

藍澤——また、公共の地域施設の中にコンビニをつくるという今まではなかった発想が最近でてきた。地区センターみたいなものは街から車で10分か20分くらいのところに建てられるので、人が来なくなってしまうことが多いのですが、そこにコンビニがあるだけで人が集まって来る。でもコンビニは民間だから、役場では第三セクターでコンビニができるかどうか検討を始める。コンビニの看板が問題になって、交渉次第で色も変えられるという話まで具体的に出てくる。そういう新しい理解も徐々にでてきてます。

高橋——一般に施設を設計するというのは、何となく漠然とした環境からある特殊な社会目的に合った環境を切り取る作業だと思われています。小学校だったら小学生が集まるものであって、図書館に来たら図書に接する人が来るものだと。ところが実際は、図書館に行くと本を読むように強制されているように感じてイヤだという人が結構多い。ということは、社会目的の一部を切り取るという作業自体が、現実の利用のされ方、あるいは利用者が環境に対して期待していることとずれてしまう危険性をはらんでいるのではないでしょうか。

藍澤——そうですね。施設を機能別に建設して住民の要求を充足させるという考え方では、機能の複合化というのは難しいですね。

塚本——施設計画の方から考えると、どうしても目的的に行かざるを得ないところがありますが、もう少し目的からはずれたいい加減なものまで含めた全体がわからないとだめということですね。

[シンボル性と建築家の職能]

塚本——場所性などのあやふやで整理しにくい内容を相手にしなければならない、空間あるいはかたちの問題という意味でのシンボル性というのは、建築家にとっては使われ方の話以上に大きな問題だと思います。高橋さんたちの作品では、たとえば坂本龍馬記念館はとてもシ

Fig.3 ふれあいセンター・マイ夢の里 鳥海保育園(左端奥)、南遊佐公民館(中央左寄り)、南遊佐小学校(中央から右端)が一体化している

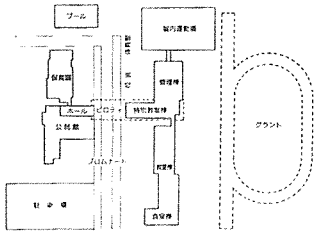


Fig.4 同配置図(Cf.1)

Fig.5 保育園児も活用する公民館多目的ホール

(Fig.3,5写真提供：生涯学習活動 空間計画プログラム研究会)

Cf.1「平成10年度 生涯学習活動の促進に関する研究開発：学校施設と地域生涯学習施設のネットワーク化と複合化に関する研究」(生涯学習活動 空間計画プログラム研究会編、平成11年3月)

ンボリックだし、大沢野町健康福祉センター(Fig.2)は土木施設に隣接していて、土木的なスケールをもった表現がでてきている。高橋さんたちはわりとシンボル性というものを大事にしながら、その時々に見合った建物をつくっている印象があるのですが、どのような考えがおありですか。

高橋——たまたま外観やシルエットが特殊で大きかったりするものは、結果としてシンボル性が強いといわれ、それが地方に建っていることは事実です。自分たちは別に要求の度合いに応じて、設計の態度や理念を変化させていこうと考えているわけではありませんが、立地する場所や相手を理解していくと、そのプロジェクトが地域にとって期待の大きな重要な事業であるか、もっと実用重視のプロジェクトかがわかってくる。もちろん重要でないから良くないというわけではなくて、結果として違ってくるのです。桜座の場合、ここは日本の桜百選の町で、桜は町のアイデンティティを象徴している。「桜座」という名称は公募で選ばれたもので、自分たちが町をどう見ているかという町の人の視点がはっきりしている。こちらとしてはどうしたら「桜座」らしくなるだろうかといろいろ考えたんですけど、昔ながらの芝居小屋はとても自分たちはつくれないので、ホールが欲しいというなら素直に建てればいいと思って、建物はホールらしいかたちにした。ただ座席だけピンクにしようと……。

藍澤——それは地元の要求なんですか？

高橋——いえ、違います。

塚本——そういう要求というのはやはりあるものですか？

藍澤——地方に行くと何でこんなものをつくったんだというのは結構あります。奈良の方の少し山の方に名前に竜がつく町があるのですが、役場の入口に竜が巻きついているようなかたちをしている。地元の人はそれがいいというので、どう考えたらいいのか戸惑います。

塚本——僕は白石というこけしの町で、電話ボックスの上にこけしが2倍の高さでのっているのをみたことがあります。

高橋——それをいえば坂本龍馬記念館は、もともと龍馬の銅像があって、その鞘堂を造るという構想から始まったのです。つまり巨大龍馬。ですから私たちの建物はどこが龍馬なんだという声が多かったし、今でも理解できない人はいます。

塚本——建築家や学者が考えている建築の価値観と、地域の人たちの価値観はやはり違いますよね。新しくつくった建物の良さや企画したもののおもしろさをどう分かってもらうか、その地域のすばらしさをどう再発見してもらうか。使い方もそうだし、デザインの問題もそうですが、教育していくというか説明していくところまで、建築家なり計画者なりの領分というのは広がるんじゃないでしょうか。

藍澤——そこまで含めて建築家の責任だと思います。しかし行政サイド、とくに教育委員会や福祉協議会は、一般的にたいへん保守的なので、建築家が入り込めないのが実状です。

塚本——なぜでしょうか。今いろんなところで異分野の人が交流した方がいいということになっているのに。

藍澤——たとえば50歳代の学校の先生は、30年間従来型の教室で教えてきたのを、壁のないオープンなところで教えろといわれても私にはできませんと言う。あと5、6年しかないのにがらっと変えてもらったら、定年までに納得いく仕事ができないと。ある意味では理解できる話で、彼らにとっては地域施設というのは固定された概念なのです。それに全く異なる機能を付加すると、そんなものはいらないとなるわけです。教育者なら新しい転換をしてもいいと思うのですが、その踏ん切りをいかにつけさせるかが難しい。

高橋——現実には私を含めて構想や計画づくりに関われるチャンスがなかなかないから、建築家は川下の問題処理係に甘んじている場合が多い。でも専門領域を越えた話し合いの場が設けられたときに、限定された目的に応じるだけの建物を設計するのではなく、その地域の環境をリプログラミングするようなことを意識的にやっていきたいですね。

塚本——地域施設が、いろんな職種や業種、縦割りの領域を打破して、もう一度組み替えていくときのひとつのきっかけになり得ると。

高橋——農村的な事業という場合には、建築という専門領域の小ささも同時に思うのです。建物はその地域が元気になったり、自由になったりする思いの結晶、シンボルみたいなものなのです。そうなると、企画に優れた方もいるだろうし、利用方法を柔軟に考える人とか、そういういろいろな方面に秀でている人たちが集まって話す場所が生まれてくる。それを整流しようとして従来のトップダウン式の流通機構がつくられていると判断するのであれば、その交通整理のやり方をどこかで変えていったときに、もしかしたらおもしろい個別解ができる可能性があるかなと思うのです。特殊解の集積になるだけかもしれないんですけど……。

塚本——同時に、地域施設を通して建築家の職能もリデザインできる。

藍澤——地元の人は、人が利用して活動する場として地域施設を見なします。それは地域の人的資源の集合体なのです。建築家は積極的にそこにかたちとか機能を提案し発言していいと思います。高橋さんがおっしゃるように、今はまだ建築家がタッチできる素地は非常に少ないのですが、最近プレゼンテーションコンペというのもでてきていて、建築家が基本構想から実施設計まで全部関わっていける仕組みがぼちぼちでてきたのはいい傾向だと思っています。地域施設を設計するとき、建築家がきちんと企画の段階から入っていけると、地域の人たちを啓蒙するという働きを通して建築家の職能を拡げることにもなる。そうすれば、いわゆるハコ物的な存在ではない地域施設の意味合いを見つけていけるし、そのことが地域のなかでの建物のシンボル性へとつながっていくのではないでしょうか。

環境化する地域施設
――都市郊外におけるリアリティから

District facilities as built environment:
Starting from the reality of suburban landscape

小川次郎[日本工業大学講師]
OGAWA Jiro (Lecturer, Nippon Institute of Technology)

1966年 東京都生まれ
1989年 東京工業大学工学部建築学科卒業
1996年 同大学院博士課程満期退学ののち同大学建築学科文部技官(1999年3月まで)

[都市郊外における環境要素]

「地域施設」「公共施設」等々、呼び名は様々あれど、利用対象を規定した建築のジャンルを耳にすると、実際の建物としては、何かステレオタイプ化された空間が敷地やその周辺の環境とは無関係に空から降ってくる印象を抱いてしまうのは筆者だけだろうか？「地域」とは元来何らかの空間的、領域的あるいは共同体的まとまりを示していようし、そうした定量化・定性化された社会的単位に奉仕する建築という枠組みが、類型化した公共建築をイメージさせるのかもしれない。現代において「地域」なる概念の一般化が可能か否かといった議論はさておき、少なくとも都市的な「地域」、あるいはスプロール化した都市郊外の「地域」など、必ずしも農村的なコミュニティを前提としないような「地域」が想定されよう。そして、都内から電車で1時間程度の都市郊外にこそ、現在この国で最も凡庸かつ大多数を占める「地域」の姿を見出すことができるように思われる。そこには、まちの目抜き通りに面した高圧線塔や、アスファルトの道路に直接隣接した水田など、様々な要素の入り混じった奇妙な風景が広がる(Fig.1)。それは建築的な意味での秩序とは無縁の風景ではあるが、それが故に、見る者に得も言われぬ開放感や気安さをもたらすことも事実である。また都市郊外とは、いわゆるファミレス、DIYショップ、カラオケボックス、レジャーランド等をはじめとする消費も重要な活動のひとつとはするものの、それに加え工業(各種工場)、消却(残土処理場、廃車場)、交通(鉄道、道路、バイパス)、宗教(神社、寺院、墓地)、居住(一戸建、豪邸、アパート、マンション)等の活動が併存する、要するに「何でもアリ」のワイルドな世界である。特に、いわゆる都市部との決定的な違いを作り出しているのは、幹線道路、裏道の違いを問わずあらゆる場所に顔を覗かせる、水田、畑等の農業に関わる要素の存在であろう。

[人工/自然の境界の不確かさに対する想像力]

こうした無秩序な様相を呈する都市郊外において、いかにして地域施設は可能となるか？ もはや郊外においてコミュニティに根ざした施設など想像し難いし、かといって設計者の社会や制度に対する過大な思いを単体の空間に投影することも効果的とは思えない。こうした状況においては、まずは既存の物的な環境(Built Environment)を積極的に肯定し、そこに新たな要素を刷り込むことで、その地域や場所のもつユニークさを浮上させる方法が有効であろう。先に述べた都市郊外における要素を、ここでは環境を物的に構成するモノという意味で、やや曖昧ながら「環境要素」と呼ぶことにしよう。一見複雑に見えるこれら環境要素は、建物や道路をはじめとする人工のモノなのか、あるいはタンボや樹木等の自然と呼べるモノなのかといった素材や形態上の性質の違いから捉えることができる。ここで、こうした要素の性質に関するレベルと、これらのスケールやプロポーションに関するレベルの重ね合わせを、新たな地域環境を構成する上での方法論とできないだろうか。このことは「建物のように見える自然物による要素」といった、緩やかに環境化した半人工-半自然的な施設や領域をまちに離散的に配置すること、比喩的にいうと、建築が-敷地であり-環境にもなる、といった3者のダイレクトな関係を設計することといっても良い。つまり、現在郊外の無秩序な景観を構成するものとして、どちらかというと否定的に受け取られがちな水田等の自然に関する環境要素を、建築的あるいはヴォリューム的に扱うことで、都市郊外に新たなアイデンティティを与えるような領域を作り出してゆくのである。

例えば、住宅や商店に混ざり昔ながらの屋敷林や水田の数多く残る、典型的な都市郊外における地域施設を考えてみよう。都市化の進んだ郊外においても、依然として稲作が地域の特徴的な活動のひとつであることは往々にしてあろう。本来植物の集積した場である水田は、イネが成長するにつれ、建築物に遜色ないほどの大規模な環境要素として地域に現れる。こうした環境において、例えば水田のイネと一体化した建築ヴォリュームが、人工/自然の切り分けを越えた混成体として、米の即売所やバス停等のミクロな建築物を生み出すというアイデアはあり得ないだろうか(Fig.2、3)。これらの建物は、従来の意味での恒久的な建築物ではないし、特異な使用用途をもつわけでもない。ある意味で、アースワークと呼んでも良いかもしれない。しかし、こうした半公共的な建築群は、人工物とも自然物ともつかぬ様々な要素の集積により成立する都市郊外の現実を浮上させ、その物的環境を再編成する可能性をもった地域施設とみなすことができるのではないだろうか。

[環境化する地域施設]

われわれは現在、個々の公共空間の良し悪しが、地域やコミュニティの性格を劇的に変え得るという幻想、あるいは変えるべきであるという強迫観念から、一度自由になる必要があるのではないだろうか。これからの地域施設のあり方を考えるとき、筆者は郊外の名もない駅にある、その土地の観光スポットを示す地図をイメージすることにしている。そこに掲載された場所や建物は、どれも地域の故事や来歴に因んだ名所旧跡等の他愛もないものばかりであるが、それぞれの土地において根付くと共に、来訪者の視点を経験するという不思議な感覚を、地域の人々にもたらす。人々は、わたしのまちが外部に発信する情報を介して、わたしのまちの輪郭をおぼろ気に知るのである。こうしたささやかな観光スポットの類と同程度に環境化された場所として扱われるようになったとき、都市郊外における地域施設の新たな役割が見えてくるように思われる。

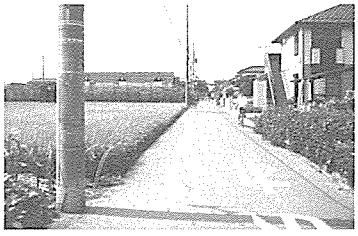


Fig.1

Fig.3

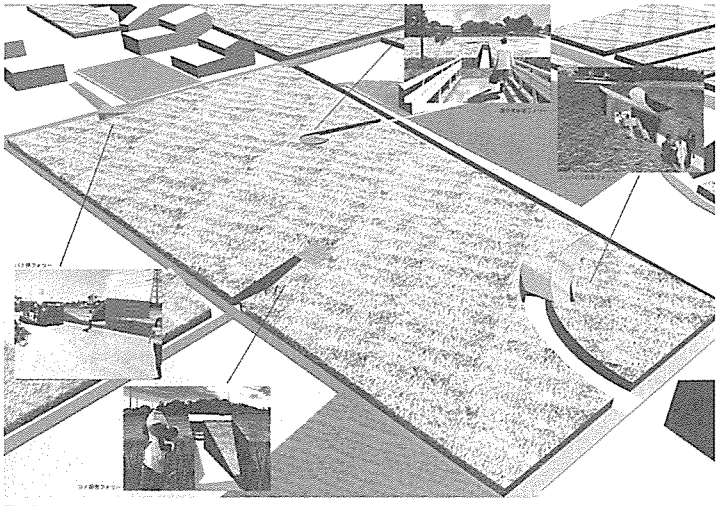


Fig.2

[モミガラ・フォリー・プロジェクト」(第34回セントラル硝子国際建築設計競技優秀賞受賞案)
集積したイネによるヴォリュームを媒介とした、生産(稲作)、消費(コメの販売)、交通(路線バス)といった都市郊外の様々な活動を接続するフォリーの提案。イネを脱穀した後のモミガラを整形することで、敷地である水田との相関によるミクロな半公共地域施設が形成される。

「ふだんの居場所を考える」
"Design a daily-use space"

担当:
青木義次[教授] **藍澤宏**[教授] **大佛俊泰**[助教授]
AOKI Yoshitsugu (Professor), AIZAWA Hiroshi (Professor), OSARAGI Toshiyasu (Associate Professor)
木下芳郎[助手] **斉尾直子**[助手]
KINOSHITA Yoshiro (Assistant), SAIO Naoko (Assistant)
講評会:
八木幸二[教授] **奥山信一**[助教授]
YAGI Koji (Professor), OKUYAMA Shinichi (Associate Professor)

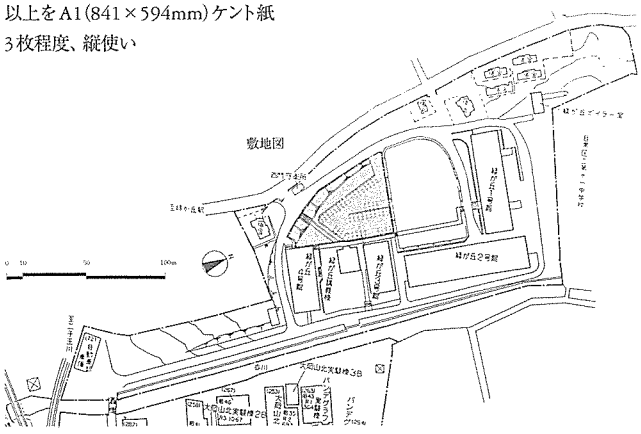
緑ガ丘地区西門入口の斜面及び駐車場を利用し、建築学科及び6類のためのスペースを計画する。毎年4年生のディプロマ制作時期におこる製図室の入替えや大掛りな引越し、設計製図の作業スペースの不足、課題作品やディプロマを展示するスペースの未整備、講評スペースの不足など数多くの問題があり、来訪者への展示公開や講演会などもままならない。また、CAD、LANの整備も遅れているため、学生が自由に使える端末機がないことや、ゼミスペース、卒論や図書の検索、閲覧などのスペースも準備できていないことが問題として挙げられる。

更に6類全体の学生からは、雨の日や授業以外の居場所がないことや、簡単な飲食を行うスペースもないこと、自由に使える外部空間の不足が不満として挙げられている。

課題はこうした学生の身近なテーマに対して、具体的な空間を提案してもらうことを求めている。

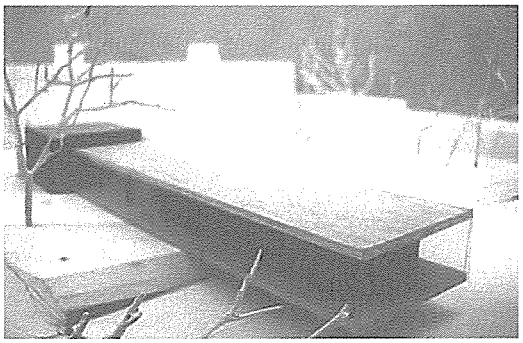
[設定条件]
- 敷地:緑が丘地区西門の斜面及び駐車場
- 所要スペース:設計製図講評会スペース(講演、スライド上映なども行う)/展示スペース(外部の人にも公開する)/大学院製図室(コンペ、授業等で不定期に最大20人位が使う)/ワークショップ(模型の工作、写真撮影、コピー機等のスペース)/コンピュータ(CAD)スペース(台数、製図室との関係は各自で設定)/ゼミ室(10-20人で会議のできるスペース)/喫茶スペース(従業員は置かない)/その他
- 建築規模:駐車場レベルを設計GLとして、地上2階、地下1階以内とする。延床面積に制限は設けないが、1000m²位を目安とする
- 構造:主構造はRCラーメン構造とする
- 設備:基本的に個別空調システムを想定。室外機等の設置場所に注意すること
- 法規:特に想定しないが、2方向避難は確保すること
- その他:現在の樹木・植栽などの環境をなるべく維持すること。駐車場の台数は現状かそれ以上確保すること。必要以上に面積を増やさないよう外部空間を取込むこと

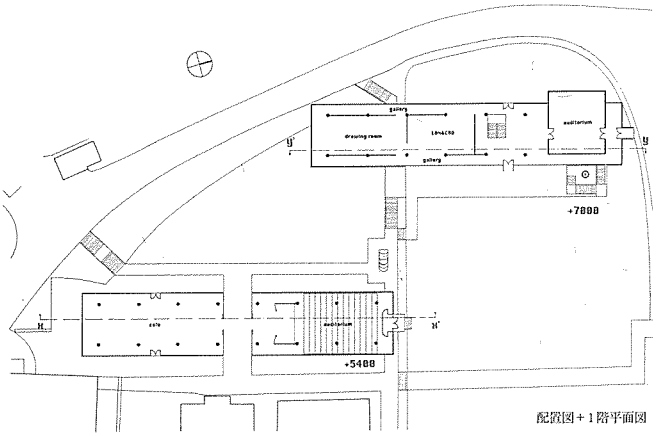
[提出図面]
配置図(平面と兼用可、1/200)、各階平面図(1/200)、断面図(2面、1/200)、立面図(2面以上、1/200)、断面パース(1面、1/50)、矩計図(1面、1/20)、模型写真(模型のスケールは1/200)、設計主旨(箇条書きとする)、建物名(主旨を明確に表現するタイトル)
以上をA1(841×594mm)ケント紙
3枚程度、縦使い



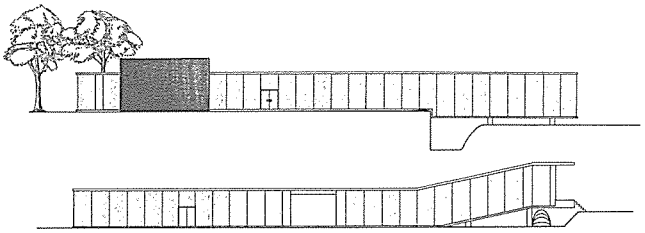
以下の文章は1998年11月17日[木]の講評会を学生編集委員の伊藤立平(M2)がレポートしたものであり文責は編集部にあります(敬称略)。

三井祐介 MITSUI Yusuke





配置図+1階平面図



三井——一つの建物だと全体がまとまり過ぎるので分棟にしました。6類全体の機能と、建築学科の機能を分け、門から入ると一度広場を介して動線が分かれます。共用棟は社工への動線上にあって全体で使える講演会場などがあります。建築棟は講評会室のみ壁構造で、製図室の周りの壁が展示用のスペースになります。

八木——分棟なのにそれらの間があまり考えられていないような気がします。段差のある間の部分が当然問題になる。

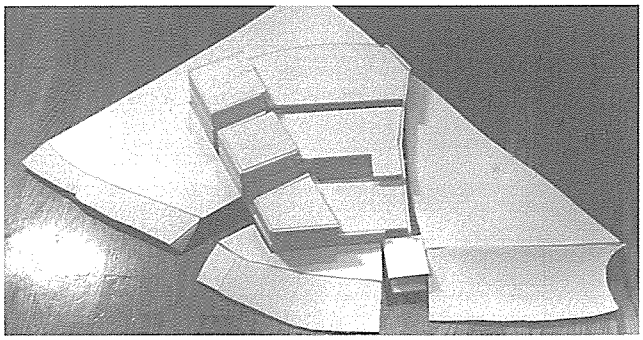
奥山——両方地下の工夫が足りない。採光してるけど、段差が全然生きていない。共用棟の屋上は段差に対応していておもしろいので使いたくなる空間になっている。今は二つとも浮かせてるけど、片方を地面に埋めたらどうか。上は上、下は下というのがすごく便宜的です。地下スラブとか柱の位置とか、同時にデザインしていくのがおもしろい。

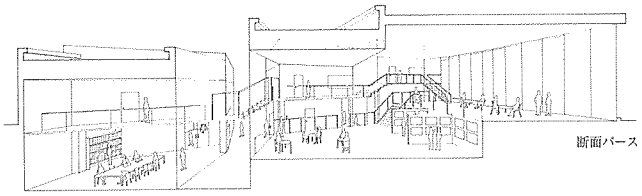
八木——ドライエリアがたまり場みたいになって、学生が集まるとか。

大佛——地下駐車場のアプローチ部分はもう少し強調してもいいと思う。ホールと駐車場の間の隙間は使えそうです。エスキスで同じものをわずかにずらせていたときより、用途で分けたことから二つの建物の関係がよく分からなくなった。仕上げで違いを出すなどの工夫が必要です。

青木——間の空間には多くの意味があると思うのですが、この案では、独立した別棟が二つあるように見える。コンポジションという標題にも関わらず、二つの建物の関係を問題にしていない。周辺の高さを使った処理は一番おもしろくなるところです。高低差をアイレベルで考えることも必要です。

井上ちひろ INOUE Chihiro





断面パース

井上――敷地は、門から社工棟方面に向かう通路になっているので、通る時に中の様子がわかるようにしました。土地の高低差を利用して段差をつけながら、静けさを必要とする作業場などと、人が多く集まるカフェを分けながら門に続いていくようにしています。製図室やワークショップなどは上階の吹き抜けに向かわせることで分け、端末室や自習室などは庭で分けています。

大佛――西面の水平の連続窓は、壁で支えにくい。全体をラーメン構造にして、柱を少し下げてその外側を自由にするといのはありえます。わざわざ欲しいところだけ壁、というのは便宜的じゃないですか。

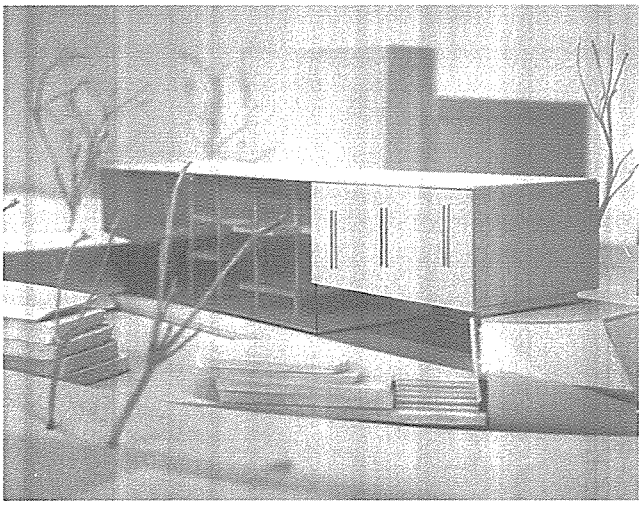
藍澤――吹き抜けの部分を柱で分割する意味が何かありますか。図面にもっと情報があれば空間的に何がしたいのかよく分かると思いますが。

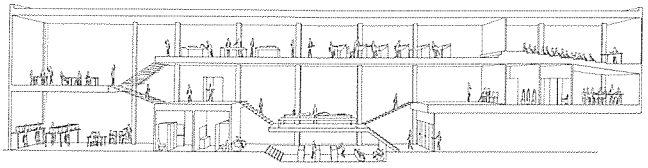
八木――模型の視覚的な効果も考えて欲しいですね。社工棟までの経路を考えると、もう少し三つの箱を振って配置してもよかったかもね。

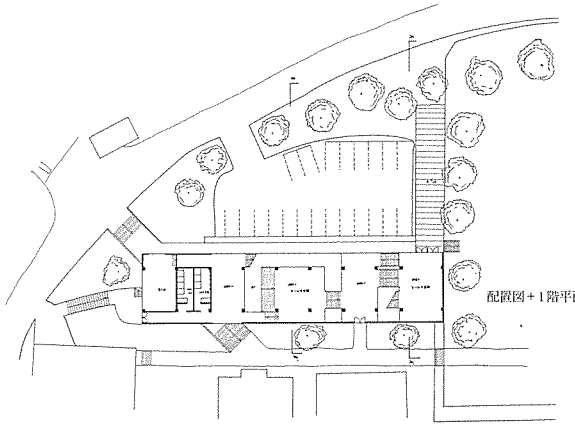
奥山――構造が滅茶苦茶になるような不思議な高低差がおもしろい。明快な円環の中にレベル差の問題をうまく持ち込んだ案だと思います。だったら模型でもレベル差をもっと表現してほしい。機能と形が明解な空間を円く並べるととても良さそうです。2つの入口がわりと魅力的ですね。敷地に切り込みが入って、その切り出し面が空間をつくる。平面図は完成しているのだけれども、何か取り出しきれていない。

青木――模型の北面が気に入っているんですが、立面図ではそう思えない。一番重要なところを強く出す図面を描くようにしてください。漠然といいものを求めたら、それをちゃんと相手に伝わるレベルにまでおこさないと。

松原洋介 MATSUBARA Yousuke







配置図＋1階平面図

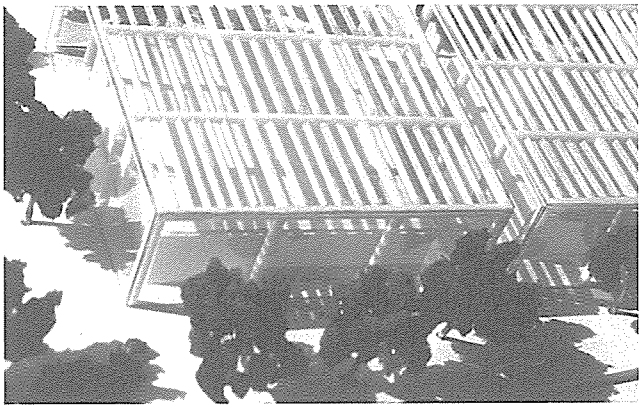
松原――建物に動線を引き込み、敷地の高低差を中に取り込みました。既存の緑地をそのまま残し、駐車面積を確保するために社工棟側に建物を配置しました。東側で既存の建物、北側で芝生のレベルに対応させることで様々なレベル差を内部につくり出し、横の視線を区切らないように垂直動線を強調しています。1階レベルでも高さ調節して視界の抜けをつくっています。

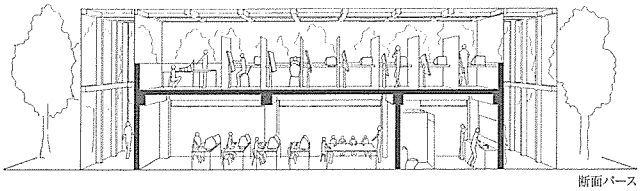
奥山――モダニスト的ですね。坂倉準三か何か。外部通路はないんですか。敷地を大分掘ってこれだけ引きをとることで強く正面性をだしている。表と裏というふうに考えていながら実際には抜けていっているわけだから、後ろとの関係をどう考えるのかということですね。社工棟がちょっと息苦しいと思うんですが。わざわざゲートということにしなくてもいいわけですよね。既存の建物の隣に建てようとすることが非常に特別なことに思えますが。むしろ、後ろ側にも空間があれば、このきれいなボリュームが強調されてくると思う。

青木――社工棟がなくて向う側に行けるならいいですよね。高さ方向に関してよく考えてあると思うけれども、他の人たちもこのぐらい神経質に高さ方向に気を使うといいですね。

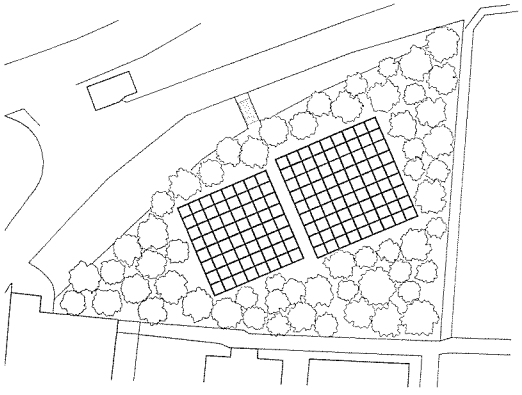
奥山――でもとてもきれいだとおもいます。もっとよく考えれば、このイメージを残しながらでも東面を全部壁にしないでつくれるのではないですか。

船場琢 FUNABA Taku





断面パース



船場——今駐車場になっている場所の環境を改善するために、敷地内を小さな森にし、森によって周囲から建物が隔てられ、その中にガラスで覆われた建物があります。内から外へ広がるように全面ガラス張りで、建物の天井には薄い木製のルーバーを付け、和らいだ太陽光が二階に注ぎます。

八木——メンテナンスを考えるとルーバーは中につけるなど工夫しないと、ガラス屋根はこんなに単純にはいかなくて、これだと温室みたいに暑くなります。この面積のガラス面を平らにするには、中でそう見せる仕掛けが必要です。

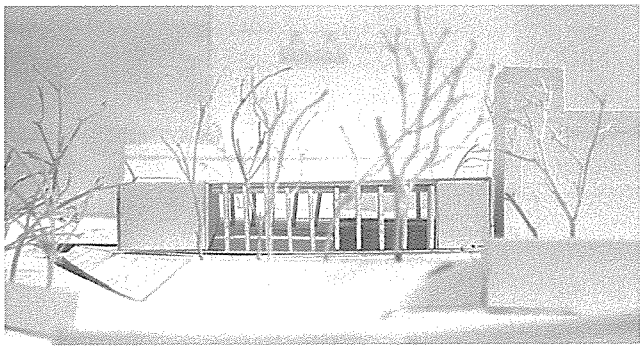
奥山——これに近いカーンやピアノの作品は、立面からはそういった仕掛けが見えないようにすごく工夫しています。フィックスガラスにすると全面空調しなければなりません。ガラスをサポートする方法や防水の方法、色々な面でもっと神経質にならないと、これだけ単純なデザインは成立しません。

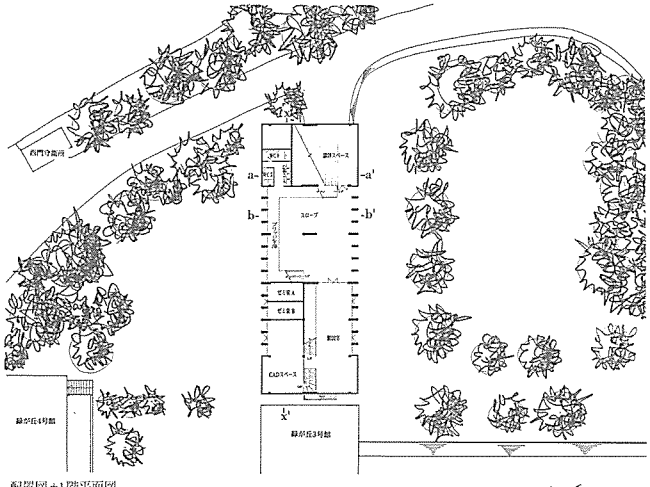
藍澤——農業用のガラスハウスだと逆に空気の流れをすごくデリケートに考えています。これは環境的にも劣悪です。

青木——ガラスの覆いと中のコンクリートの質の対比が伝わってこない。微妙に形を変えて並べるよりも同じか極端に違うもののほうがいい。建物の大きさの決め方で二つの間がどうも気になります。

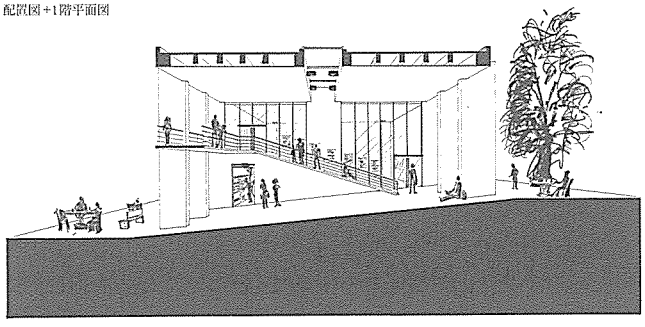
八木——内と外と言ってますが周りを森にしてるから本当に内と外の繋がりがない。こういう教室だと内か外かだけどもっと中間的なたまり場のようなものができるはずです。安易にインサイド・アウトサイドというタイトルが気になる。

村阪尚徳 MURASAKA Naonori





配置図＋1階平面図



村阪——緑ガ丘の南北の広場を最大限に活用したいと思い、建物を3号館の横に奥行を揃えて配置し、両側を分断せずに中央を通りぬけられるようにして広場の一体化をはかりました。開口は両側の柱を少し内側に下げ、柱と壁の間で上から採光を取っています。スロープの部分では食事や展示ができるようになっています。

奥山——いいテーマだと思いますが、このスロープのスケールだとあまり人は来ません。区民センターなどの画一的なロビーみたいだし。建物の容積に余裕があるんだからもっとスロープに使えばいい。普段はただの斜面の通路なのに、講評会もできるとか。スロープは状況に応じて色々な意味を帯びる場所だと思います。知らない間に床が高くなっているだけだと面白くない。勾配とプランニングを対応させるために多くのスタディをするべきです。地下との関係をもう少し考えたら、もうひとつ別のスロープがでてくるかもしれない。

青木——まとめようという意識が先行しすぎて、初めからまとまり過ぎているような気がします。自分の能力を拡大するためにとにかくいろいろなことをした方がいい。自分の能力さえ上がれば点数なんて低くて構わないんです。

大佛——スロープがあまり意識されない。水平に入れて、中で勾配をつけることも考えられます。そうすればもっとランプがとれます。

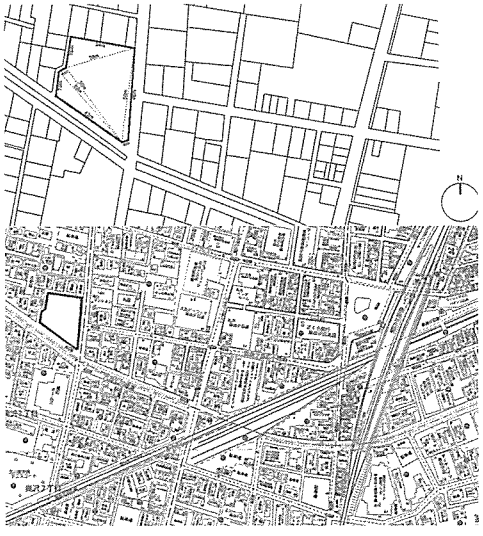
建築設計製図第二／第2課題
Second-year studio Work: Autumun Semester

「都市と住居」
"City and housing"

担当：
八木幸二[教授] **奥山信一**[助教授]
YAGI Koji (Professor), OKUYAMA Shinichi (Associate Professor)
那須聖[助手] **木下芳郎**[助手]
NASU Kiyoshi (Assistant), KINOSHITA Yoshiro (Assistant)
講評会：
青木義次[教授] **藍澤宏**[教授] **大佛俊泰**[助教授]
AOKI Yoshitsugu (Professor), AIZAWA Hiroshi (Professor), OSARAGI Toshiyasu (Associate Professor)

この課題の対象敷地は、現在月極と時間貸しの駐車場となっているが、以前は一人のオーナーが広い庭と大きな屋敷を構えていたという仮想の想定をする。このオーナーが、種々の社会的な事情によって、この敷地全体を開発し、自分と家族の為の住居も含めて、店舗、賃貸住宅等のテナント部分を含んだ住商混合形式の都市型住居の計画を求めてきた。駅前ロータリー広場から直線的に延びる道路を受けとめ、さらに今後環境整備の予想される呑川緑道に面するという立地の特性を生かし、かつ、住居と非住居部分の関係に思考を巡らした、刺激的な提案をして欲しい。なお、予想される建物は、必ずしも一棟のものには限定していない。また、この敷地の用途地域は現在第一種低層住居専用地域であるので、現行の法規制下では店舗などの住居用途を大面積で確保することは出来ないが、将来的な展望として計画して欲しい。

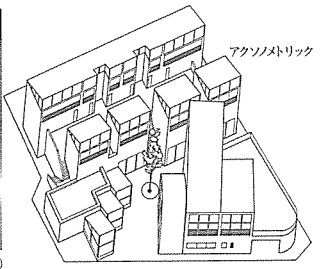
[設定条件]
- 所要スペース：オーナーハウス一戸（300m²程度を想定すること。自分のよりよい設計を実現するために、要求された条件を満たせない場合には、エスキースチェック時に教官に提案してもいい。）
- 賃貸住居（合計700~1000m²程度を想定すること。住戸数、面積配分等は自由に設定して良い。）
- 非住居スペース（業種内容は自由とする）
- 建物規模：原則として地上3階、地下1階以内とすること。延べ床面積は容積率限界に出来るだけ近づけること。下記の法的制限を遵守すること。
- 用途地域=第一種低層住居専用地域、第一種高度地区／建ぺい率（建築面積／敷地面積）=60%／容積率（延べ床面積／敷地面積）=150%／防火指定=準防火地域
- 構造：原則としてRC造または鉄骨造
- 設備：基本的に個別空調システムを想定する。
- 法規：詳細については規制しないが、下記の項目については十分考慮すること。計画内容によって異なるが、避難経路・最高高さ12m・各種斜線制限（詳しくは建築申請メモ等で確認すること）



以下の文章は1999年2月25日[木]の講評会を学生編集委員の清水加陽子（M1）がレポートしたものであり文責は編集部にあります（敬称略）。

池田太亮 IKEDA Taisuke

模型写真（広場方向）

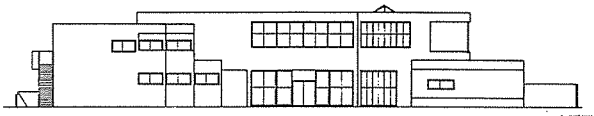


池田――自由が丘から敷地に向かって歩いてくると、銀杏の木が立っているのが見えるので、この銀杏の木を生かしてつくっていこうと思いました。銀杏の周りの空間を広場とし、住宅から出てくる人、店から集まる人の会話が弾むようなスペースにしようと思いました。すべての家の日当たりがよくなるように屋根を傾斜させました。
八木――厨房、レストランの幅が3メートルしかないし、駐車場も非常にスケールがおかしい。それにこのスペースでは、銀杏がかわいそうだね。銀杏はケヤキなどよりは確かに上にのびるが、これでは狭すぎる。
奥山――銀杏の木がテーマなのに、木の周りの空間が楽しい空間として表現されていないね。

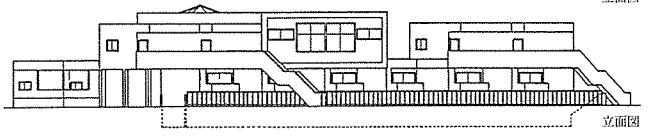
岡田康彦 OKADA Yasuhiko

模型写真

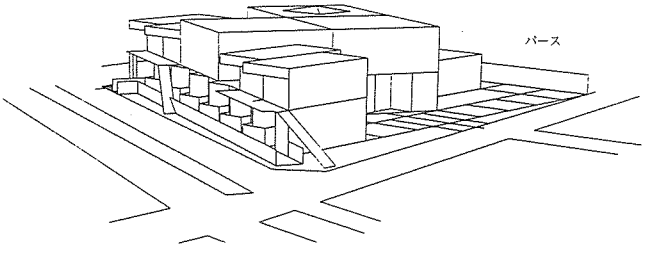
模型写真



立面図

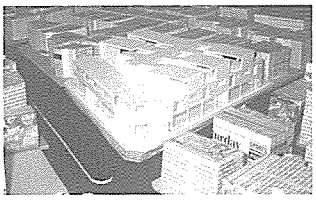


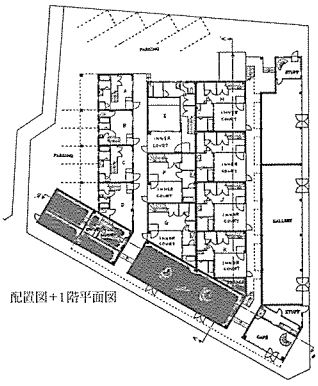
立面図



岡田――賃貸住宅は一人暮らしの人が住むようにしました。北側にオーナーハウスがあり、その間を共用できるように商業スペースにしました。それぞれ三つのスペースの違いが明確にありながら全体としての統一感を持たせるようにしました。
奥山――商業スペースはオーナーが経営するプログラムですか？ この店舗はあまり楽しそうに見えないですね。このパースは楽しくないね。CGを使ってもいいが、それはアングルを決める段階でとどめてフリーハンドで描き直すこともやってみるべきですよ。
青木――複雑なんだから図面の表記をもっと丁寧に。人間の目の高さからそのように見えるかチェックしながらやって欲しい。

卜部祐加 URABE Yuka

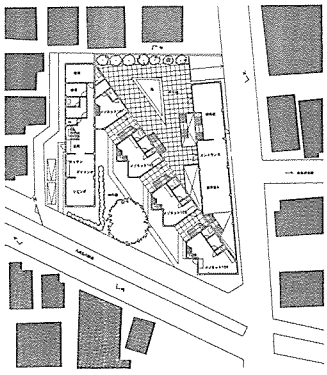


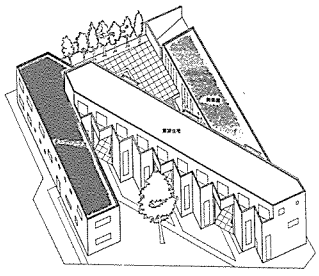


配置図＋1階平面図

卜部――自由が丘は、人気のある土地で住みたい人も多いと思い、住宅の面積を多くとるためにメゾネット形式にして3階建てにしました。
奥山――かなり不思議なプランニングだからちゃんと説明してほしい。オーナーがギャラリーをやっていて、下にギャラリーがあります。オフィス部分とオーナーの住戸部分を食い込ませているが、この二つは単に物的に食い込ませてあるだけで、連続するような空間上の相貫がないのが残念です。回り階段を作るときは八木先生の家のようにもっと小さくしてもいいですね。賃貸部分もかなり変わっていて、3階建ての長屋のようになっているね。屋根が全てフラットルーフだが意図的にやっているのかな？ もっと自分で形を工夫してもいいと思います。
八木――例えば壁がガラスブロックでオフィスで両親が仕事してるのを子供達が感じられるのならばいいが、これでは単に牢屋のような空間があるだけなのでは？ 色々なことをやっていて面白い考え方だけれども中庭空間の穴は一階まである必要があるのかな？ I字型に固執しすぎでは。屋根が平らなのが不思議だね。もっとでこぼこさせたら一戸一戸が使える部分が増えるのに。

松田徹 MATUDA Tohru



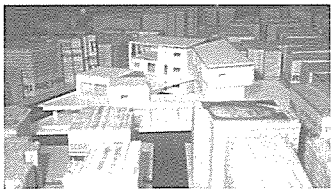


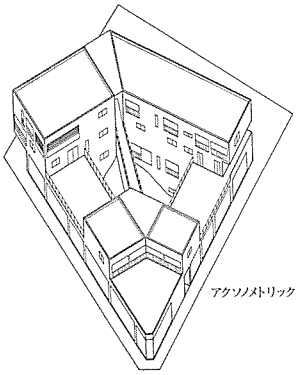
アクソノメトリック

配置図＋1階平面図

松田――二つ並べた美術館とオーナーハウスの間に斜めに集合住宅を配置することで二つの性格の違う庭を造り、それを通してこの三者が互いに穏やに関係がもてるよう計画しました。
青木――はじめにきちんと考えても、後からどんどん変えていって、実際の図面はもっと適当でもいいよ。断面図を描き始めてから、描いた図を見てまた色々考える、というやり方でよい。このエレベーションはいい感じだと思う。

竹本友美 TAKEMOTO Yumi

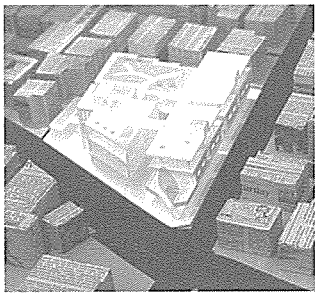


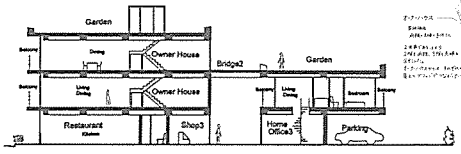


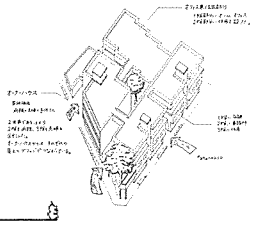
アクソノメトリック

竹本――この敷地が角地であることを生かし、人が入って来やすいように二方向に店を配置しました。店自体が集合住宅の外壁となり住民のプライバシーを高めるように作りました。住棟は二棟に分かれ間に庭を設けることにより各々の住居の陽当たりや景観を確保しています。
八木――二棟に分かれているがこの間はどうなっているの？ 微妙な角度で開いているが、この角度の根拠は何かな？ 視覚的なことなのか、仕方なくこうなったのかわからないね。ルーフガーデンがあるがそれぞれに性格を持たせた方がいいですね。一つは喫茶店のテラス、一つはオーナーの庭、というように。
大佛――意識していないかもしれないが角に店を持ってくることがちょうどアイストップになっていて、人が来てくれそうな雰囲気ですね。角度に必然性はないかもしれないが、それでもよいと思う。

岩永文英 IWANAGA Fumie



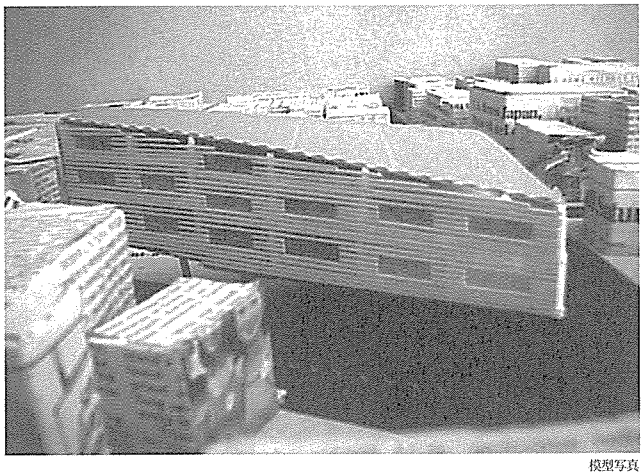




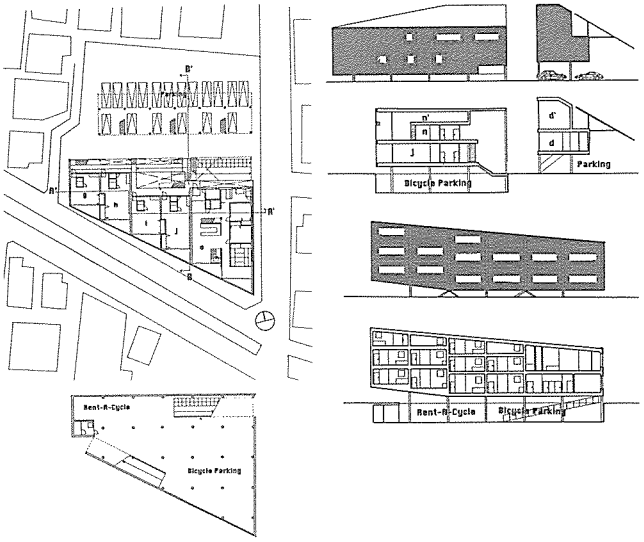
断面図

岩永――敷地内につくられた3方向の「みち」を軸として敷地内の形態に回遊性を持たせるようにしました。店舗の入り口は敷地内の「みち」に沿うようにし、搬入・搬出と入居者はなるべく外側からアクセスするようにしました。
八木――店舗の駐車場は何台かは確保しないと、いくら自由が丘といってもよくないのでは？
奥山――代官山の集合住宅みたいに中に通路を作ろうという解決法の中では、比較的うまくいっていますね。オーナーハウスを真ん中につくり、庭がとれないから屋上を使うという発想も僕はいいと思う。ただその楽しさをもっと表現できるはずです。屋根伏図が非常に重要になる。アクソメがあるが、表現が足りない。模型では少し頑張っているけど、もうちょっと楽しくつくって欲しい。

三井祐介 MITSUI Yusuke



模型写真



三井——月極の駐輪場とレンタサイクルを作りました。三階建ての個人向けの賃貸住宅と、プライベートな性格を持つ二つのものを作りました。中央の住宅へのアプローチ動線に外部の人を入れたくなかったので自由が丘からの道に対してヴォリュームをおきました。

八木——明瞭に二つのヴォリュームに分かれているのはなにか意図がありそうな気がしたのだが。屋根を斜めにしたのは、天井高がかわるとか、人が歩けるところを作るとか、理由があってのことかな？ 自転車のことは考えているが、車の止め方はかなり平凡だね。

奥山——一つのヴォリュームにしない理由は？ 一つのヴォリュームにした方が、力強いものになったかもしれない。大きいヴォリュームを持ち上げるという案に取り組んだ人がかなりいましたが、その下のスペースがかなり鬱屈した空間になってしまうわけです。それでうまくいかないことが多かった。しかしレンタサイクルとはなかなかうまく考えましたね。駅から距離があるから成立するどうかは微妙なところだが、形を積極的に作ろうとしたことは評価します。しかし、オーナーハウスは他の人と同じようにまったくつまらないね。これだけ創造力があるのだからもっと面白く設計できるはずですよ。

［総評］

八木——皆さん拙い言葉で考えを表現しようとしているが、まだきちんと伝わって来ません。必ず図面を指しながら説明して欲しい。みんなプレゼンテーションに慣れていないようだから、今回機会が与えられなかった人も含めて自分の考えをうまく述べられるように常に心がけてほしいですね。それからこれは毎年言うことですが、スケールに気を付けて欲しい。キッチンや水廻りなどはメジャーで測ったり、大きなスケールは歩足で測ったりしてほしいと思います。

青木——皆さん設計をもっと大胆に楽しく考えるべきじゃないかと思います。大胆な案を考える人は僕のような常識人のフィルターを通すことも考え、他の人はもっとふざけるくらいの気持ちを持ってもいいです。もっと複雑なことを考え、形で遊んでみてください。

発表の仕方に関して言うと、もっと大きい声でしゃべり、ジョークネタを考えるくらいの余裕が欲しい。最近コンペでもプレゼンテーションをさせるものも増えてきています。それくらいプレゼンテーションは重要です。

図面に関して言うと、図面の中にそこでどんなことが行われるのか、どんな状況が考えられるか、など自分のストーリーをまず考えなさい。そうすれば自分が設計したもののどこがおかしいのか分かるはずです。

藍澤——目をつぶって説明を聞いていて、理解できる人がほとんどいないほど、みんな説明が下手でした。行き当たりばったりに発表するのではなく、何が主張したいのか考えなさい。図面にも自分の主張が現れていないものが多いですね。みんなもっと人と議論したり相談したりしたほうがいいと思います。それから、締め切り前の一週間で仕上げた人が多いようだが、六週間も時間があったのだから、もっと前から計画的に設計するように。

大佛——これまでの二つの課題の中で自分のストーリーを描く、ということを行ってきました。その中でオーナーや住む人のことだけを考えてきたようですが、道を歩く人や周りに住む人のことも考えて、自分がストーリーを描く対象を広げていって欲しい。

奥山——この課題はちょっと残念でした。エスキースチェックに出てくる人がほとんどいませんでした。設計は基本的にスケッチを何回も繰り返し、体でおぼえるものです。スケッチとは何度も手を動かして線を引くことで、頭の中で図式を描くことをスケッチとは呼びません。ですから、いいアイデアを思いつくまで手を動かさないという姿勢を改めて、とにかく、紙の上に鉛筆を走らせてください。お互い議論することで高まっていくものだから一人でこつこつやらないで、教師や友人などいろいろな人を利用して貪欲に取り組んでください。

建築設計製図第四/第1課題

Third-year studio Work: Autumn Semester

「もうひとつの東京都現代美術館」

"Yotsuya annex of the Museum of Contemporary Art, Tokyo"

担当:

青木淳[非常勤講師、青木淳建築計画事務所]

AOKI Jun (Guest Professor, Jun Aoki & Associates)

坂本一成[教授] **奥山信一**[助教授] **塚本由晴**[講師]

SAKAMOTO Kazunari (Professor), OKUYAMA Shinichi (Associate Professor), TSUKAMOTO Yoshiharu (Lecturer)

寺内美紀子[助手] **中井邦夫**[RA] **貝島桃代**[TA]

TERAUCHI Mikiko (Assistant), NAKAI Kunio (Doctor course, Research assistant), KAIJIMA Momoyo (Doctor course, Teaching assistant)

1995年に完成した東京都現代美術館(Fig.1)は、美術作品を収集(購入・保存)し、その一部を展示室で公開すること、展覧会の企画を立て、それにあわせて世界各地から作品を貸借し、展示を行なうことがその活動の中心である。この課題では、この東京都現代美術館を補完するもうひとつの現代美術館を構想して欲しい。そこで考えられる中核施設としては、以下のものが挙げられる。

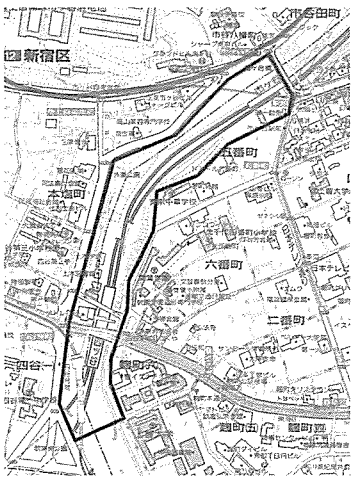
1——ファクトリー:3年の任期で世界からキュレーターを6人(毎年2人改選)招聘するため、各キュレーターが自由に使うことができる500m²程度の6つ屋内空間、および適切な規模の屋外空間が必要とされる。各キュレーターは、そこを本拠地として、スタッフと共に、展覧会の企画、制作を行ない、また同じ場所を使って展覧会を行う。展覧会として開かれているのは約半分くらいで、展覧会以外にワークショップ等の他の用途としても使われる。

2——セル:各キュレーターは開催された展覧会を3次元的に記録する。20m²程度「セル」という空間単位が設けられ、そこに展覧会内容が圧縮してインスタレーションされ、それが収蔵品となり、一般に公開展示される。セルはすべて同じユニットにする必要はなく、各セルへのヴィジターのアクセスが必要である。当初のセル数は100で、徐々に増設し、最終的には500程度の集積までを考慮に入れる。ただ、ここを目的に外から訪れる人が全体の3割程度を見込んでいるが、1日をかけてゆっくり見る人が多いため、セルに付随する機能も提案する必要がある。

3——美術館全体の管理事務施設(総計800m²程度)

[提出物]

模型(適切なスケール)/配置図(敷地エリア全体、1:1000)/各階平面図(1:300)/断面図(2面以上、1:300)/立面図(4面以上、1:300)



敷地

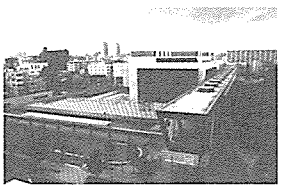


Fig.1 東京都現代美術館、設計=柳沢孝彦/TAK建築都市計画研究所、1995年

青木淳

AOKI Jun

1956年 神奈川県生まれ。1980年 東京大学工学部建築学科卒業後同大学院修士課程修了。1983-90年 磯崎新アトリエ。1991年 青木淳建築計画事務所設立。1994年「H」で東京建築士会住宅建築賞受賞。1996年「馬見原橋」で第8回熊本景観賞受賞。1997年「S」で第13回吉岡賞受賞。1999年「潟博物館」で日本建築学会作品賞受賞。主な作品:H, S, O、遊水館、潟博物館、御杖小学校、雪のまち未来館等。

以下にスライドレクチャーにて紹介された作品の一部と、1998年11月6日[金]に授業担当教官に、ゲスト・クリティークに武田光史さんを加えて行われた講評会の一部を紹介します。(レポート=長岡大樹、文責:編集部、敬称略)

『潟博物館』は新潟に残された最後の大きな潟「福島潟」のほとりに建つ。地面から最上階まで伸びる螺旋状のスロープは展示室でもあり、廊下でもあり、そこを移動することで、福島潟という連続した風景が構築される。透明な材料でできた展示壁によって、実物の潟と潟を解説した情報がオーバーラップする。ここでは、博物館としてのプログラムは個々の来館者に委ねれており、人と潟の出会う場所だけが与えられている。(Fig.2)

Fig.2 潟博物館、1997年

機能に基づいて分節された空間は必ずしも利用者の行動を受容するとは限らない。御杖小学校の教室群に囲まれた中央円形スペースは、そうしたずれを吸収する場である。そこは体育館でもあり、教室でもあり、廊下でもあり、食堂でもあり、地域のコミュニティの場でもある。(Fig.3)

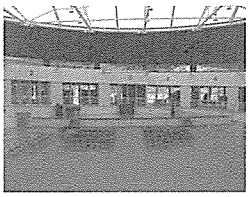


Fig.3 御杖小学校、1998年

全体は地上ボリュームと空中ボリュームから成る。敷地に隣接して高速道路がその先には海が広がる。そこを境界として建物の姿は異なるし、建物内部から見えるものも異なる。地面から空中ボリューム屋上まで伸びる螺旋階段が、性格の異なる空間を横断することで、一つの住宅が成立している。(Fig.4)

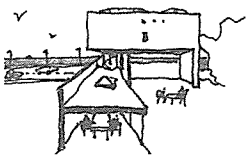


Fig.4 S(エス)、1997年

敷地3方を取り囲む万年塀の高さに2階の床の高さを合わせることから、各階の床の位置、階高が決定されている。地面下90cmの坪庭的雰囲気を持つ1階、ガラスのスリット越しの前面道路と不思議な距離感を持つ2階、近隣の住宅の屋根越しに周囲を一望することができる3階。各階が環境の差異を忠実にトレースしている。(Fig.5)

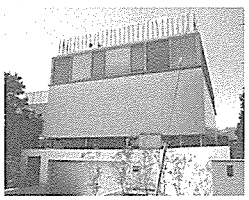
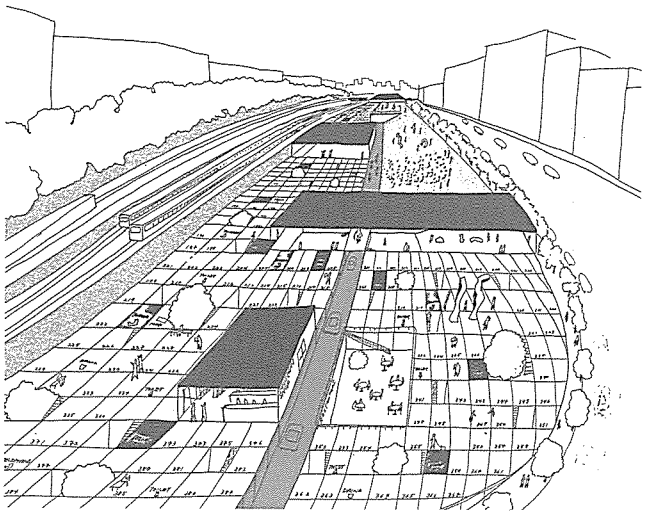


Fig.5 O(オー)、1998年

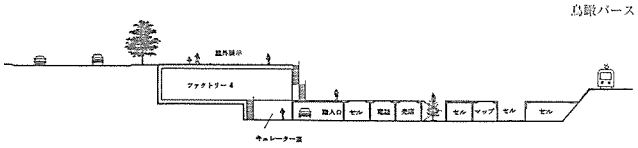
[講評会レポート]

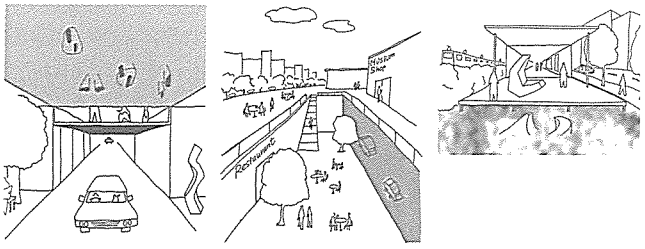
この課題の与条件として、ファクトリーとセルという美術館のプログラムと具体的な敷地が青木講師から与えられた。ここでは作品を制作する人、それらを鑑賞する人、美術館を運営する人の新たな関係とそれを成立させる空間が求められた。これに対して、与条件に準じて大枠2つの設計アプローチが見られた。ひとつめは、ファクトリーとセルの最良の関係を模索しようとするものである。この場合、ファクトリーとセルそれぞれの空間単位を予め設定することで、その新たな配列の提案がなされている。もうひとつのアプローチは、特異な敷地環境に着目し、それらを積極的に美術館の空間構成にとりいれようとするものである。取り上げられた敷地環境としては斜面、等高線、桜並木、遊歩道、鉄道、駅等が挙げられる。ここに掲載された作品は、両アプローチが相互に絡みあいながら魅力ある空間を生み出したものといえる。具体的な提案としては、ファクトリーとセルの相互関係を主軸に全体が構成され、セル内での展示、セルの増設、移動自体が美術館の特質となっているもの、来館者のための動線が明確であり、ファクトリー等の空間はそれがおかれた敷地環境とひとまとまりの場を形成しているもの、インフラの隙間や、斜面、桜並木といった敷地環境を積極的に美術館の全体構成に取り入れたもの等がみられた。

横山志穂 YOKOYAMA Shiho



鳥瞰パース





横山――計画地は、電車と道路に挟まれたフラットな場所です。6つの性格の異なるファクトリーを分散配置し、その周りをセルで埋め尽くすことで全体ができています。この美術館には、入口や出口といったものはありません。好きなところからガラスの床におり、下のセルを眺めながら散歩したり、見たいファクトリーだけ見に行くことができます。セルの間に設けられた車道からは、車中からも作品鑑賞ができます。また、美術館を裏で支えている搬入等の様子も見ることが出来ます。

武田――面的な案ですね。港にあるコンテナみたいなものを、セルの要素として拡大解釈してやったのかな。セルどうしで、立体的に積んで空間をつくるとか、色々なやり方があると思うだけど、セルが全部埋まってる必要はないのでは。

奥山――でもそうなるとファクトリーもいらなくなりませんか。

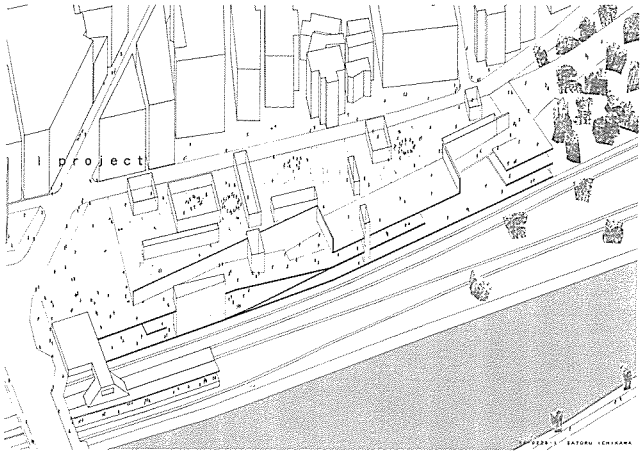
武田――ファクトリーはどこかに拠点をつくるには必要だと思う。他の提案ではセルを詰め込んでいるから、セルで空間を作れないが、これならセルで空間を作れる。

青木――この計画は基本的には建物の形をつくらないようにしている。またファクトリーや、反対側の斜面といった上から見える視点が用意されているから安心してセルを位置付けることができる。こうした上から見える場所がないとセルは迷路空間になってしまう。

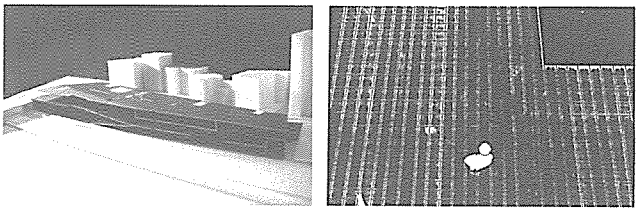
塚本――高低差はあるけど、構成は平屋なんです。部分的にはすべてを平屋におさめようようとした時のせめぎ合いでできている。

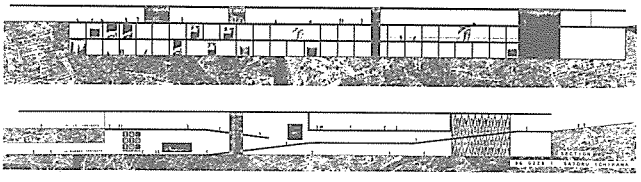
青木――セルはある意味で空間化しやすい。それをどうするかと考えると、セルのイメージがわきにくいのですが、これだといわゆる収蔵庫とは違う、セルが美術館の重要な楽しめる要素になりうる。セルは小さな田んぼみたいなものですね。

市川知 ICHIKAWA Satoru



アクソノメトリック





市川――この美術館ではガラスの床を介して上階のファクトリーから下の階のセルを見ることができ、セルに置かれた過去の展示が、新たなファクトリーの展示に影響を与えることが出来ます。見通しを良くするため、ファクトリーはフラットでニュートラルな空間になるようにしています。そして、美術館は計画地一帯のアクティビティが高まるように、桜並木がビルや住宅によって駅と途切れている場所に配置にしました。また、美術館に一枚の壁を立てることで、公共の動線空間と美術館の機能空間を分けています。その結果、美術館が閉館しているときでも、公共の動線空間に対して美術館から次の展示の報告等を行うことが出来ます。

坂本――配置図の中で建物がどこにあるのかわかりにくいのだけど、それは建物を周辺に溶け込ませるような意味合いなの。

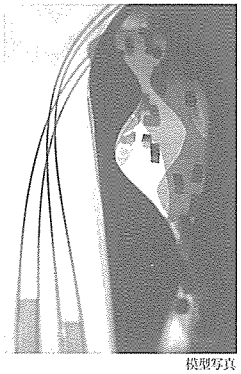
市川――そうです。最初ボリュームとライトコートの関係が、周辺の建物とその隙間の関係と逆転していたので、そのことを意識して、配置しました。

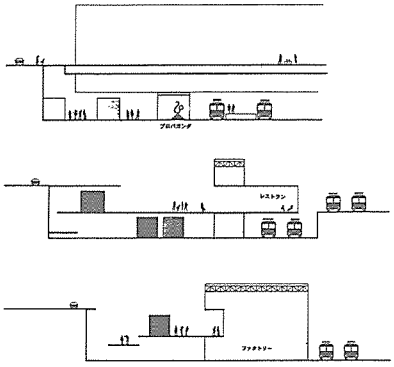
武田――ファクトリーの上に屋根がかかっているから、ガラスでできたスラブは光を透過させるというよりは、下のセルを見下ろすためにあるようだね。

塚本――ただ、セルスペースに人が入れるということで、上から見るというアイデアがおかしくなってるように思えるのだけど。

青木――そうですね。ガラスの下にセルが見えるというのは、セルのための空間が2層になったとたんに意味がなくなってしまう。それから、ライトコートは線路側の切断面あたりは明るいから必要ないし、下にセルを詰めるのならそれは邪魔になってくる。屋根がセルだとよかったかもしれない。でも、良い場所に建物を置いたので、JRの利用者と地下鉄の利用者が楽しく歩きながら乗り換えることができるでしょう。ただ、そこで何をするかと、その配置は別問題ですからもっと整理して考えると良かったと思います。

塩崎太伸 SHIOZAKI Taishin

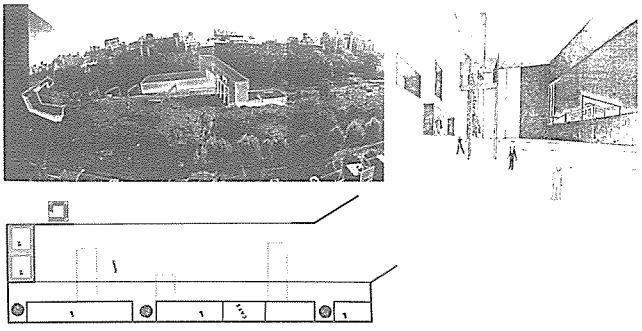

模型写真



塩崎――ファクトリーを収める層、セルコンテナを収めるレベルの異なる2つの層、の計3層で全体が構成されています。そうした空間の隙間がコンテナストリートです。セル層は全て屋外で地形に対応して曲線を描いており、その幅に対応して、ガラスで囲まれたファクトリーは性格づけられています。スラブに置かれるコンテナは移動や除去、増設が容易なため、他の用途にも転用できますし、似たようなテーマで作られたものを一カ所に集めて、ファクトリーでの展覧会とは別の展覧会を開くことができます。

塚本――コンテナのアイデアとスラブの幅が広くなったり、狭まったりするアイデアがバッティングしてる気がする。曲線が干渉しあってそれぞれの場が出来ていくというのがコンテナにまた占領されていってしまって、イメージがしにくい。狭まるところは一応ファクトリーを分節化してるわけだよね。むしろそういうところがおもしろそうなのに、システムだけをあてがっている感じがする。

関卓志 SEKI Takushi

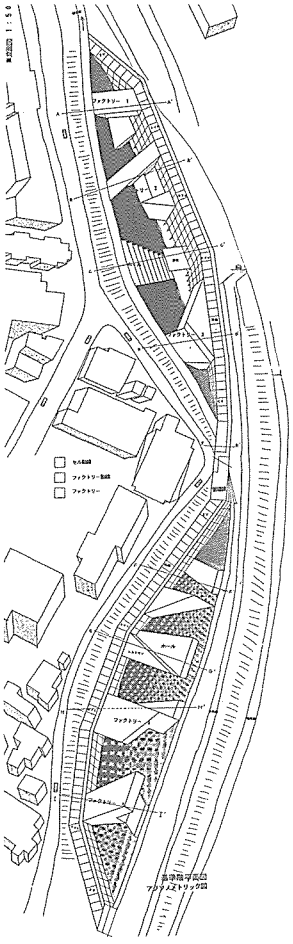


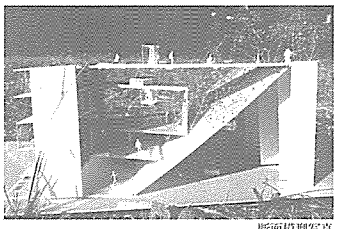
関――僕は、インスタレーションという行為における場所性を重視し、ファクトリーを土地から離さずに置きました。セルはインスタレーションをおさめる場としてあるので、できるだけファクトリーの近くに置いています。

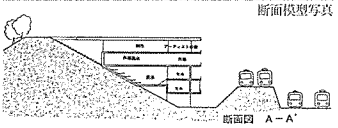
青木――この提案は、美術館がJRと提携するとよくて、跨線橋のように市ヶ谷と四谷の間をつないでるので、駅の拡大したものだと考えるとおもしろい。エスキースを通じてこの案はなぜねじ曲がりながら続くのか不明だったけど、この敷地はそういう可能性がある場所かもしれない。駅がもつ線路や跨線橋といった都市的な空間の組み合わせによって建築でもなく、駅でもないものを作る可能性が感じられる。また、ファクトリーは6つのスペースからできていて、それらをつなぎ合わせているけどプログラムとしてすべて機能しているわけではないから計画的に矛盾があるよ。

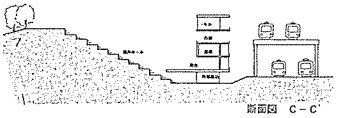
武田――これだけ動線を強引に伸ばすと、後戻りできない。駅と駅を結ぶというのはさておき、見る人にとって苦痛な美術館だね。

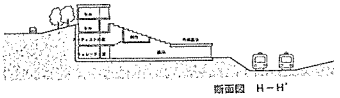
松岡里衣子 MATSUOKA Rieko

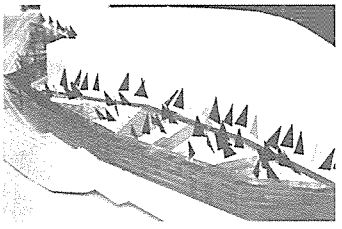



断面模型写真


断面図 A－A'


断面図 C－C'


断面図 H－H'



松岡――この美術館では四谷駅と市ヶ谷駅の間に人の流れを生みだそうとしています。そのため、セルとファクトリー動線を交差させることで、両駅を両端とする8の字形の全体を作っています。8の字の2つの輪の中に複数のファクトリーを収めており、それらの性格は交差点の管理棟を境に、斜面側に開いた静かなファクトリーと線路側に開いた開放的なファクトリーとに分けられています。静かなファクトリー側はセル越しにファクトリーを見ることができ、開放的なファクトリー側では、セル動線はファクトリーとセルの間に挟まれています。

坂本――セル動線とファクトリー動線を分ける理由は何。

松岡――セルは全部を見て回れたほうが、ファクトリーは個別に見に行けたほうが良いと考えたからです。

武田――管理棟を境に、逆転してるのはどういう意味。

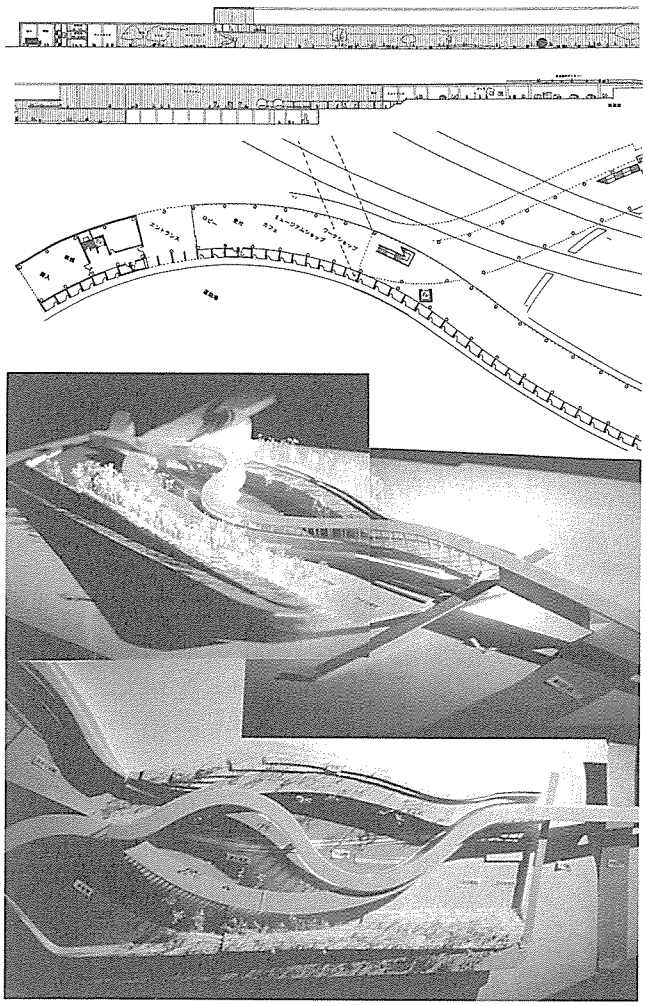
松岡――ファクトリーを同じ側に配置するとファクトリーの性格に変化が作れないと思ったからです。

青木――セルの横の通路は8の字の交差部にある管理棟を境に反転したほうが良いのではないかな。通路があってそれが開いてファクトリーがあるのより、ファクトリーがセルの向こう側にあるというのは重要だ思う。

松岡――でも、反転しない方が、移動することによる状況の変化があると思いました。

青木――それだとファクトリーの接続の仕方を変えただけになってしまう。むしろ環境の中で内部を変えていくということを主眼にすると入れ替えた方がよいのでは。ファクトリーを所々に埋めたと見えてしまうのはあまりおもしろくなくて、セルの先にファクトリーがあるのか、ないのかが偶然決まっていると思える方がおもしろいと思う。

菅又健雄 SUGAMATA Takeo



模型写真

菅又——芸術家どうしがすれ違うような美術館を作ろうと思いました。全体はリニアーな3つの空間によって構成されており、ひとつは緑道側で、残りは線路をこえるように、互い違いになったり離れたりしています。そうすることで芸術家どうしが独立することもなく、ゆるやかに関わり合えると思いました。ちょうど、すき間に出来た空間はコラボレーションのための場として想定しています。

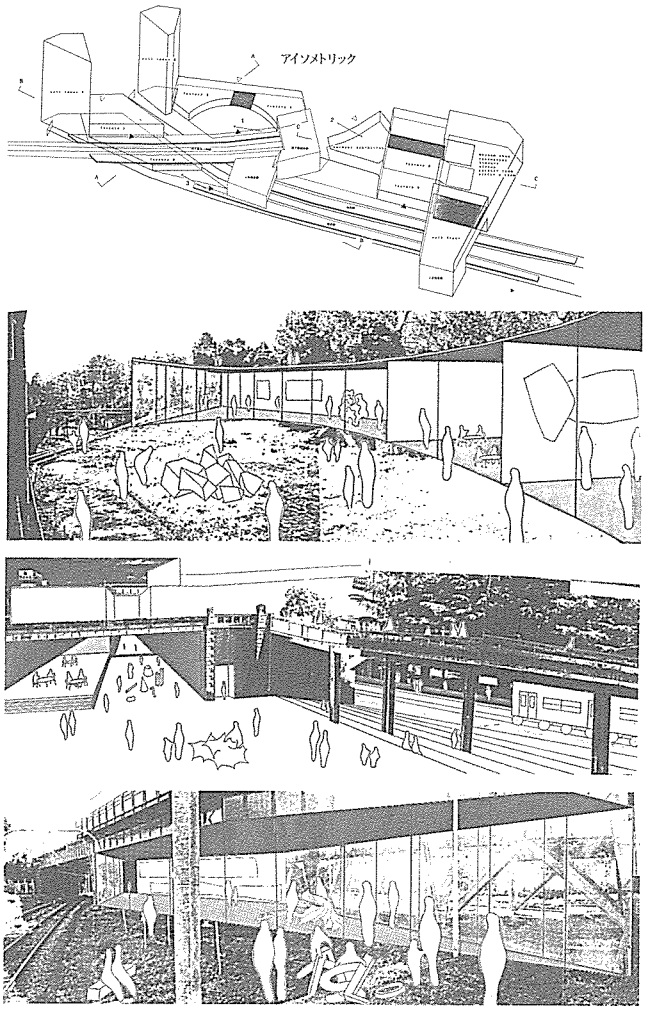
塚本——ここでの、すれ違いかたは恣意的ではないかな。もっと選択性が増えて、自然に成立した方がよいと思う。そのスケールでチューブの4接点のみでアーティストが出会うだけでは、すれ違うということを空間の問題にできているのか疑問を感じる。

菅又——実際には外の既存の動線も絡み合っているので芸術家以外のすれ違いも生じます。

武田——ファクトリーという作る行為にプライオリティーがあって、セルを見るということに関しては相当タイトな計画ですね。延々と同じ状況がつづき、一度入ったら戻れないのがつらいな。

青木——この案は、すれ違うといっているけど、会いそうで会わない。そういう構成はおもしろいと思う。同じところにいるように見えて実際はいない。形はからみあっているようにみえるけど、一つのチューブは他と関係ない。これを見ていると、すれ違うテーマがあってこういう形になったというよりも、こういう形になったから、すれ違うとしたのかなとみえてしまう。せっかく言葉を使うなら、「すれ違う」と「交わる」と「出会う」とは全部違いがあって、その違いを空間の違いにまでもっていけると良いと思う。

米華さとみ KOMEHANA Satomi



ホームからみた展示室(コラージュ)

米華——四谷駅周辺は、道路面と外堀の底面の2つの地盤面がレベル差を変えながら交差しており、6本の電車路線がその間を縫うようにして走っています。その結果、様々なレベルに利用されていない場所があるので、こうした場所を現代美術館として使うことにしました。ファクトリーは3カ所あり、各ファクトリーへは街路と駅のホームの両方からアクセスでき、ファクトリーどうしをつなぐ動線としては駅のホームを利用しています。セルは2つのタワーに収めます。

塚本——計画した個々の隙間のような場所は、元々異なる目的のために作られており、その部分はある種の関係の空間になっている。そうした場所を生け捕りにしたような方法はうまくいっていると思う。だが、実際はどこかから搬入しなければいけないわけだから、そういう仕組みがからんでくるとさらにおもしろくなると思う。平面図を書かなかったからこういう提案ができたんだろうね。

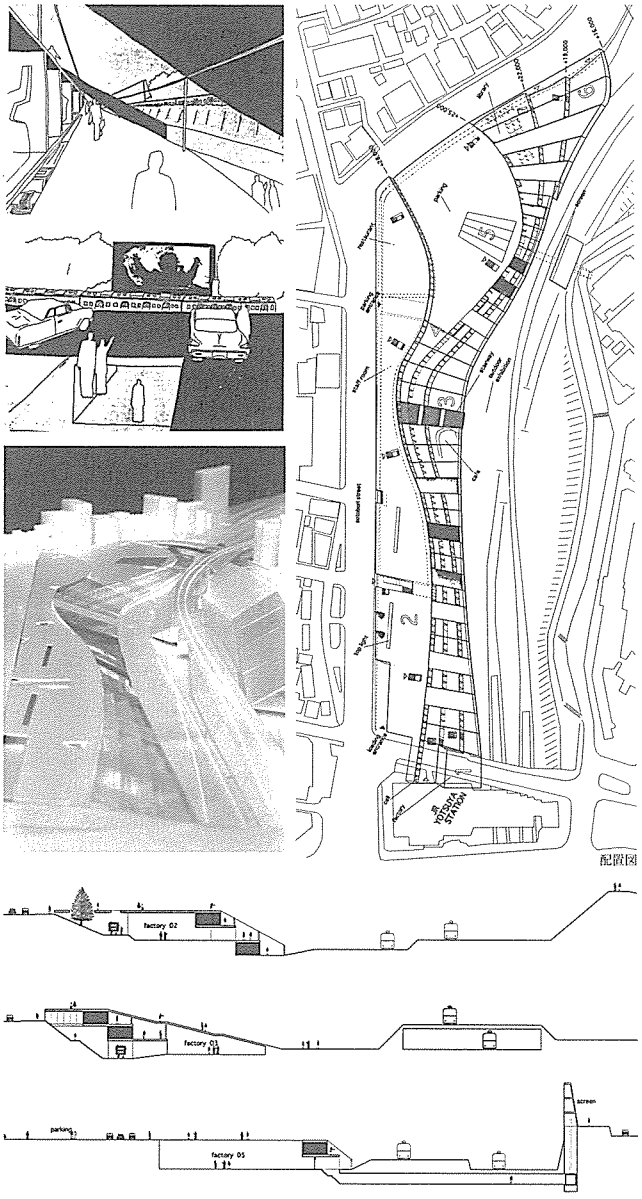
武田——セルタワーではセルはどのように上につまっていくのでしょうか。ジャッキアップしていくのかな。

米華——それは螺旋状につながっている状態で、一個ずつのセルが回っていきながら上がっていきます。

武田——セルがどういう風にガラスのケースにつまっていくのかは、見せ場なんだから、そういう雰囲気がわかるとなお良かった。

青木——模型がよくないと皆が言うのは、模型は形がみえてしまっていてこういう形のものを作りたいんだという印象を与えてしまうからでしょう。形ではなく、どう変化させるかがこの計画では重要で、コラージュはそのことをうまく表現していると思います。

長谷川豪 HASEGAWA Go



長谷川――セルやファクトリーといった空間の具体的なイメージができなかったので、まず建築の全体を決めました。ここに四谷駅から市ヶ谷駅にむかって伸びる谷の軸を強調するように、向かいの崖や斜面に対して、左右対称になるような大きな谷をつくってやりました。新しくできた斜面に雛壇上にセルを並べてやり、セルとガラスの覆いの隙間の大きい部分がファクトリーになります。なるべく色々なところから入ることができ、始まりとか終わりがないようにしました。

武田――美術館は、入場料をとらないと決めてやるとすごく楽なんだけど。有料か無料かで美術館の表現が変わる。有料だと入り口と出口ができてしまう。

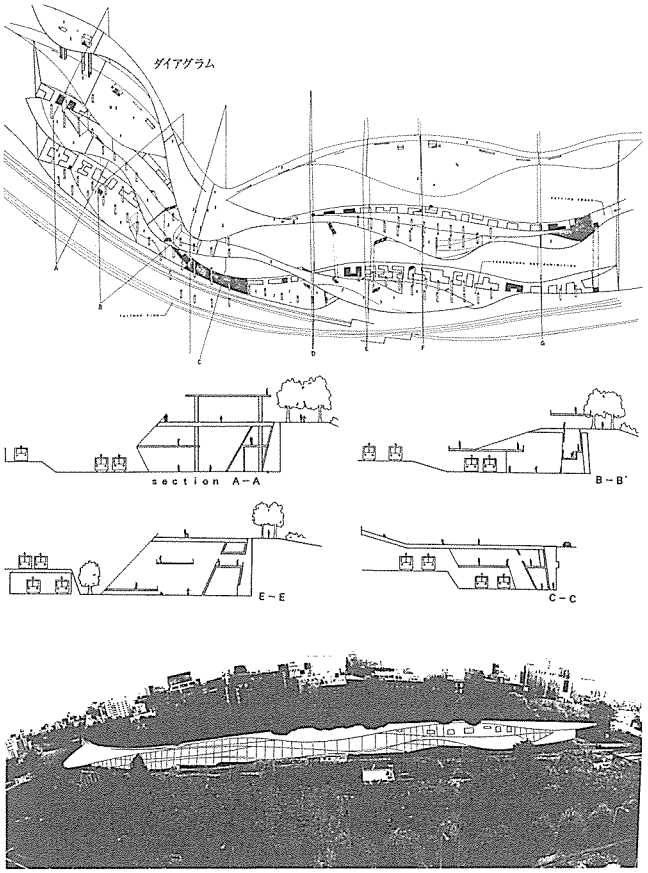
塚本――雛壇状の廊下みたいな場所はイメージできるんだけど、ファクトリーはどうもイメージしづらい。ファクトリーの一部は土の中にあって、全部建築で隣接していないんだよね。その辺がわかりにくい。

坂本――セルが埋まっているというのはわかる。セルの裏側のファクトリーは連続していくのかな。

長谷川――連続はしていません。搬入のトラックが通る道は連続している。

青木――地下のフラットなスペース、裏側のスペースは良いと思う。各階の平面図等でもっとプレゼンテーションすべきだったね。

森永真由子 MORINAGA Mayuko



森永――桜並木の延長としての美術館を設計しました。桜並木を延長したスラブ(公園部分)と、美術館のためのスラブで構成されています。スラブの形は敷地を通り抜ける電車、ファクトリーの数、内部での人の視線、美術館内の外部の位置等で決まっています。スラブを上下させることによって空間のおもしろさが出ると思いました。

塚本――勢いのある提案だと思う。でもこういうのは平面をたどるとそれぞれのスラブにはひとつの共通した性格があり、部分部分の断面の中ではまた違う関係におかれているところがおもしろいのだけど、そういうことに意識的なのかどうか。スラブの仕上げの違いによって使われ方を変えるとか、そのあたりをもっと考えると良くなったと思う。

坂本――気分はわかるけど、断面の表現がよくない。そのアクソメ的な表現をもうすこし立体的にするとよかったと思う。

[**全体講評**]

青木――敷地がリニアだから、リニアな形態の案が多かったけれど色々なリニア案があって面白かった。わかってくれていると嬉しいのだけど、建物には機能と形態があって、昔は形態は機能に従うまた、逆を言った人もいるけどそれはある意味で真実なわけです。そんな中、中身があり形があるのが建築なんだけど、そういうときに形だけやってしまう人もいれば、中身だけやって形をやる人もいる。建築でおもしろいと思うのは、形と中身をつなげる部分だと思う。そういう意味でいうと、普通のプログラムだとつながりかたが決まっていて練習にならないので、今回のようにあまりなさそうなプログラムで形を作ってもらいました。形にたどりつけなかったかもしれないけど、形と機能の間のことを考えるきっかけになったとすれば良かったと思います。

建築設計製図第四/第2課題

Third-year studio Work: Autumn Semester

「図書館を含んだ複合施設」

"Complex including a library"

担当:

高橋晶子[非常勤講師]

TAKAHASHI Akiko (Guest Professor, Workstation)

坂本一成[教授] **奥山信一**[助教授] **塚本由晴**[講師]

SAKAMOTO Kazunari (Professor), OKUYAMA Shinichi (Associate Professor), TSUKAMOTO Yoshiharu (Lecturer)

寺内美紀子[助手] **中井邦夫**[RA] **貝島桃代**[TA]

TERAUCHI Mikiko (Assistant), NAKAI Kunio (Doctor course, Research assistant), KAIJIMA Momoyo (Doctor course, Teaching assistant)

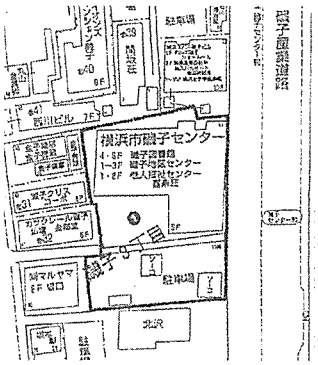
昭和50年代に建てられた磯子区図書館・地区センター(コミュニティセンター)・老人福祉センターの複合施設が現在敷地にあって活発に利用されています。図書館を含むことを条件に、その他の機能を1つ以上提案し、ひとつの公共に開かれた場所を計画して下さい。提案される機能はいわゆる公共に限りません。

今日、メディアがいわゆる書籍というものからどんどん多様化してきているということもあると思いますし、本を読むということだけを考えても静かに囲われた中で本を読むこと以外のあり方があると思います。したがって従来の図書館(本のサービス)の概念を再考・拡張する提案や、本を読むという基本的な行為に対応する新鮮な建築のあり方を求めます。きっとみなさんの考えによって今までの図書館とは違ったスペースのあり方というのが出てくると思っています。

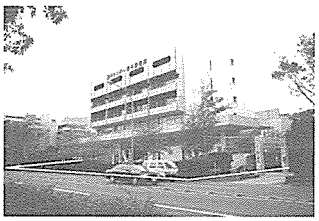
図書館は一般的には公共施設ですが、公共施設に限らず実際の設計では発注者はある目的をその建物にもっていて、必然的に目的のある部屋の集積としての建築となります。したがって人々は明確な目的をもっていないとその建物に来られないようなものになってしまいがちなのです。しかしながら私は公共施設を設計するにあたって、特定の人しか利用できないようなあり方ではなく、目的を定めすぎずに身体感覚を伴った別の空間のあり方を包容できる使い方、またそのような設計について寛容にならなくてはいけないと思っています。またこれは時代の潮流のひとつになっていることですが、そういったあり方を検討する上で建築の中と外を閉じるのか、連続させるのか、閉じたり開いたりできるようにするのかという境界条件を考えること、境界面をどのようにデザインするかということが非常に重要だと思っています。

現在の公共事業では社会目的をきちんと法制化していく方向にあるため、発注者と設計者とは決定的に感覚が異なることが多いのですが、設計者はその場において何が最も自然かという自分なりの問題意識、また立場があり、それをどう主張していくかが重要だと思います。今回みなさんは設計課題として公共施設を設計するのですから、そういったことを考えながら自由に、積極的に取り組んで下さい。

(以上、1998年11月9日[月]スライドレクチャーより抜粋)



配置図



産業道路より敷地を見る

[設計条件]

敷地:横浜市磯子区磯子3丁目(JR根岸線磯子駅徒歩12分)/地域指定:近隣商業地域(80/300)・第4種高度地区(高さ制限20m)/敷地面積:約4,000m²/規模:延床面積4,000m²以上/構造・階数:自由/必要な機能とスペースは各自で構想・提案すること。

[提出物]

図面:設計主旨、配置図、平面図、断面図、立面図、その他/模型/図面・模型のスケールは1:200を原則とする。

高橋晶子

TAKAHASHI Akiko

1958年静岡県生まれ。1980年京都大学建築学科卒業。1986年東京工業大学博士課程修了後、篠原一男アトリエ(1988年まで)。1988年 高橋寛(共同者)とワークステーション設立。1992年「高知県立坂本龍馬記念館」でJIA新人賞受賞。主な作品:高知県立坂本龍馬記念館、横浜市仲町台地区センター、大沢野町健康福祉センター、岐阜県営住宅ハイタウン北方(高橋棟)、佐川町立桜座、ほか

以下に、スライドレクチャーにて紹介された作品の一部、及び1998年12月7日[月]の講評会をレポートします。(レポート=遠藤康一[M2]、文責=編集部、敬称略)

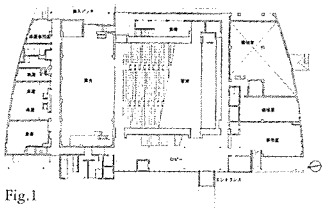


Fig.1

佐川町立桜座、1階平面図(Fig.1)
山間部に建つこの施設では住民主催のイベントが主に行われ、住民が同時に演奏者、観客、運営者となり得ることから、客席−舞台−裏方というホールの一般的なヒエラルキーが無効となり、利用上の表裏がなくなるように設計された。建築に社会的な目的以外の空間体験の介入が可能となる自由度を求めている。

Fig.2

横浜市仲町台地区センター(Fig.2)
内部は目的が固定化されすぎないように、できるだけ建築が自由なアクティビティをもつように、機能を求められた各部屋が、ロビー的な場所と空間的に連続するようなあり方とした。ファサードは住宅街に面するガラス面に住宅、行き交う人々が映り重なり合い、フォトジェニックに変化する。

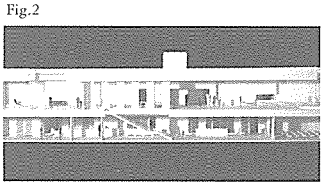


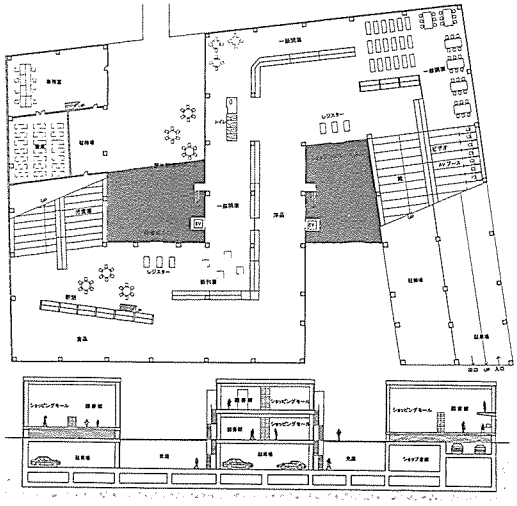
Fig.2

磯子ケアセンター(模型写真/Fig.3)
シンプルな直方体のヴォリュームは、動線と基礎的な行為が連続する流動空間ゾーンと、個別化された用途のルームの群に長手方向に二分され、その境界面でルームの雑多なアクティビティが流動空間の各部ににじみ出る。構造と仕上げは各部の視覚上、物理上の連続性の段階に対応する。

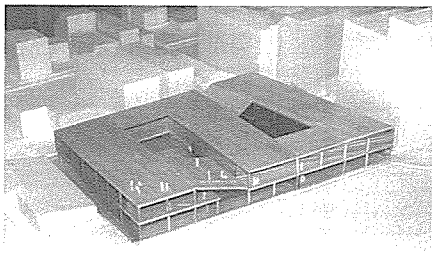
[講評会レポート]

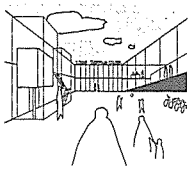
図書館を含む複合施設と題したこの課題では、大きく2つのテーマが問題にされた。ひとつは図書館をどのように計画するか、つまり本を読むという日常的な行為をどのように捉え、またその行為を行う空間を、複合する他の施設と空間的にどう関係づけるかということである。もうひとつは「公共に開く」ことをどのように考えるかということで、これは「公共」をどのように設定するかによっていくつかのレベルでの検討が可能であると思われ、周辺環境との対応の中での建築のありかた、施設の利用者が複合された複数の用途間をどのように利用するのかという内部の空間どうしあるいは用途どうしの連携のありかたなどが考えられる。後者に関しては比較的建築の全体構成に結びつけやすかったのか、積極的な提案が数多くみられ、全体的な傾向としては大きく、全体構成の中で用途が混ざり合いそれらを動線で整理するもの、用途ごとにヴォリュームを分けるもの、図書館という大きなヴォリュームに複合する用途のヴォリュームを入れ込むもの、用途を割り当てたヴォリュームの集積により全体を構成するものなど、ヴォリュームと用途を一致させた構成が多くみられた。しかし、そこに前者の本を読むという行為を深く掘り下げることから空間を提案するものがあまりみられなかったことが残念である。

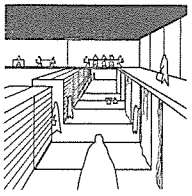
横山志穂 YOKOYAMA Shiho



1階平面図







横山――私は図書館が必ずしも目的意識を持ってくるばかりでなく、複合されるものによってもっと気軽にこれるような場所になればいいと考えました。そこでショッピングモールを複合しました。内部の構成はショッピングモールと図書館の共通点は棚であると考え、大きな棚で空間を区切って構成しました。完全に閉鎖する場所とか、視線が通る場所とか通り抜ける場所とかをつくって構成しました。

塚本――構成は面白くて、床のつくり方はいいと思うんですけど混ざり方が本当にこうなるのかっていうのが疑問です。何によってこれが決まるのか、最初は真ん中でショッピングセンターとライブラリーを分けるんだろうけど、そのまま最後までいっていいのかな？

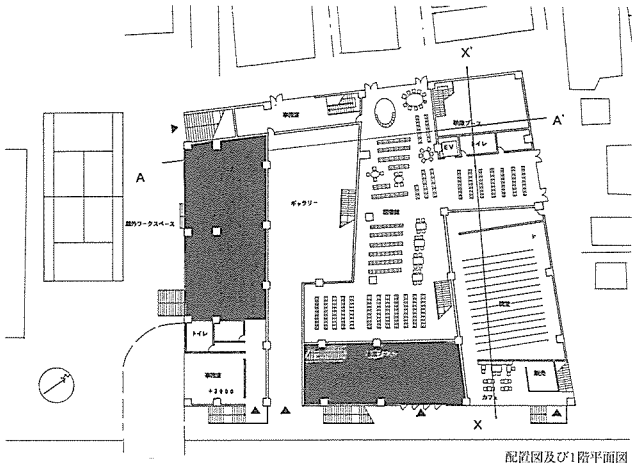
横山――入口部分は幅が広くて、上にいくと細くなってます。また天井が低い積層の部分は棚を天井までのばして完全に区切って、だんだん天井高が高くなっているところでは上下で空間がつながるようになっています。

塚本――じゃあ結構混じり合ってるんだね。でもそのときに人は行ったり来たりして混ざり合うだろうし、そうなると図書館とショッピングセンターをずっと併走させている意味ってなんだろう？　アイディアは面白いと思うんだけど説得力がもう一つだな。

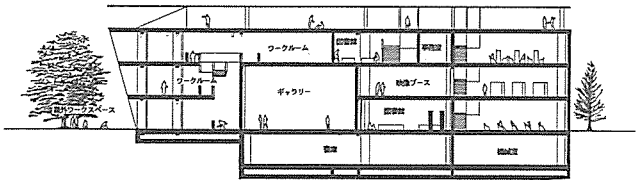
奥山――基本的には店舗と図書館は混在していてかまわないという考えなんだけど、そうすると収拾つかなくなるから最低限の統合を収納棚が与えてるんだと思うよ。ギリギリのリアリティはあると思う。

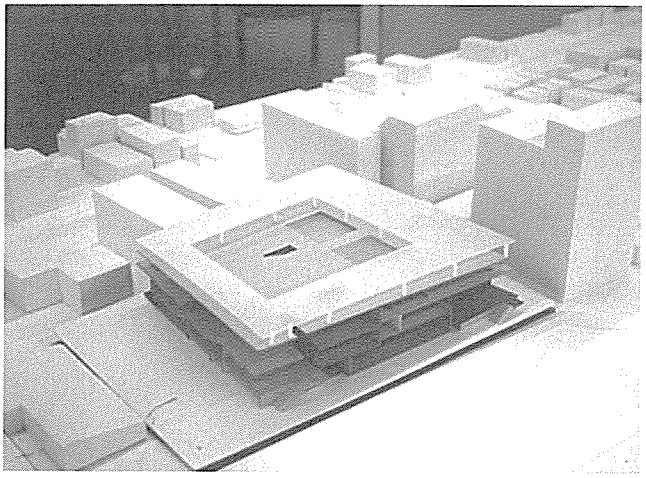
塚本――ぐちゃぐちゃに混ざり合うことに矛盾はないとしてしまうと弱くなると思う。こっち側は静かでこっち側はうるさくていいんだっていうふうになっていくと、その静けさも非常に選択的になってくるわけで、そういう静けさは単体の図書館に入ったときの強制的な静けさとは異なる。だから矛盾の問題も、もう一回相対的に検討し直すと全然違ったものになるっていうのが面白いと思う。

小松辰也 KOMATSU Tatsuya



配置図及び1階平面図





小松――複合施設にはいるときに、まずエントランスホールに入って中の機能に進もうというのではなくて、エントランスから目的に応じた様々な機能に直接連続する動線を計画しました。屋上が全ての動線の結節点となっていて、通ってきた機能とは別の複合された機能をそこで発見することで次の目的を見いだすという関係を考えました。

奥山――これはエレヴェーションが重要なんだよね。

塚本――南東立面図に非常階段がでてきて正面に見えないけど、エントランスホールを無くした非常に極端なものになったね。

高橋――個人住宅のところの隙間はどうなってるの？

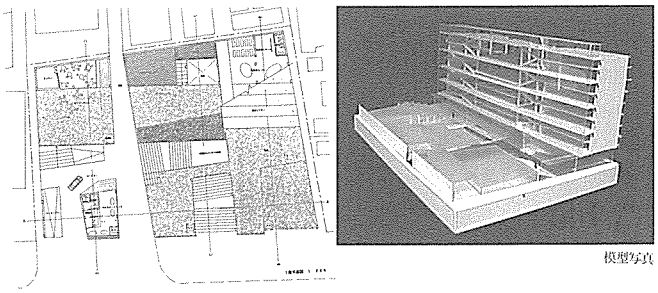
小松――造形の専門学校を複合する機能として想定しているので、そのようなものであれば時間外は市民に開放してカルチャースクールなんかもできるので、その作業スペースとして半外部的な場所になってます。

奥山――構造までしっかり考えられるとよかったね。

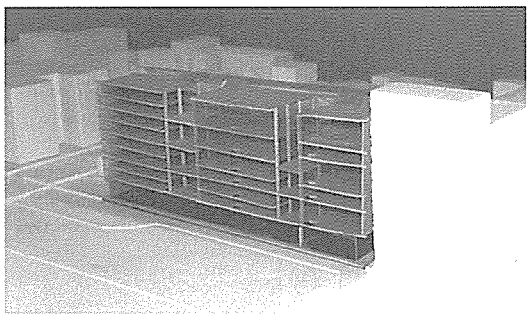
塚本――この計画は裏側からも入れるし、建築の足下周りが重要なんだから敷地境界をちゃんと描くこと。

高橋――かなり図面的にも欠落している部分があるけど、これはエスキースを重ねる度にだんだんよくなっていったからこの調子でこれからも努力を続けて欲しいです。

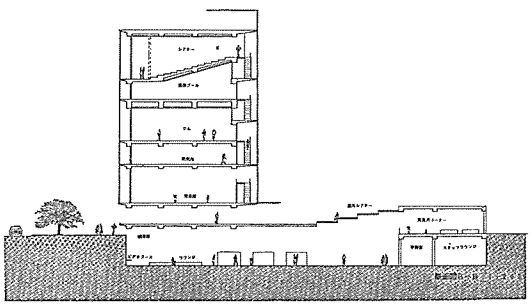
松岡里衣子 MATSUOKA Rieko



模型写真



模型写真



松岡——都会にあるような地域センターと避暑地にあるようなセミナーハウスの複合があれば、地域の住民の活動と他の所から来る人たちのセミナーの活動とがふれあうことができると思い計画しました。地下に平面的に図書館があって、その上にコミュニティーセンターやセミナーハウスに必要な機能が積層されています。それにより平面的な方向と断面的な方向との間に関係が生まれてくると考えました。産業道路沿いに積層による壁ができ、その奥にある図書館の屋上の外部空間に壁の中の機能との対応関係によるさまざまな新しい活動が生まれると思います。

高橋——階高に対する調整はどうなっているんですか？

松岡——ヴォリュームを置いて、道路側から見て周囲との高さ関係を考慮したのと、内部のホテルなどの室数を調整しました。

坂本——図書館の屋根面はどうなってるの？

松岡——屋上庭園になっているのですが、コンクリートの部分と芝生の部分とに分かれています。図書館の内部も上の庭園や上に積まれている部分の機能との対応関係の中で互いに融合するように計画しています。

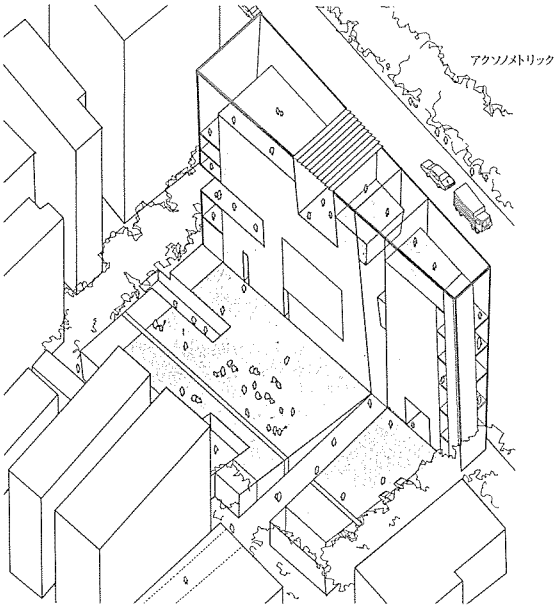
奥山——エレベーションは実際どうなるの？

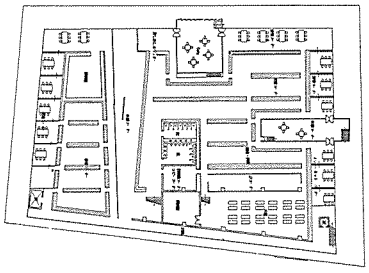
松岡——道路側は大きな3つの機能が分かるように3つに分けて、ガラスの外にルーバーがきます。

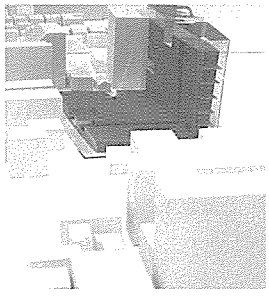
塚本——じゃあ階高の違いはルーバーを介して何となく分かるようになってるんだね。いろんな場所とその関係をあらゆる角度から決めていったというのがよく分かります。

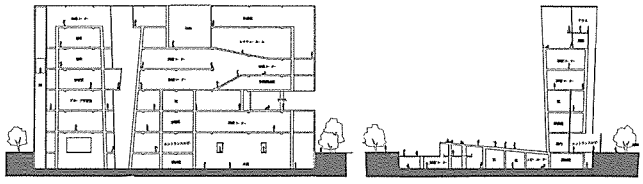
坂本——プログラムやスケールを含めてとてもリアリティーがあるね。もうちょっと面白いことをやってほしいという気がしないでもないけど、そのリアリティーがそれを補ってるという気がするね。

関本丹青 SEKIMOTO Mio









関本——この敷地は正面に産業道路、鉄道、高速道路といった流れのあるものが面し、裏の方に住宅地という異なる性格を持つものに面しているので、正面に対して壁をたてることで、壁と周りの建物とによって囲まれてできたヴォイドのスペースを公園として人々が楽しく使えるのがいいのではないかと思って設計しました。また断面がL字になっているんですけど、壁の部分の断面と下の部分のプランとが対応するように考えました。

高橋——かなり謎があって不思議なので選びました。

奥山——平面と断面を同じにすることにここまで執着するのはレトリックなんだろうな。

塚本——公園までどうやって人が入ってくるの？ ここまで壁で閉じていると気になるよね。

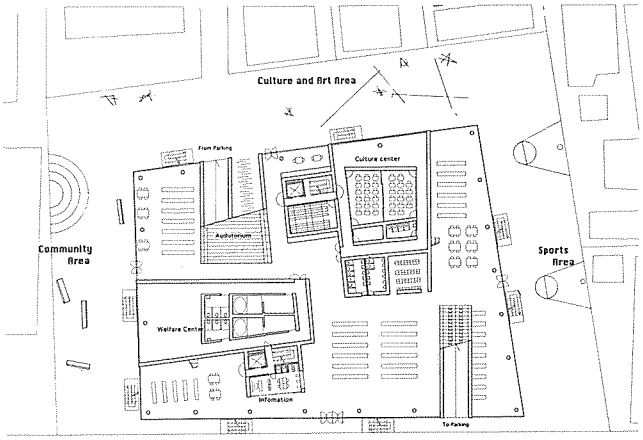
関本——本屋の上がブリッジになっていて入れるようになっているのと、全面の壁の部分にはもっと穴があいています。

塚本——もっと穴があいてるといっても積極的に大きな穴があいてないと面白くないんじゃない？

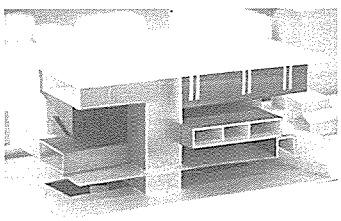
坂本——この建築は容積率がかなり高いよね。ここは300%なんだから「容積率ぎりぎりでかっこいい形をつくろうとしました。そのときに本を開いた形にしようと思いました。」っていう風にストレートに建築のかたちを説明した方が説得力が出てくるよね。

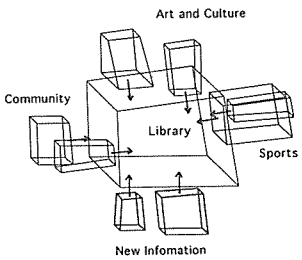
奥山——地階の処理はかなりうまくいったね。

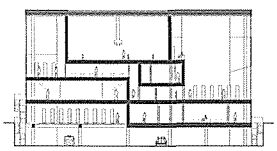
沢田正樹 SAWADA Masaki

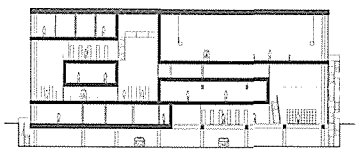


配置図及び1階平面図









沢田――様々な複合機能をヴォリュームに立体的に貫入させ、人々はそれぞれの機能に目的に応じて直接入れるようなものを考えました。また正面の歩道がかなり広いのでこれを敷地内の外周に引き込むことで利用し、建築をその中心に配置することで裏が無い、4面全てがファサードとなるような建築としました。

高橋――外壁はどうなってるの？

沢田――表現しきれませんでしたが、全面ガラスではなく4面全て違ったスポーツ施設・教育施設・コミュニティ施設・図書館に対応したファサードを考えています。

奥山――それぞれの施設にはどうやっていくの？

沢田――上へは外階段でいきます。あとは中からつながっています。

奥山――メインのアプローチが階段っていうのはちょっとまずいんじゃないか？ それぞれエレベーターのシャフトがあってもいいんじゃないの？

高橋――構造は柱なしでもつように方法を考えた方がよかったね。

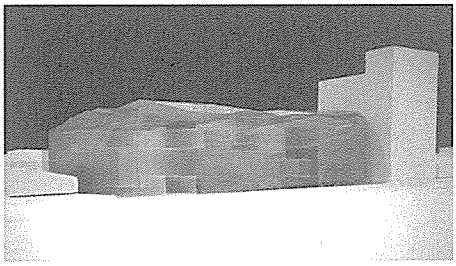
坂本――ガラスのサッシと方立てを兼ねるとかね。

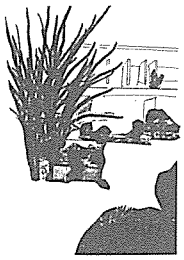
塚本――動線を犠牲にして成り立っているようなところがつらいな。

坂本――コンセプトは割合明快なんだけど、やっぱりホールへ行くのに裏側へ回って階段を上ってというのはちょっと成立しないよね。地上から離したところに外部化された共通ロビーのようなものを設けて、そこからならどこでも行けるというようにした方がよかったね。そこまでの高さ関係はエレベーターを設けるとかして解決する。そういう構造を明確に言えるともっと生き生きしてくるね。

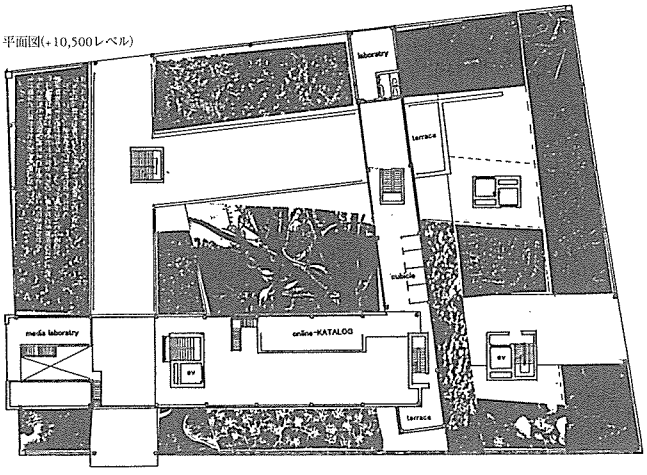
高橋――周囲に外部をまわしたんだけど、これをやっぱりもうちょっと多くとって接地階をもっとすかすかにしていくか、あるいは建築をもう少しコンパクトにすれば外部空間は隙間って感じではなくなって、もっと充実した感じになるよね。

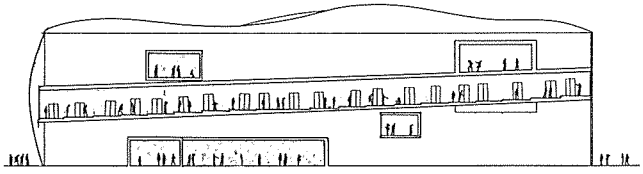
菊池聡子 KIKUCHI Satoko





平面図(+10,500レベル)





菊池――植物園と図書館の複合を計画しました。様々な種類の植物が集まることで植物でつくられるひとつのヴォリュームの中に様々に異なる環境が生まれ、そこに図書館の用途を挿入することで植物と隣り合った図書館という関係が成立すると考えました。4つのコアが縦動線となって植物のヴォリュームの中の各スペースに連続します。

高橋――模型と図面のプレゼが植物園というホカホカした感じとよくマッチしている。植物園は1層で完結しているのですか？

菊池――小さな植物であれば、内部のヴォリュームの上のスラブ上でも大丈夫ではないかと考えて計画しています。

高橋――ふにゃふにゃした外皮を支えるためにどのような構造を考えてるの？

菊池――張力ドームというか、全体は連続したフレームでできていて、それぞれがロープの張力でもっています。

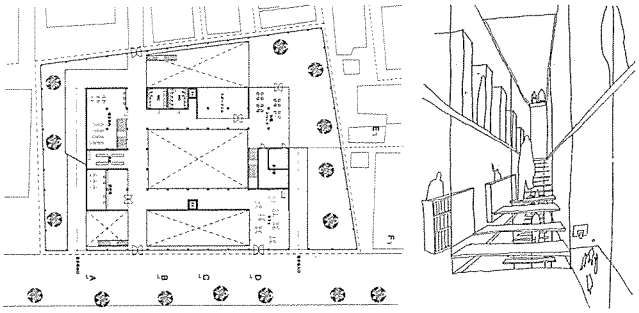
坂本――外側はフレームとロープだけで雨風は自由に入ってくるの？

菊池――はい。でも必要な部分には最初からフレームを入れてしまえばいいと考えています。

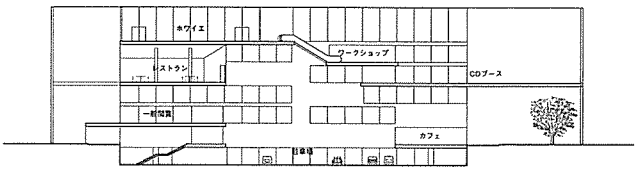
塚本――サファリパークの中をジープで走っているみたいに、関係が外と完全に切れていて視覚的にしかつながらない内部というか、そういう関係が図書館と植物園の中にあるように感じるんだけど、話を聞いてると人は図書館のヴォリュームの上にも出れるし、そういったコントラストは実際無いようだ。

奥山――植物園だけを見ることもあると思うんだけど、植物園のヴォリュームがいくつかに分散しているね。そういう関係はちょっと疑問を感じます。

長谷川豪 HASEGAWA Go



配置図及び1階平面図



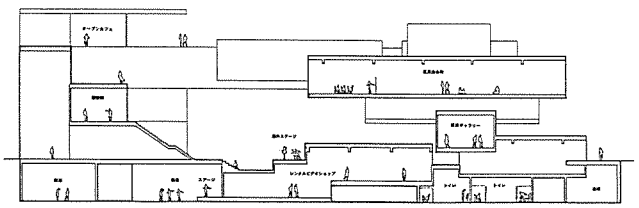
長谷川――図書館の全体の中に複合する要素を入れ子の構成で作りました。図書館のメイン動線を設定してそこに入れ子が絡むようにしました。図書館の動線がのぼりながらいろいろなスラブに入っていくのですが、一度そのスラブを通過して複合する機能のヴォリュームへと到達するようになっています。ですから複合する機能は動線の終点になっています。

塚本――ヴォリュームが2種類あるっていうのがよく分からないね。昼間は外のガラスのヴォリュームが見えるんだけど、夜になると中のヴォリュームしか見えないとか、そういうふうにすると面白いのにさ。

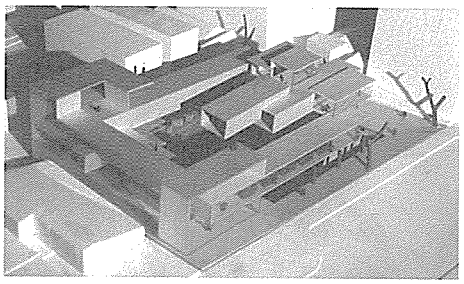
高橋――入れ子をクリアーにするとしたら、内側のいくつかのヴォリュームと動線の関係をもっと整理した方が分かりやすくなると思います。

塚本――ダイアグラムを見てると入れ子というより、むしろスラブがいろいろ入り組んでるのが強いよな。あと外壁を最後までデザインしていれば外側からの関係で入れ子やスラブを考えていくってこともできたと思う。やっぱりそういう検討をいろいろやらないで終わらせたのは、この建築を定義する上で必要な条件をひとつ省いたってことになるからね。

塩崎太伸 SHIOZAKI Taishin



断面図



塩崎――複数の機能どうしの組み合わさり方、また各機能を公共に対して開く、閉じるといった選択方法を自由にするために、チューブのようなブロックで建物を構成しました。また地域の人たちが集う場所として、路地的な広場やテラスをたくさん設けることを考えました。複合する施設であるカルチャースクールを地下の周囲に配して、囲まれた内側が広場となり、そこからたくさんの階段によって他の機能と接続しています。

高橋――この計画だとわりと近い機能がブロックで隣り合っているんだけど、まったく異なった機能が貫入することでそこで起きる事が再編成されたり、それぞれのブロックが同じ体積でもプロポーションが異なることで全然違う暮らし方や使われ方ができるっていうスペースブロック的な発想を拡張していければもっとよかったね。

塚本――結局孤立した部分の集合になっている気がするな。でもそうではなくて全体の中で部分が相対的に位置づけられていくようなものの方が面白いと思う。いくつかの構成のイメージを全部試してみたっていう感じだね。それぞれのエッセンスはそれなりに面白い。

坂本――かなり均質的な空間の中にヴォリュームを直線的に配列していくという考え方だと思う。というのは抽象的な配列と建築という実体の間には確かにズレが起こってくるけれども、それがこの建築の場合はブロックというある単位を設定してそれを配置している、でもそれを実体として支えるイメージがないから、やっぱりそこで矛盾が起こってるんだよね。考え方と作り方という実体とをどう対応させるかっていうことを考える必要があるよ。

[総評]

高橋――みんな、はっきりした構成形式をつくっていこうっていう意志が強いですね。そういうアプローチは志が高いから良いのだけれど、一種の社会的なリアリティと空間の構成の問題がどこまでフィットしているかということは考えなきゃいけないことだと思います。ユニークな形式をもってなおかつそこにリアリティーを備えるっていうのは難しいよね。もうひとつは公共に開くというのをどういうふうに解釈してるか、みんなの考えの広がり方と発想のユニークさとその飛距離を見たかったです。図書館以外の機能のえらび方が意外とみんな固定的な感じがするよね。中にはすごくユニークなプログラムをドッキングさせてくれた人もいたんだけど、果たしてみんなの提案で図書館っていうものがどこまで変わり得るかってのを考えたときにいまひとつ充実感を得られませんでした。ある意味ではアイディアがリアリティに対してちょっと引き腰であって、アイディアは出したけどそれに対して責任もてませんっていうのが多かった気がします。もうちょっと素朴に、本を読むときの行為と場所との関わり合いから、新鮮な形式の展開が出たかもしれない。本との接し方の多様さや、本棚と机と椅子の関係みたいに身体的なレベルの話を建築化していける人がいたなら、また一つ違った提案になったと思う。でもそうではなくて少し大技の構成のなかに、複合用途をからませてきた人が多かったと思います。ある意味で東工大ってのはそういう渦の中にいるのかなぁっていうのが感想です。ダイナミックな決め技的な形式を用いるのと、それにがん字搦めになって身動きがとれなくなるのとは背中合わせだから、それをもう一度相対的に置き直してみる柔らかさが欲しいと思いました。

建築設計製図第四/第3課題

Third-year studio Work: Autumn Semester

「都市に棲む」

"Housing in urban space"

担当:

武田光史[非常勤講師、武田光史建築デザイン事務所]

TAKEDA Koji (Guest Professor, Koji Takeda & Associates)

坂本一成[教授] **奥山信一**[助教授] **塚本由晴**[講師]

SAKAMOTO Kazunari (Professor), OKUYAMA Shinichi (Associate Professor), TSUKAMOTO Yoshiharu (Lecturer)

寺内美紀子[助手] **中井邦夫**[RA] **貝島桃代**[TA]

TERAUCHI Mikiko (Assistant), NAKAI Kunio (Doctor course, Research assistant), KAIJIMA Momoyo (Doctor course, Teaching assistant)

21世紀に向けて都市に住むことの重要性がますます高まっています。環境の問題やエネルギーの問題、都市のインフラなどの問題ばかりではなく、雇用や教育や医療の機会など、さまざまなテーマがこれからの都市にはあります。少子化や高齢化社会の出現も目前に迫っています。

ところがバブルの後遺症の痛手は深く都心の人口が激減し、子供の教育の機会すら都心では失われつつあります。地上げ後の空き地や駐車場は、都市に多くの空洞を作り出してもいます。

都市の中に人が住める場所を積極的に見いだして、そこに『集まって棲む』ことを今回の課題としたいと思います。選んだ場所によって、住まいかたや集合住宅としての性格も変わるでしょう。生まれたときから亡くなるまでのロングサイクルをすごす住居もあれば、ゲリラ的なテンポラリーな住居、ホテルのような都市の漂流者のための住居もあるかもしれません。その場所に棲むことの意味づけとそれにふさわしい建築を提案してください。

以下にいくつかの場所の例を上げてあります。

湾岸に棲む(フジTVの横)/廃校に棲む(銀座の小学校)/商店街に棲む(大岡山北口商店街)/オフィス街に棲む(丸の内)/繁華街に棲む(渋谷センター街)/地下に棲む(新宿西口の地下街)/公園に棲む(宮下公園)/北向きに棲む(幹線道路のビルの北側)/道端に棲む(山手通りの道路拡幅予定地)/駅に棲む(原宿駅や目白駅)/ビルの表面に棲む(NTTの電話交換ビルやデパートなど無窓の建築の外皮など)

[提出物] 模型、断面図、配置図、平面図、立面図(図面はA1サイズ)

武田光史

TAKEDA Koji

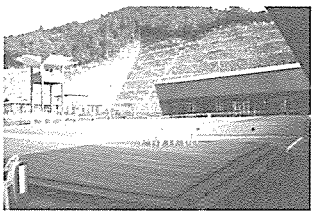
1950年宮崎県生まれ。1973年東京工業大学工学部建築学科卒業。1973-78年同大同学部同学科篠原研究室研究生。1978-85年同大同学部同学科篠原研究室助手。1985年インドネシア、カリマンタンにて農村開発にたずさわる。1986年武田光史建築デザイン事務所設立。1992年富岡の住宅(社団法人東京建築士会住宅建築賞金賞受賞)。1998年ふれあいセンターいずみ(日本建築学会賞受賞)。主な作品:七尾の住宅、富岡の住宅

以下に、スライドレクチャー(1998年12月11日)と、即週設計の発表および講評会(1999年1月25日)の一部をレポートします。(レポート=丸山美紀[M2]、文責=編集部、敬称略)

保土ヶ谷の住宅

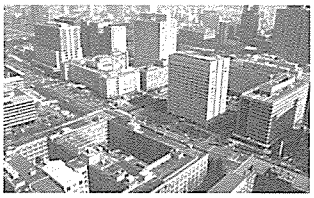
どこにでもあるような建て込んだ商店街の住宅。例えば、コートハウス等のある種の自閉的な形式が、都市環境を否定的に捉えていることを暗に表明するように、都市住宅は都市との関係性が現れざるを得ない。しかし、この住宅は商店街側に半屋外のテラスを設け、ルーバーで覆うことにより、外部環境を肯定的に取り入れ、そのファサードは逆に明るい表情を商店街に与えている。都市に住むことは、都市環境をつくることでもあるのだ。

カリマンタンの水上住宅:ピロティで持ち上げられた家々。川は人々の交通手段でもある。環境の様々な要素がそのまま形となって現れている。



ふれあいセンターいずみ:面積のほとんどが山地で平らな土地がない村に、山を開き広場をつくることで、人々に場を提供している。

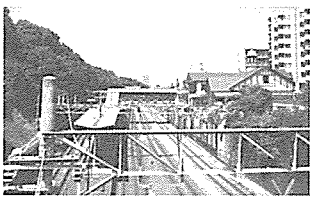
設計に先立ち7グループに分かれて行われた即週設計では、各グループが設定した敷地において、ヴォリュームの配置、生活スタイル等が検討された。



丸の内のオフィス街のビルの表面に住居ヴォリュームを配した。

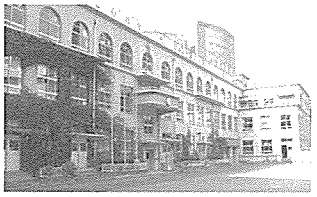
宮下公園に住宅を含む様々な用途に対応したヴォリュームを配置。

雑居ビルの隙間を埋めビルとビルをつなぎ第二のスカイラインをつくる計画。



原宿駅と明治神宮をつなぐヴォリュームを線路の上につくり神宮の森を原宿側に開く計画。

表参道、東工大などの並木道の上に、木々の間に住居のヴォリュームがくるように計画した。



銀座・泰明小学校が廃校になった場合を想定し建物を残しつつ集合住宅に転換する案。

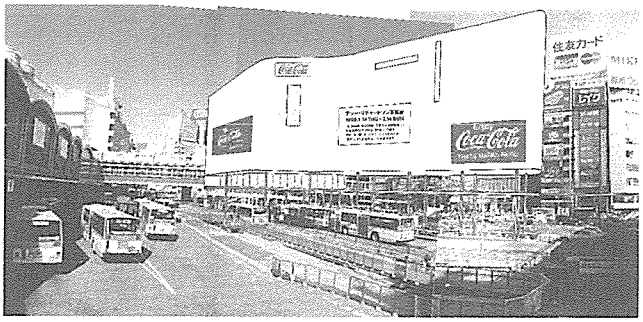
[講評会レポート]

この課題は敷地や居住者像などの一切の設定を外したところから始められた。ここでは都市に従属するものとして建築をつくるのではなく、都市の現状を把握しそれに対応した良好な居住環境をつくるという、集合住宅がさらに都市の環境をつくりだすような都市/建築の相方向性をもったものが求められていた。つまりこの課題のテーマは、求心的で都市に対して閉じたものではなく、誰にも見逃されがちな都市計画の余白に開放的な住宅をつくることであったようだ。まず始めに複数のグループに分かれて即週設計が行われ、オフィス街や公園、ビルの隙間などさまざまな敷地に集合住宅が計画された。そこから展開して各自の設計が進められた。それらの計画を敷地の種類により以下のように大別することができる。①渋谷駅・新宿駅などの主要駅、バスターミナルの上に、様々な施設を複合させる、②水辺などの環境や眺望の良さを活かす、③銀座の立体駐車場や新宿のゴールデン街といった過密な地域に法規的な問題などで生まれた空白を利用する、④山手線や渋谷川などによって分断されている地域に線状にヴォリュームを配置することで両地域をつなぐ、等である。都市の残余部分を埋めることに終始する案もみられたが、場所の特性を生かして都市居住像が提案された計画もいつくかみられた。どの場所を敷地として選び、何と関係づけるのかということに学生の都市に対する問題意識が現れており興味深い課題であった。

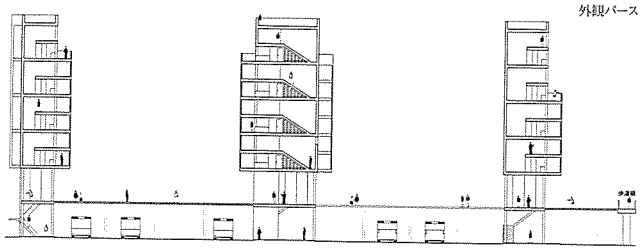
[ゲスト・クリティーク]

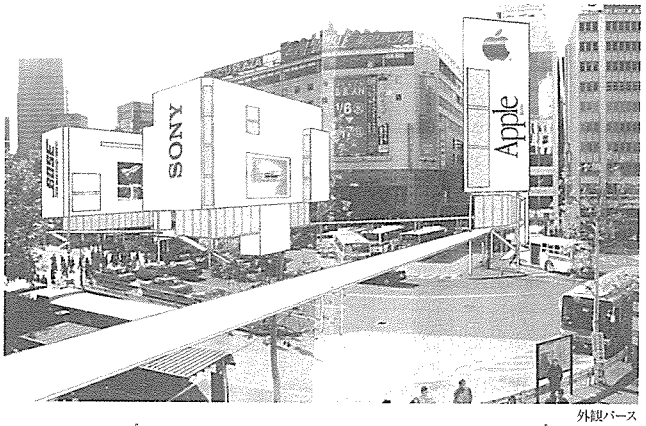
高橋寛[ワークステーション] **金箱温春**[金箱構造設計事務所代表]

長谷川豪 HASEGAWA Go

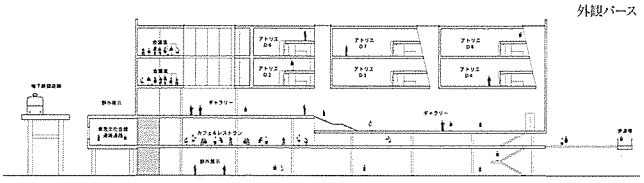


外観パース





外観パース



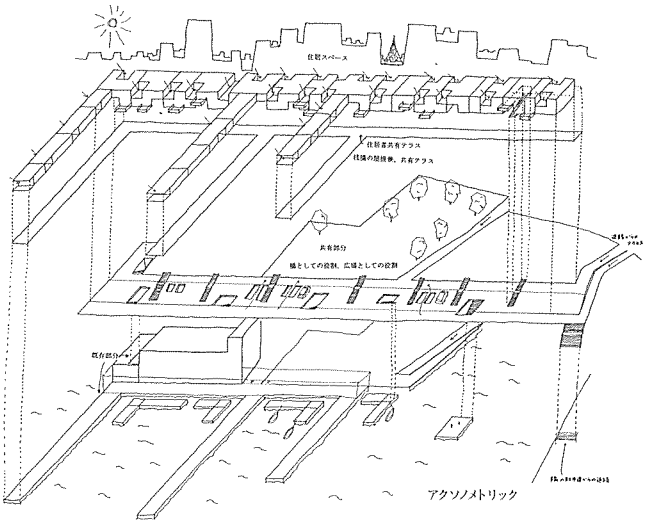
長谷川——渋谷駅のバスロータリーにアーティストのためのアトリエ兼集合住宅を考えました。企業の宣伝効果の高いバスロータリーの島を敷地と設定しヴォリュームを建ちあげました。西側は2層目がギャラリーになっていてその上が住宅となっています。2層目に空中通路が通っていて、東急から道玄坂に通り抜けられるようになっています。スラブと関係のない大きめの開口をとることで、周辺を囲うスケールの大きな建物に対して、ひとつの塊としての建築をつくりました。東側は細長い敷地なので、それを住戸プランに反映するようにしました。

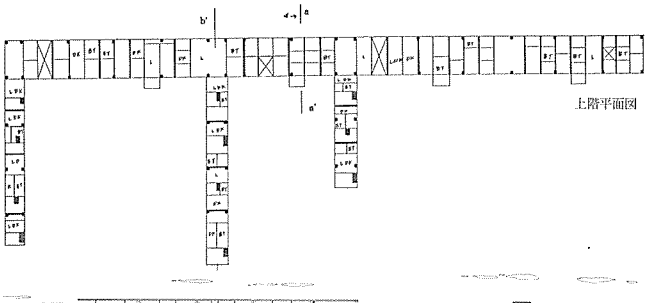
武田——バスターミナルの上に住むというのはリアリティないなと思ったけど、製作期間中だけここに住むということなら有り得る。もう少し広場全体に広がっても良かったかもしれない。

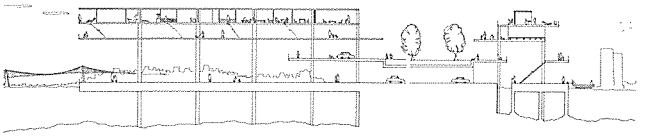
塚本——スケール感がいいですね。生活空間が窮屈な感じがするので、もう少し外部空間が入り込んだ方がいいと思う。また二階にギャラリーを持ってくることは、妥当すぎて面白くないと思う。ギャラリーをなくして住居を大きくしてその中を訪れて作品をみるというものでもよかった。

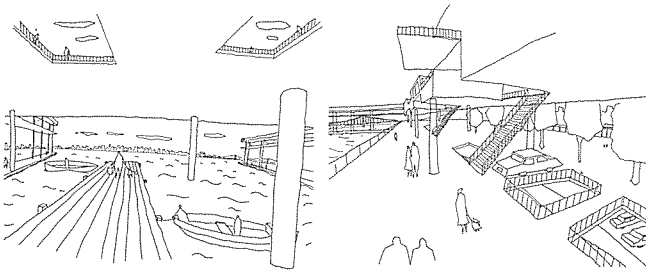
奥山——東側は敷地の形としては面白いけど、住戸はかなり狭くなっている。西側の方もそうだけど敷地の形をそのまま建ち上げた便宜的なつくり方に見える。

森永真由子 MORINAGA Mayuko









森永——竹芝の水上バスの桟橋の上に住宅をつくることを考えました。既存の駐車場と桟橋と事務所の上に隣の竹芝の公園からの散歩道の延長としての広場となる橋をかけて、その上に住居を配置しました。都市側に住居用の共有テラスを持ってきて、その共有テラスを延長して上の住戸へのアクセスを考えました。

奥山——断面方向の高さが異常に高いような気がするんだけど、それは意識的にですか。

森永——向こうにレインボーブリッジなどがあるので、このヴォリュームがまわりからの視界を遮らないためです。

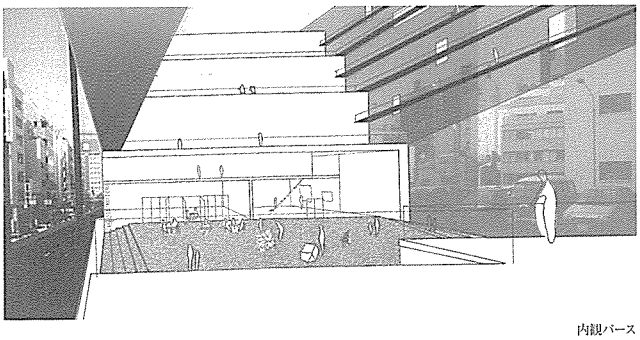
塚本——共有テラスがなぜ必要なのか。

森永——メゾネットタイプの方に住んでも桟橋の上を歩きたいと考えたので。

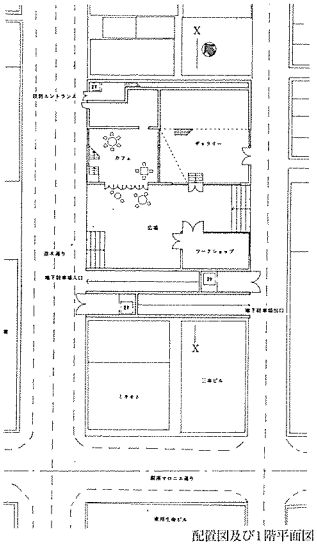
塚本——共有テラスはプライベートなテラスの方がいいのでは。

武田——共有テラスをつくればこれだけの架構を皆に納得させることができるというような、正義論に依るものになってはつまらない。しかしネガティブなものではなくて、ここだったら楽しく住めるというような夢がある案でいいと思う。

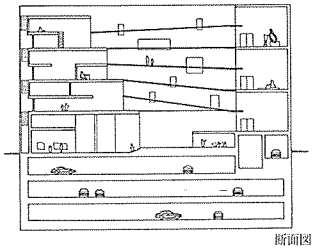
米華さとみ KOMEHANA Satomi



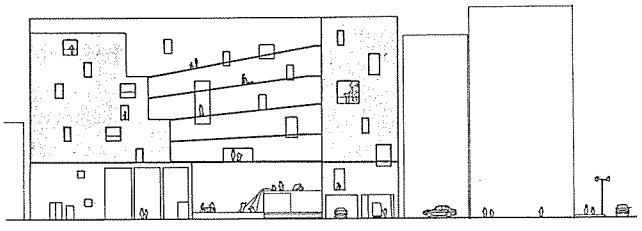
内観パース



配置図及び1階平面図



断面図



米華――銀座の空き地で立体駐車場になっている場所に住宅をつくることにしました。同じ高さで建物が建っていて日影ができてしまうので、南棟と北棟に分けて間に広場を設けて住居を構成しようと考えました。北側をアトリエ、南側を住居として、広場には屋外展示やカフェを計画しました。

武田――事務所付き住宅というのは今都市でかなり求められている。駐車場というのも必要な都市施設ですが、都市の中でネガティブな場所をつくってしまいがちなので、それらを絡めながら人が住める場所をつくっていくというのはいいが、あとはこの構成がここでうまくいっているかどうかということだと思う。

塚本――このような広場がとれる場所ならこんな課題はなくてもいいのではないか。

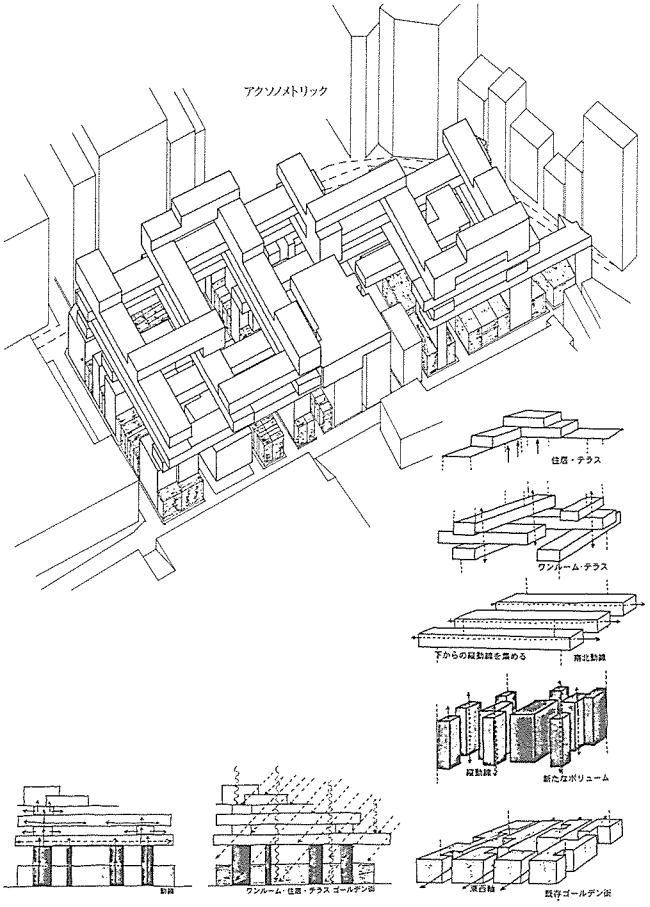
武田――住居に対する広場なのか、単に外部の都市に開かれた公園なのか。その説得力が弱い。この広場が3、4階にあれば、都市の中に駐車場のようにネガティブではない良い意味での空洞となる。

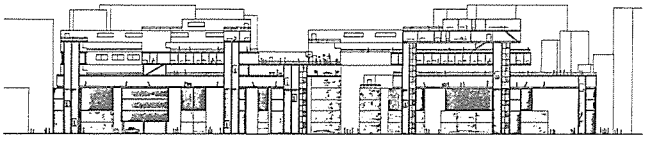
金箱――アトリエと住戸をつなぐブリッジはこんなに必要なの。

米華――6本はアトリエに行くための専用のブリッジです。

武田――長い廊下を通っていくより、一度共用のスペースに出た方が仕事に行くときは気分がいい。そう考えるとこのブリッジはもう少し整理できたよ。

東伸明 HIGASHI Nobuaki





東――新宿のゴールデン街に住むということを考えました。現在の空き地や空き家を利用して上にヴォリュームを立ち上げました。南北の動線ヴォリュームとワンルームを3層井桁状に重ねて、最上階はまわりのビルの高さに合わせて、一番上で10層までの井桁状のワンルームを重ねました。その上の部分はメゾネットやテラスのついた住宅をのせました。

塚本――ゴールデン街を残しながら住むということにどういう意味があるの。

東――店を、営業しながら新しい家に住みたいという人もいるので。

武田――今のゴールデン街を残したまま上に新しい住居をつくったら、迫力のあるものができるよ。ブレードランナーよりすごいような。

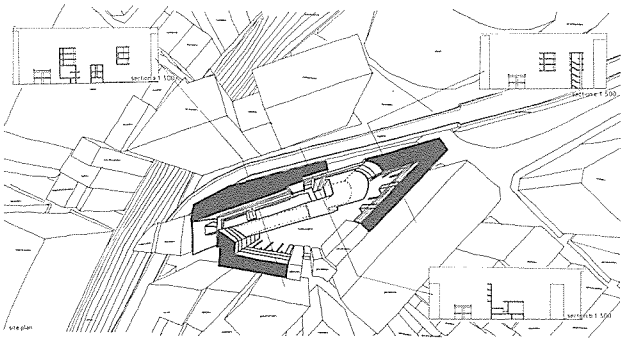
塚本――それならばそういう奇妙な意匠をつくるべきだ。建築をつくるということはその前に壊すことであるから、そういう問題をこんなに簡単に解決できるのか。

武田――完全に空洞化した部分にまず構築して、将来的にはこうなるというようなことが考えられるというような時間的なプロセスをいれる必要があったのかもしれない。

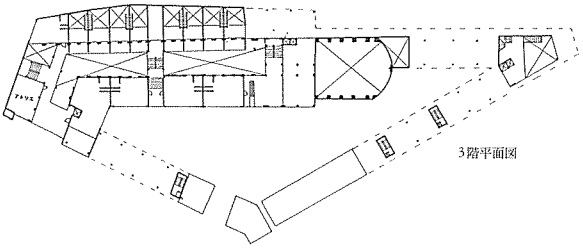
奥山――成長のシステムが入ってしまうと60年代の都市プロジェクトみたいにユートピア的になる。高密な状況で何ができるか、と言った方がよかったかもしれない。

金箱――これは一種の人工大地のようなものだから上にのびている構造体は横方向にもないとリアリティがない。

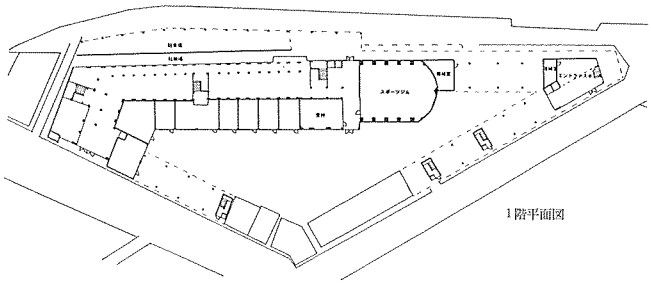
宮崎龍之介 MIYAZAKI Ryunosuke



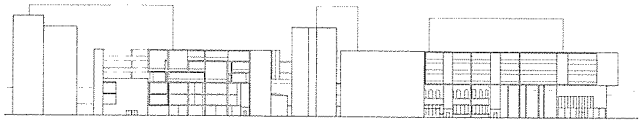
俯瞰パース



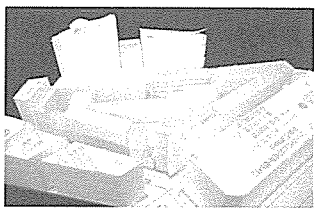
3階平面図



1階平面図



立面図



模型写真

宮崎——有楽町駅の近くにある泰明小学校を敷地に廃校に住むことを考えました。小学校の既存の部分のうち壁面と廊下と両端の特別教室を残し、残りをヴォイドとしてそれを挟むように集合住宅を計画して、その集合住宅が街区にそって連続して全体を取り囲むようにつくりました。

高橋——残すことの意味は何ですか。学校の機能はなくなってしまうんでしょ。

塚本——学校でなくても古い建物ならいいんじゃないか、ということになってしまう。

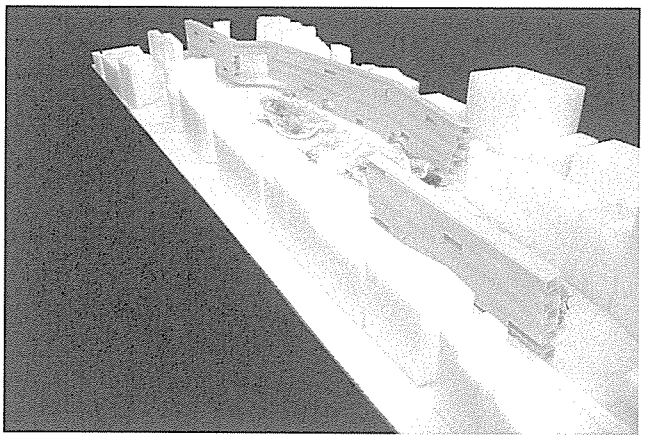
高橋——それほど積極的に残しているというようには見えないし。

武田——元々ポジだった小学校がネガになっているというネガ・ポジを入れ替えるということもアイデアとしては面白いけど、それが正しい方法だったのかどうか。

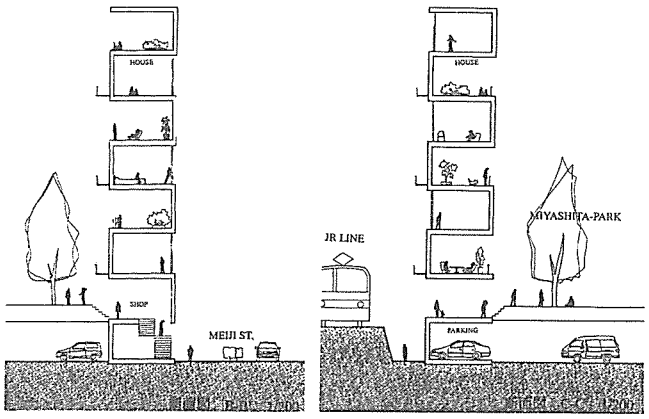
塚本——あまり手を入れない方がよかったかもしれない。

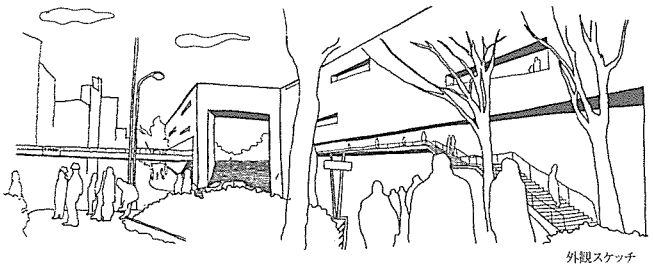
武田——本来いい建物だからその魅力をちゃんと残してから、何ができるかを考えた方が、廃校に住むという場合は正当な手続きだったかもしれない。

関本丹青 SEKIMOTO Mio



模型写真





外観スケッチ

関本——宮下公園の線路や明治通りという境界に住むことを計画しました。境界に住むと両方の景色が楽しめて、それがここに住む魅力なのではないかと考えました。基本的にS字のメゾネットになっていて、上下階両方に外部があります。

武田——住宅のオープンスペースはこんなに奥行きがあってもその奥は薄暗い。今片廊下が外に出ているけど、それを内側に入れてそこから階段で住居のテラスに降りるというようにすればいいのでは。また立面で抜けているところがどうなっているのか図面上では全然わからない。

関本——公園からみたとき全面が壁になってしまうよりも抜けていた方が気持ちがいいということと、大きい集合住宅なので、住民どうしのコミュニティスペースがあった方がいいと思いました。

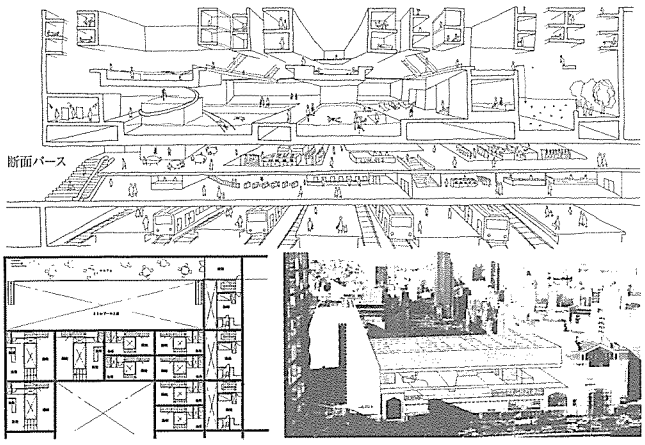
武田——いまこの場所は全部1層分しか抜いていないけど、屏風のように立ちふさがないということなら2層分抜いてある場所があったらよかったのかもしれないね。

奥山——階高は何mですか。

関本——4mです。

奥山——高いね。普通と違うことをやっているという意識があるのなら、その内容をもっと説明してほしい。

松岡里衣子 MATSUOKA Rieko



松岡――新宿駅の南口に集合住宅を計画しました。全部コートハウスにして、中庭から下のさまざまな施設が見えるように計画しました。

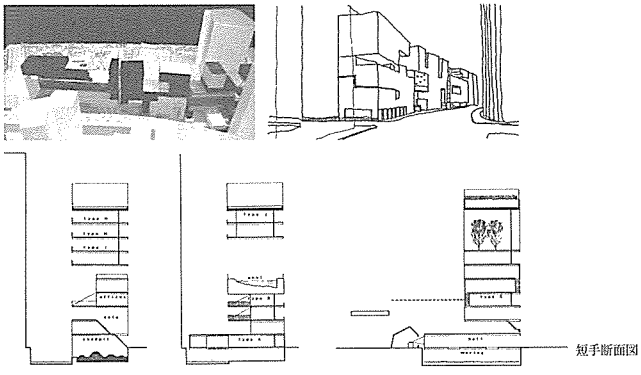
坂本――2層というのは少なすぎてリアリティがなくなってしまっている。中庭型ということで開口を内側の狭い方にとっているけど、逆に広い吹き抜けの方にとればさらに積層させることができる。

松岡――この庭は空中通路の庭で、個人の庭ではないので。

坂本――住居の中にさらにヴォイドをつくらずに、空中通路のヴォイドと兼ねさせればいい。

武田――住居以外は屋根を張らなければ、吹き抜け部分は外部空間として露出することができるわけです。そうすれば都市に背を向けているようでも、新宿に住むというリアリティが出てくる。

市川知 ICHIKAWA Satoru



市川――渋谷川沿いの明治通りに挟まれた敷地です。ここにある高層の建築が、明治通りと渋谷川を壁状に遮断しているので、住居を含んだヴォリュームとヴォイドを断面方向に配置することで渋谷川と明治通りを活性化できないかと考えました。今あるヴォリュームの上に3層分の住宅ヴォリュームを加えると、実際の容積率から空隙が30%でき、空隙部分にさまざまな機能を与えるようにヴォリュームスタディした結果、こういう形態になりました。

塚本――ヴォイドは何なの。

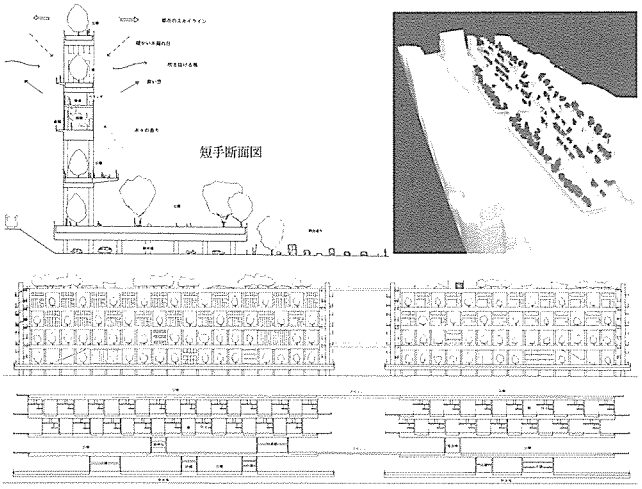
市川――従来屋上で考えられていたような使い方を考えています。

塚本――空隙の分配率はプライベートの中に入れてしまってもいいわけでしょ。それをヴォリュームのレベルでしか考えてないのに不用意にコモンがつくられてしまっている。

高橋――川に対する意識が感じられない。

塚本――川がテーマならば、空隙は下にあってもいいし、これらのヴォイドが川とどう関係しているか説明できないと。

円井基史 MARUI Motofumi



円井――宮下公園は駐車場の上に公園があり、それをさらに立体化しようと考えました。木を植えたいので階高を10mとって、日光が必要なので幅は狭く6mにして、その幅のまま上に延ばしました。公園レベルでは店舗が入り、次の10mでは郵便局、図書館、集会所を入れて、次の階を住宅にしました。住宅は3層になっていて、庭付きです。

塚本――うまくないけど、考えの進め方はいいよね。

武田――外部廊下が妙に寒々しく見える。これは楽しい案だから、そこをきちんと考えた方がよかった。

坂本――階高10mのとき座屈の問題はどうなるのか。

金箱――住戸部分はそのままの幅でも、下はパブリックな空間だから末広がりの構造になっていたらリアリティはある。

坂本――普通の荷重ではないことと、階高の違いが柱の太さや形状に影響が出ると考えるべきなんでしょうね。

武田――明治通りを歩くのが楽しそうだね。

[総評]

武田――どうやって都市に住むのか、住むということの意味というのはどういうことなのか、どういう風に住んだら面白いのか、という踏み込んだ提案がもう少しあったらよかったんでしょうが、住むということのリアリティのつかまえ方というのが難しかったのかなと思います。最初の課題を出したときのイメージは、何でもいいからこうだったら人が住めるよ、というようななげやりな住まい方ではなくて、こういう場所にこういうふうなもののあり方を構築すれば、都市の中で楽しく豊かに住めるのではないか、それによってその場所がより魅力的な場所になればそれに越したことはない。今まで見捨てられていた場所、発見されなかった場所を私たちが発見して、こういうふうに住むと楽しく住めるよ、というようなことができれば良かったんだけれど、卒業設計とかでそういうテーマを選ぶ人がいればもう一度深化させてみてはいかがでしょうか。救いは、みんなパースがうまいね。あとはそういう空間を図面の方に入れ込んで、図面の密度を上げていくことをすればもっとよくなるのではないかと思います。もう少しプレゼンテーションに力を入れてくれると良かったかな。

98年度「大岡山建築賞」

The O-okayama Architecture Prize '98

1999年5月21日、TIT建築設計教育研究会第9回総会において、毎年優れた卒業設計および修士論文(制作)に贈られる「大岡山建築賞」の98年度の授賞式が行われた。昨年度は卒業設計において大岡山建築賞が絹川いずみ君、同銀賞が稲毛誠君、大村卓君、高橋寛君に、修士論文(制作)において大岡山建築賞が米津正臣君、同銀賞が笠井誉仁君に贈られた。

TIT建築設計教育研究会総会における発表

以下は、1999年3月1日に大学にて全教官出席のもとに行われた卒業設計の発表会、および5月21日のTIT建築設計教育研究会総会における受賞者による作品の発表の模様を、学生編集委員の野村陽子(M2)、伊藤立平(M2)がレポートしたものであり、文責は編集部にあります(敬称略)。

なお、TIT建築設計教育研究会総会における発言者は以下の方々です(五十音順)。坂本一成[教授]、仙田満[教授]、只野康夫[日建設計/S39卒]、服部紀和[竹中工務店/S39卒]、林昌二[日建設計/S28卒]、帽田秀樹[竹中工務店/S61修]、三栖邦博[日建設計/S41修]、安田幸一[日建設計/S58修]、山下和正[山下和正建築研究所/S34卒]

[卒業設計]

大岡山建築賞
『オクのビル(カンダ・ハウジング・オフィス・パーキング・ライブラリー)』
絹川いずみ
KINUKAWA Izumi

絹川——神田のまちに集合住宅とオフィスや図書館、駐車場のような公共的な施設を含む複合施設をつくりました。まず、神田の地域というのが面白くて、大きな幹線道路沿いに高いビルが建ち、それらに囲まれるようにして中・小規模の雑居ビルが建っています。法規上の問題でそのようになるのですが、実際こうした都市の環境に対して建物がどう配置されるか、ということが設計の大きなテーマになりました。これは4つの集合住宅のヴォリュームですが、それぞれ異なるタイプの住宅によってヴォリュームをつくり、小さな街区をまたがったり、あるいははみ出したりしながら真ん中に集まるような形で配置しました。周囲の広い道路はものすごく繁華な人通りがあって賑わっているのですが、内側の地域は高い建物に囲まれ、裏になっているようなところがあるので、そのような内側にも繁華な人の通りを引き込むことができるのではないかと考えました。

•大学での発表会にて

大佛——四方の街路から延びていった建物が交わる中心では何がおきているのですか?

絹川——4つのヴォリュームが集まることで、この建物に中心的な場所ができるようには設計しませんでした。

仙田——外部空間をつくっても、その場所を人が利用するような設計が必要です。ただ木を植えればいいというのではない。

塚本——自分が新しくつくった建物だけでなく、隣接している既存の建物にも手を加えているように見えるが、その辺りをもう少し説明して欲しい。

絹川——今回は、この敷地の中だけで計画したのですが、将来的に周囲の建物を計画するならば、現状とは違った建ち方になるのではないかという可能性を示したかったのです。

•TIT建築設計教育研究会総会にて

坂本——地上げの時代があった後の都市をどう構成していくのかということで、4年生としてはそれなりに頑張って、確かな考え方を出せたところが評価されました。表現力がもう少しあると良かったですね。具体的な都市のなかにどれだけ自分たちの考え方を投入できるかというのが最近の学生が考えていることのようです。

山下——割と具体的な土地に建っているのですが、法律などは利用しているのでしょうか。

絹川——ある程度利用しています。ここは基本的には道路がすごく細いのですが、少しセットバックして、周辺での斜線制限から6層という高さ決めました。容積は8割くらい使ってます。

三栖——あなたが計画しているような道路を越えて連続していくビルは今はいろいろな制約があって出来ないわけですが、何故出来ないかを考えてのことですか? あえて連続させて行くわけですから今までにない魅力ある新しい外部空間が造られていて欲しいですがその点はいかがですか? こういった例は外国では無くはないですが、あなたが魅力を感じ、実現したかった空間があれば教えて下さい。

絹川——最初の質問についてですが、ここでは道路の上にも建物を建てているので、そういった点で現状の法律の上ではこのような連続した建物は成立しないとは思いました。2番目の質問ですが、大学でも「木を植えただけで外部空間といえるのか?」という質問がありまして、確かに今回考えが足りなかったところもあるので、これからもっと意識すべきだと思っています。イメージとしては、ある程度密集した既存のまちと自分の建物との間に魅力的な場所ができるといいなと思っていたのですが、実際にはビルの裏側の様な所に面しているので、ヨーロッパの街並のようにはいかなくて……。

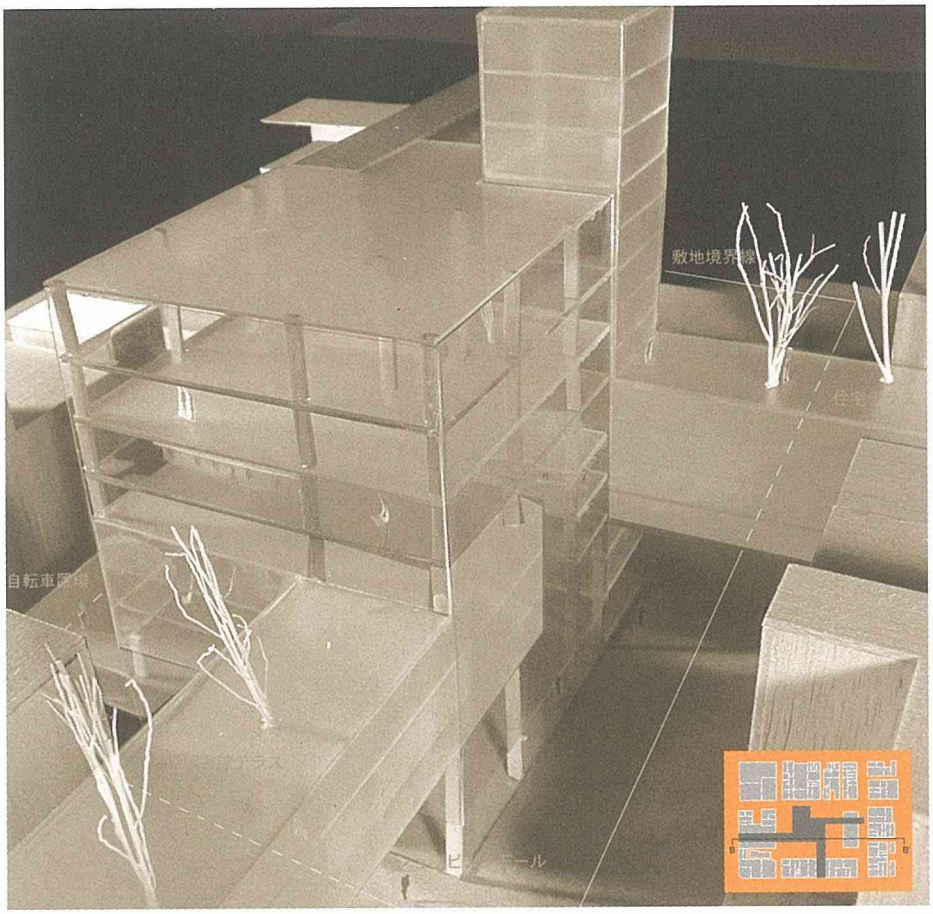
大岡山建築賞銀賞
『H-marketing Project』
稲毛誠
INAGE Makoto

稲毛——都市の地域性は地形や気候以上に情報の偏りにあると思い、ファッション情報の偏りの著しい原宿に出店する状況を考えました。若手デザイナーを効果的に競争させ、競争の様子を建築の形で表現して客を巻き込み、新しいデザインを生み出す環境を育てることが最も企業にとって有益であると判断しました。具体的な計画は、まずデザイナーを人気と売上に応じて、商業的価値の高い道路に近い方からメジャー、ミドル、マイナーと配置し、それぞれに対応する3つのヴォリュームを貫くスロープでつなぐことで連続的に表現しています。マイナー、ミドルはメジャーへと成長すると、神宮前交差点のファサードに看板を掲げることができ、通りすぎる人々も今の流行の最新情報を知ることができます。そして成長したメジャーが近くに出店することによってこの地域一帯がより強い情報の偏りをつくっていけるのではないか。原宿に偏った情報を活用するために決定された建築の形は原宿の地域性を獲得したひとつの結果になるのではないかと考えます。

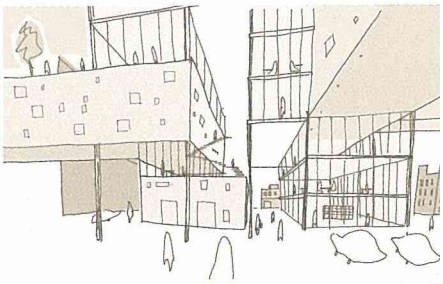
•大学での発表会にて

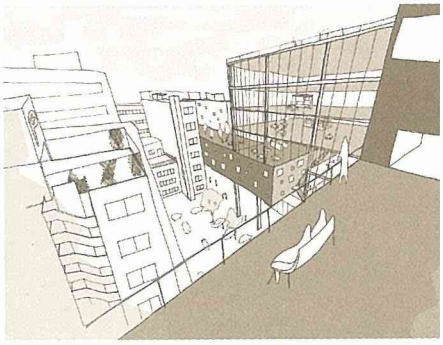
塚本——マイナーはどうして外側に見せないの? 中身の違いが外に見えた方がいいような気がするのだけど。

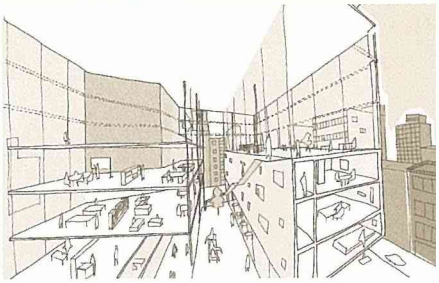
稲毛——メジャーだけが名前がでるというのがステイタスになっていて、そのためにマイナーは頑張って成長するということで、あえて裏側は

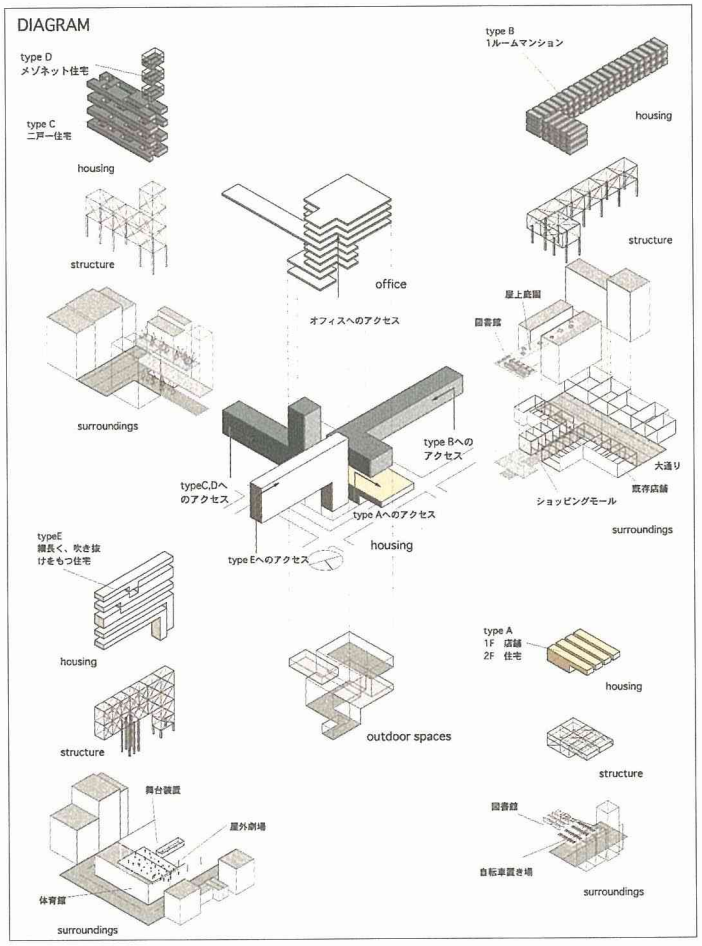


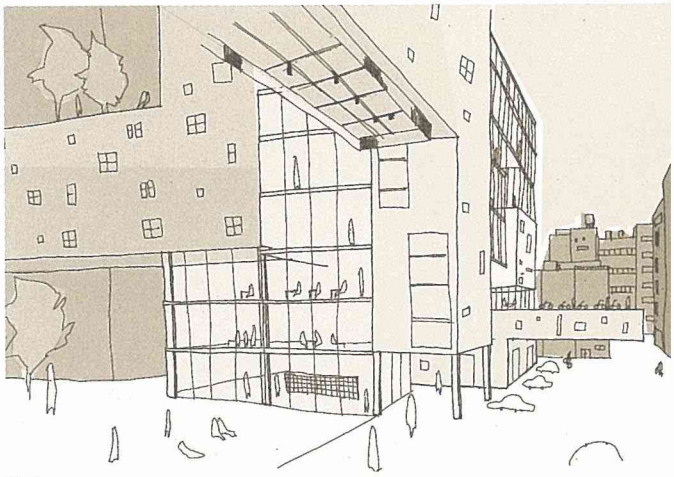
模型写真

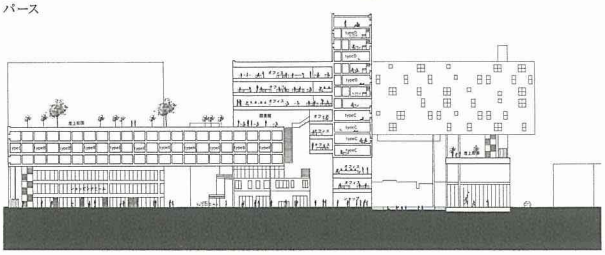


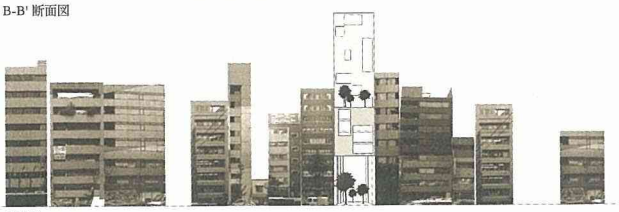



パース

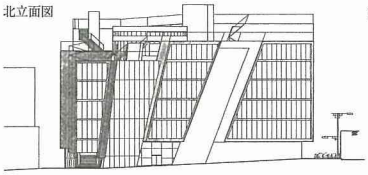



パース

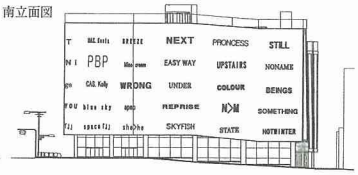

B-B' 断面図


立面図

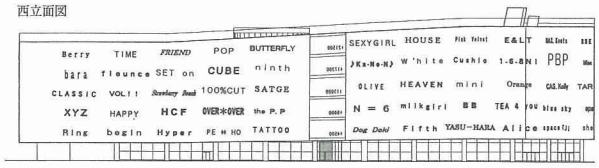
北立面図

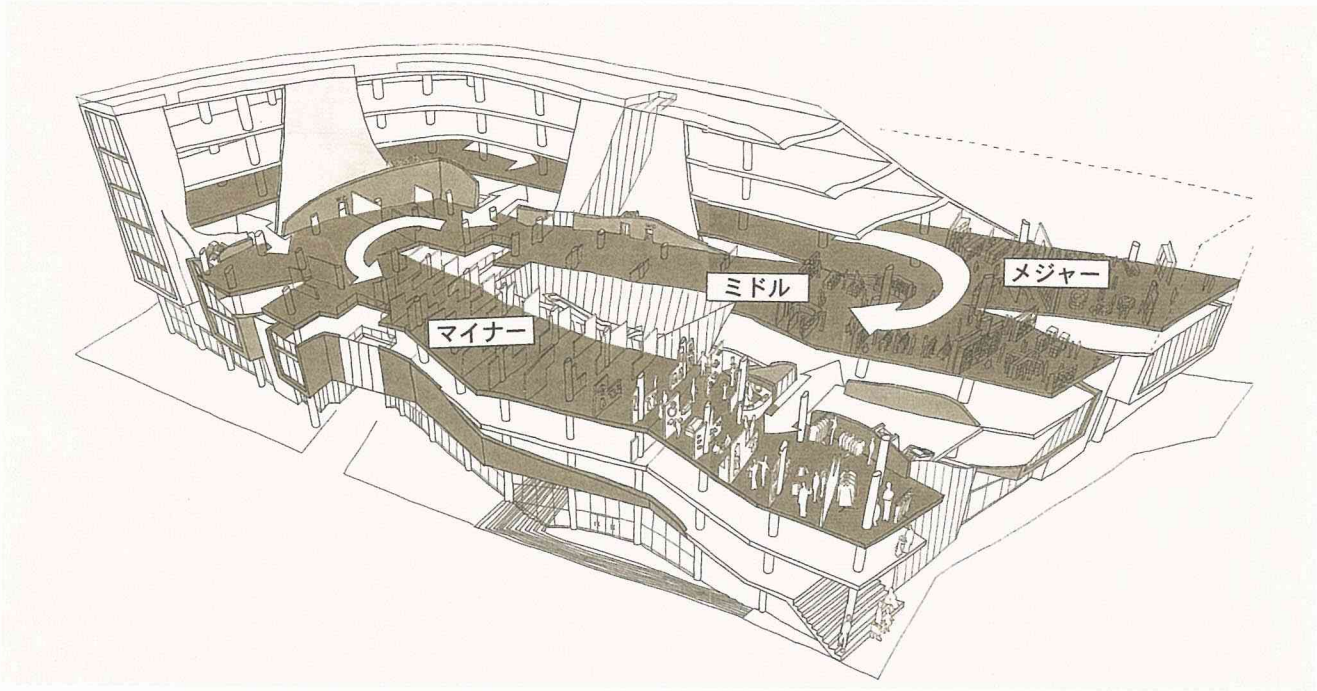


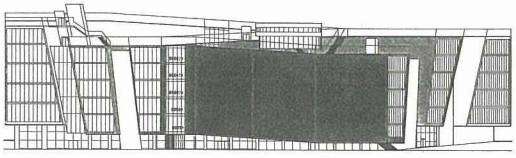
南立面図



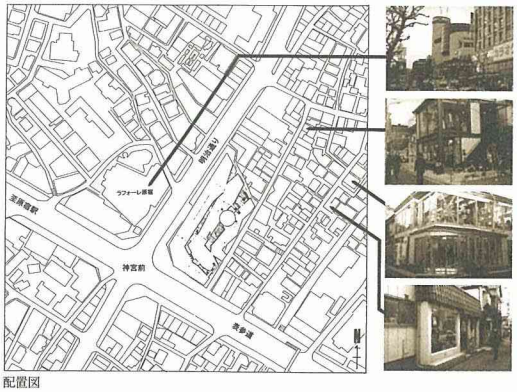
西立面図



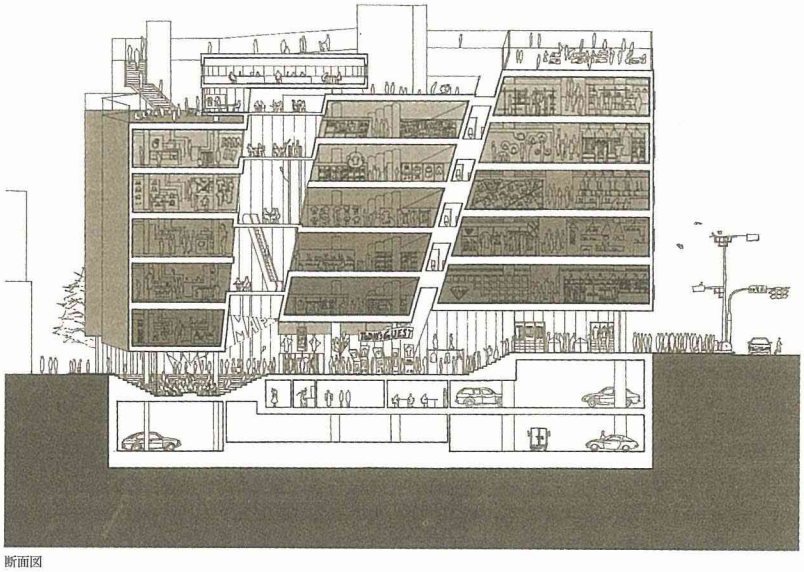




東立面図



配置図



断面図

何も書いていません。

奥山——今は雑誌やコンピューターとか情報にもいろいろな方法があって、看板だけじゃないでしょ。商業施設としてそこにヒエラルキーのある構造が必要なのですか？

稲毛——例えばインターネットとかで情報を集めて発信していけるようなことも考えたのですが、建物として全体が競争しているというのを表現するときにこれが一番効果的ではないかと考えました。

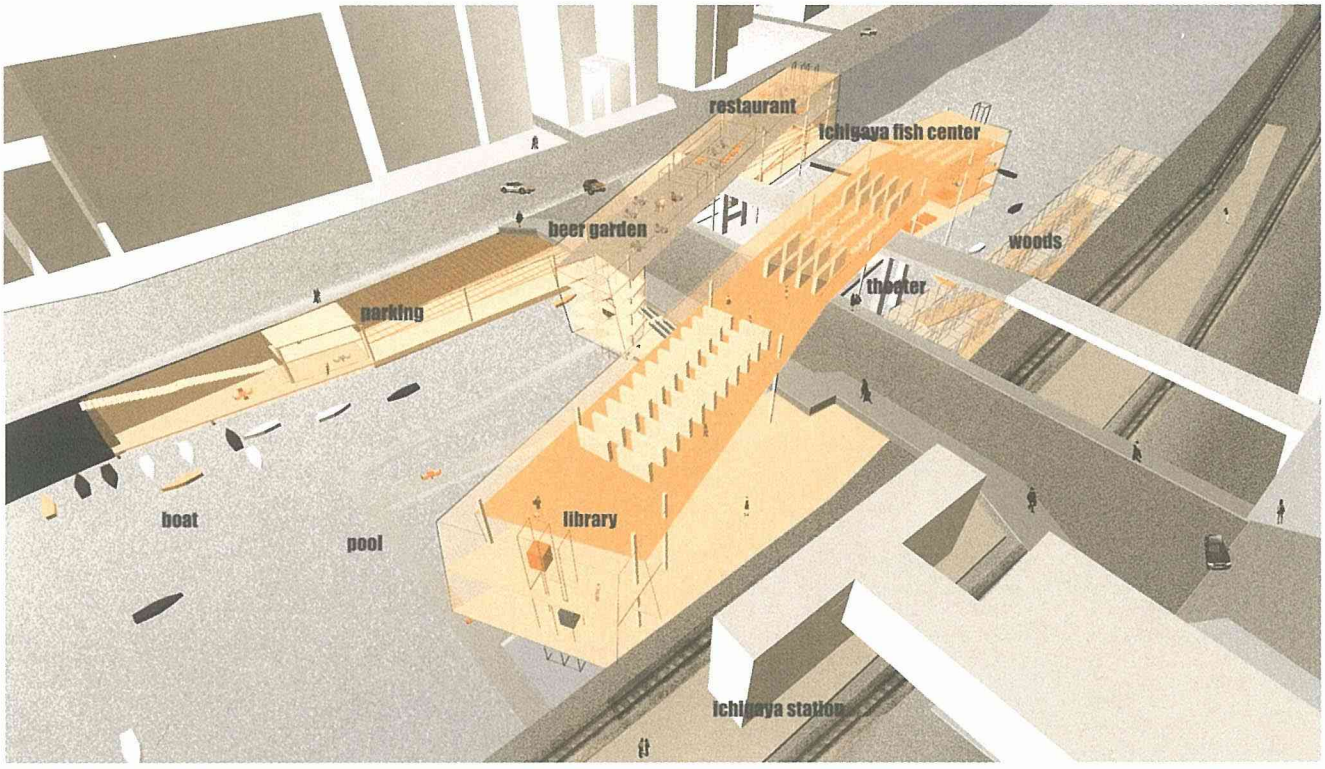
青木——1本の軸でランキングが定まるようなことに対し肯定的にやっていくのが我々の仕事なのか？ と非常に腹立たしく思いました。

•TIT建築設計教育研究会総会にて

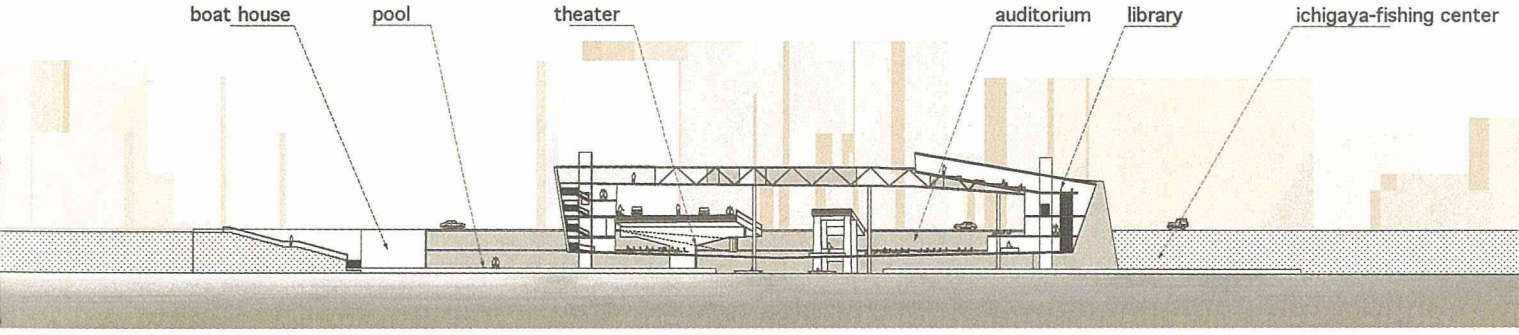
坂本——彼が説明したプログラムはあまり評価されなかったのですが、凝ったセクションなどから分かるかもしれませんが模型が良かった。今日はそれがなくて残念です。

帽田——月にいくら儲かるんですか？ と聞きたくなるようなものですが、ある数式を立ててそれに基づいてプランニングをするとき、一番大切なのはその数式が正しいかどうかということですよね。それをあなたはわりと単純にただ並べました、という風になっていますが、消費という言葉をつかって社会に何かを投げかけようとするときに、どのようなあなた自身の提案があるのか聞きたい。

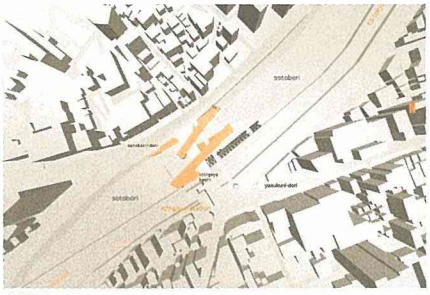
稲毛——今原宿というまちにかなり大型の店がでてきているのですが、それらは地価などを考えると必然という気もします。大型店舗は、原宿にある情報を利用することでより大きな利益を得られるのではな



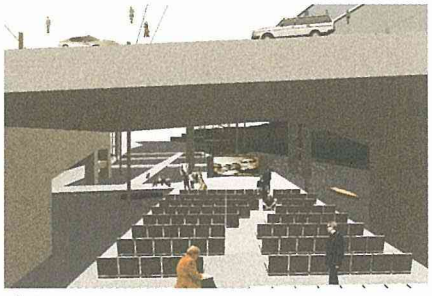
外観パース



断面図


配置図

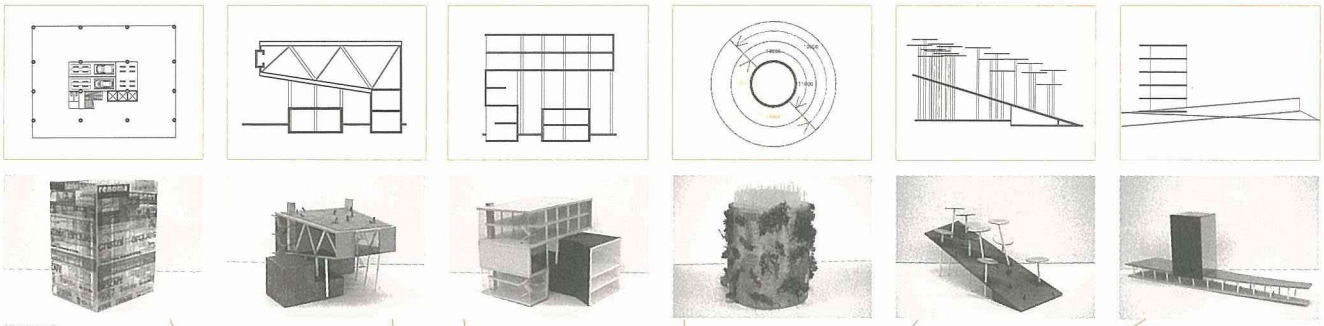
パース


パース

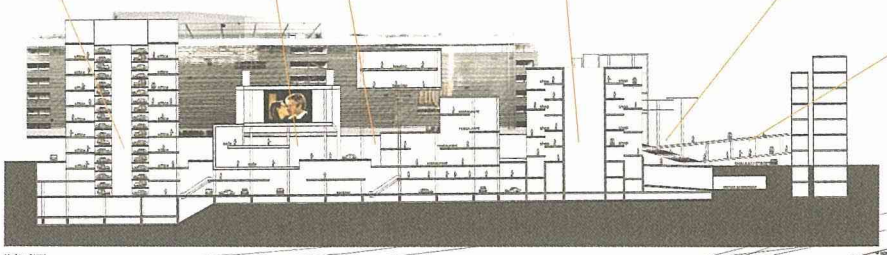
いか、さらにその利益を情報源としての原宿というまちに再投資していくことで、よりその情報量を増やしていけるのではないかということを考えています。

大岡山建築賞銀賞
『Ichigaya seamless』
大村卓
OMURA Taku

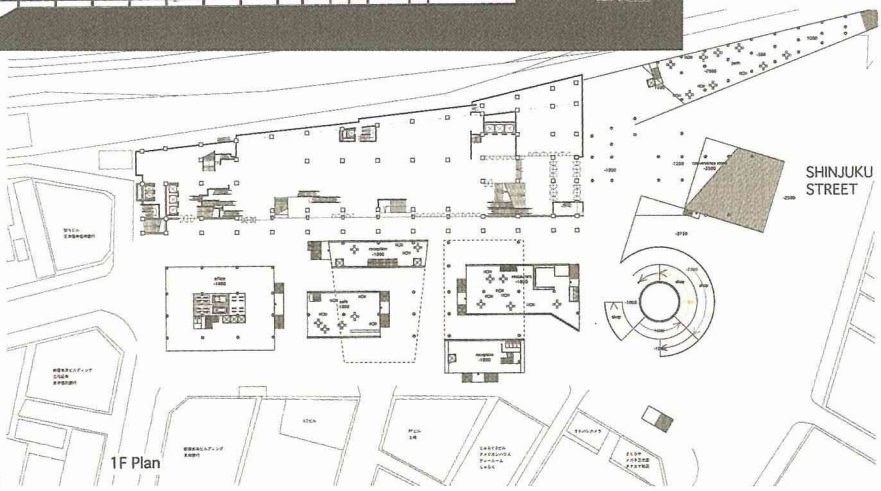
大村——敷地はJR総武線の市ヶ谷駅前で、駅のホームの横がすぐ外堀になっています。今ここには市ヶ谷橋とそのすぐ横にかなりゴツい水道管が通っているのですが、これらをそのまま生かしてなにかできないか、と考えました。橋の下は釣り堀になっているのですが、堀の両側に外堀通りと総武線が走っているのでここの地域は分断されており、ただ橋でつないでいるだけでは何も面白くないので、橋の機能を拡張して楽しい場所にできないかということを考えました。具体的にはいくつかの用途を内包した帯状のヴォリュームを橋と水道管に巻き付けるように配置しました。両岸をつなぐというのはもちろんのことですが、水面レベルや橋のレベルなども立体的に全部つないでいこうという考えです。そして橋が建物に取り込まれることで、例えばその下は暗いのでシアターや劇場のようなものにするというように、既存の構築物を利用して、建築の構成に取り込んでいこうという考えです。



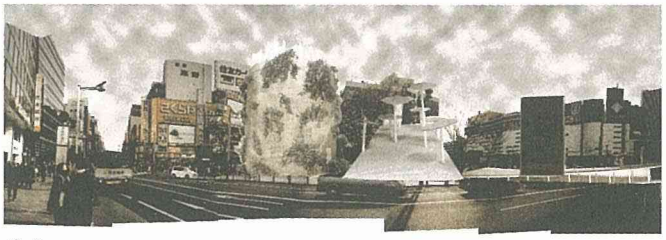
模型写真



断面図



1F平面図



パース

パース

•大学での発表会にて

仙田——このように螺旋状に回っていく形態だとエンドの部分が大切だと思いますが、どうなっているんですか。

大村——そこは基本的には外部空間で、エキスパンドメタルのようなもので覆われた半外部の空間になっています。

仙田——せっかく水の方向に広がりがあって、建築的に面白くできるところなのに、塞いでしまうのはもったいない。それから、エレベーションではスラブがトラス状になっているけど、ただ単にラーメンでつくるのではなくて、このような構成をやるならもっと構造的にも面白くできたのではないか。

八木——堀の向こうへ渡るだけの人はもとの橋を通るというより、そのための通路も建築に組み込んだ方が面白くなったのではないか。

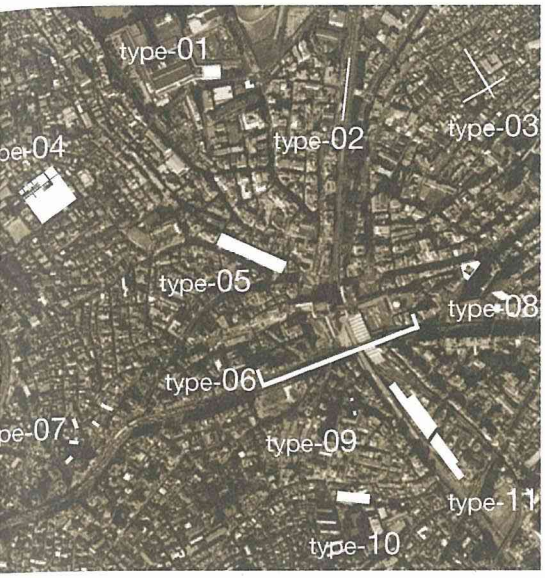
坂本——なかなか頑張っていると思いましたが、平屋で、そこにライブラリーとかビアガーデンを並べるといった機能を前面に出したつくり方はもう一つリアリティを感じない。空間的なインスタレーションとして、こういうルートが入りこむと空間がより強調されるであるとか別の文脈をもっとつくれば良かったのではないか。

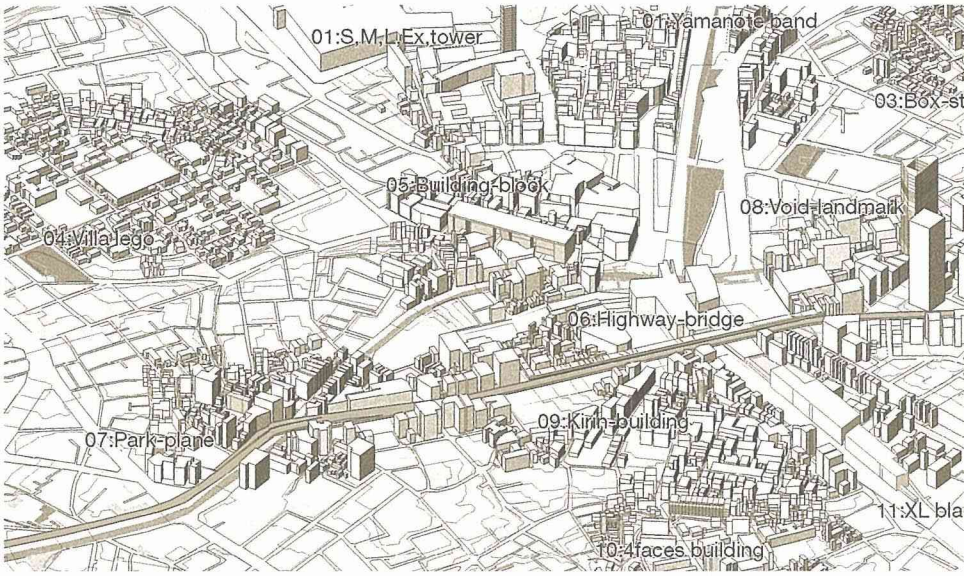
•TIT建築設計教育研究会総会にて

坂本——これだけの密度ですから、仮設的に考えれば良いのでしょうか。本人はシームレスといっておりますので、連続的な場所をつくること、仮設的なアクティビティーを都市の中につくり出すということを考えているということで、説得力のある案です。

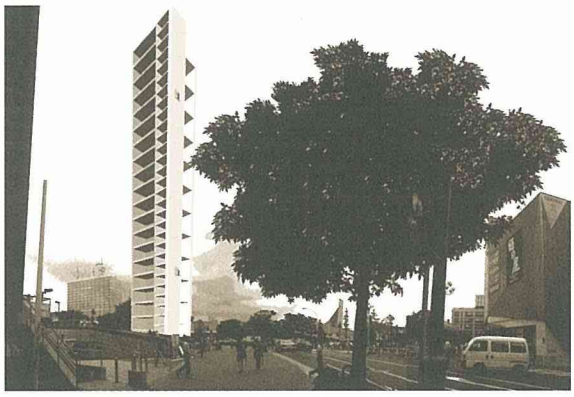
安田——この場所は4月になると桜が満開に咲いて、目の前には釣り堀があり、駅自身が他のJR駅とは全く違った環境にあります。その特異な環境をどのようにプロジェクトに取り込んだかをもう少し説明してほしい。

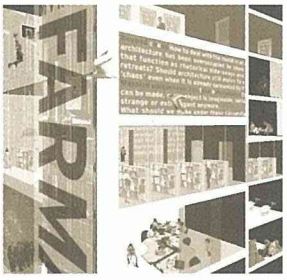
大村——ここは現状のままでもかなり面白い場所なのですが、このよ

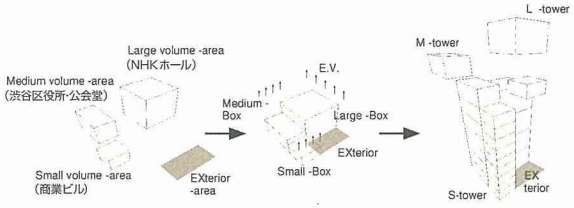




type-01: S,M,L,Ex,tower（渋谷区宇田川町）

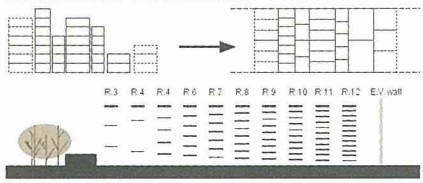






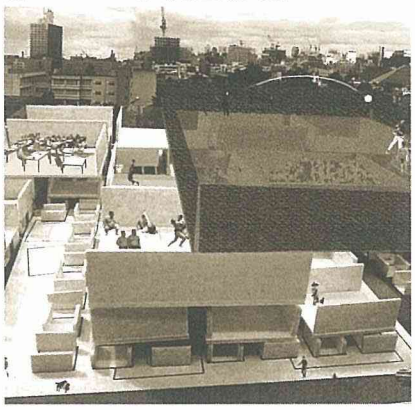
[大・中・小・外タワー]
大・中・小の建物ヴォリューム、および外部（公園）からなる異なる周辺環境が交わる敷地に、拡散している動線を垂直方向に集中し、4種類の空間単位が積層する建物が構成される。階高の異なる4つのタワーは構造的には一体で、それぞれの階高の最小公倍数にあたる位置で床面が揃う以外は、スラブが互いに隣接する形式となっている。これによって大きさの異なる様々な空間が無媒介に隣接するこの敷地の都市的特徴を一つの建物の内部空間において成立させると共に、従来のスラブを積層した建物とは異なった、階数では規定できない空間の特性を有する建築となっている。

type-02: Yamanote band（渋谷区神宮前6丁目）

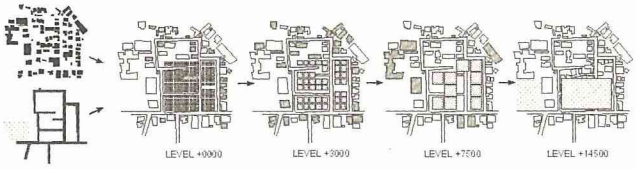


[ヤマノテ・バンド]
ここでは、周辺環境にみられる建物のランダムな高さを階高の違いに置き換え、平面的にも断面的にも多様な構成単位をもつ積層ビルが、隣接する公園、鉄道、道路との束をなす構成となる。
この建築は、通常バラバラに計画されるペンシルビルを一体化し、それによって生じる200mの屋上に公園を配することで、線路を挟んで隣接する公園との連続性を形成している。また、建物のファサードを表裏で同一にすることで、隣接する鉄道と公園を等価な関係に結んでいる。

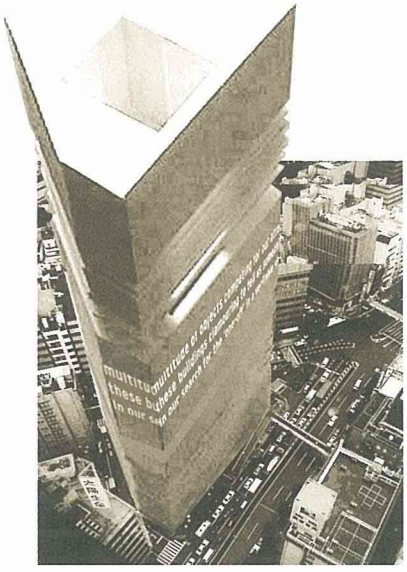
type-04: Villa lego（渋谷区松濤1丁目）



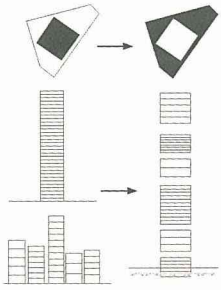
[ヴィラ・レゴ]
ここでは、周辺環境における建物ヴォリュームのランダムな平面積の大きさから、3種類の異なる空間単位を抽出し、それらを均質に配列した4つの箱をより大きい箱の足として組合わせ、最上層では隣接する公園と相似の空地が積層されている。さらに外部の街路が貫入することで、3種類の空間単位が動線及び構造とリンクしながら、上方ほど大きな外部空間を取り込む構成をなす。
この建築は、公開空地を敷地の奥にとることでヴォイドとソリッドの関係を反転させ、従来の周辺環境とは独立した超高層建築の建ち方に対しての批評性を併せもつ。

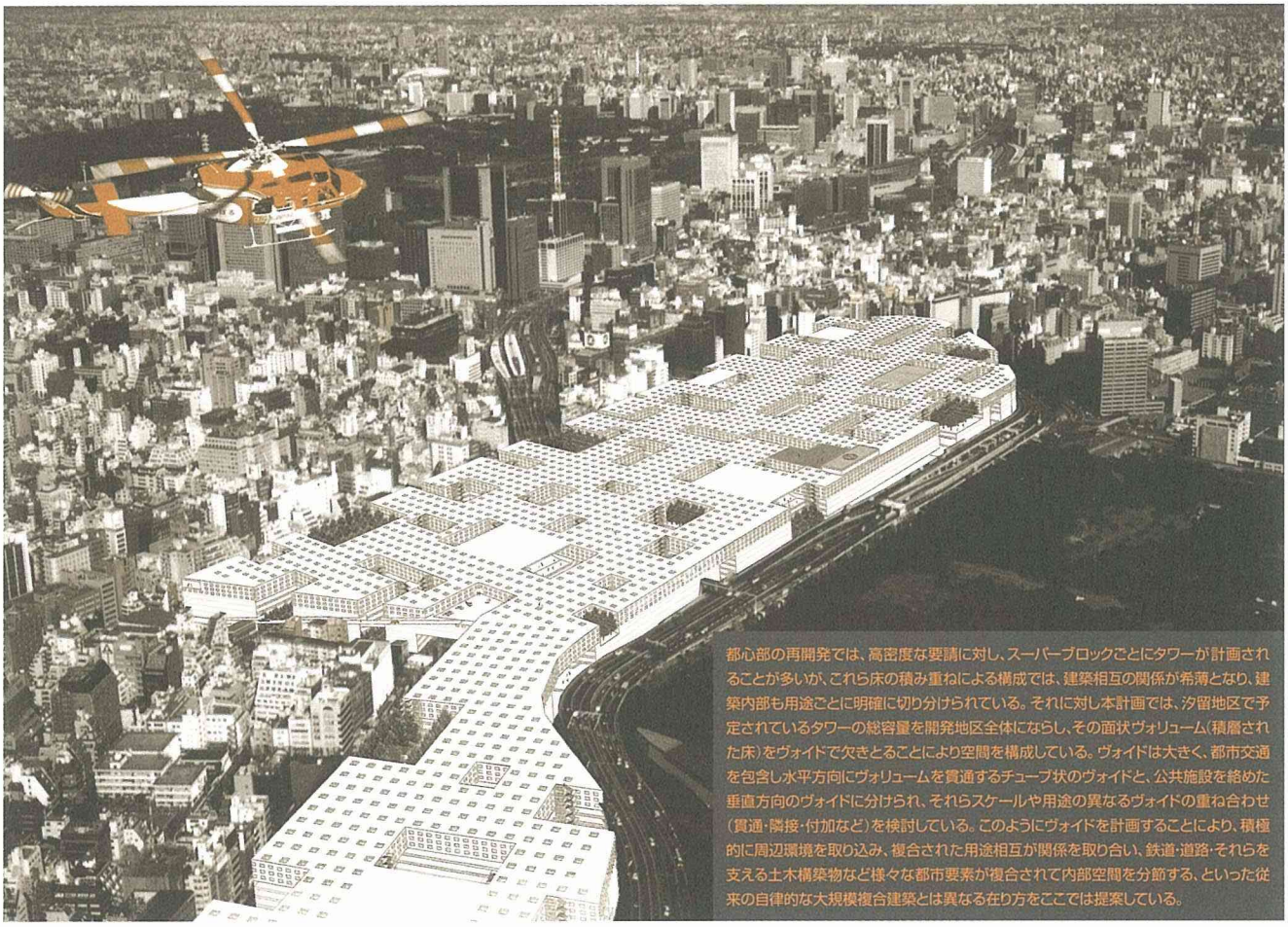


type-08: Void-landmark（渋谷区渋谷2丁目）

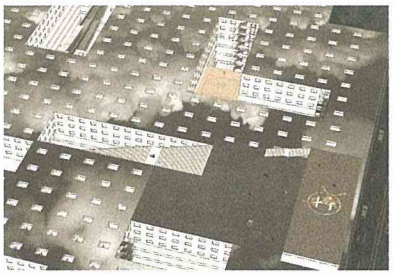


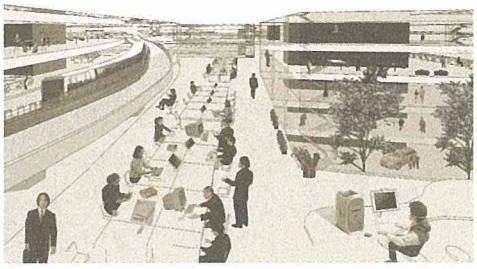
[ヴォイド・ランドマーク]
この建物では不定型な敷地の輪郭と、隣接する超高層ビルを写し取った正方形のヴォイドとの間に3つに分節された平面が形成される。また、数種類の階高の単位を積み重ねた断面をもち、動線的に地下鉄の駅と連結した超高層ビルである。
この建築は、公開空地を敷地の奥にとることでヴォイドとソリッドの関係を反転させ、従来の周辺環境とは独立した超高層建築の建ち方に対しての批評性を併せもつ。





都心部の再開発では、高密度な要請に対し、スーパーブロックごとにタワーが計画されることが多いが、これら床の積み重ねによる構成では、建築相互の関係が希薄となり、建築内部も用途ごとに明確に切り分けられている。それに対し本計画では、汐留地区で予定されているタワーの総容量を開発地区全体にならし、その面状ヴォリューム(積層された床)をヴォイドで欠きとることにより空間を構成している。ヴォイドは大きく、都市交通を包含し水平方向にヴォリュームを貫通するチューブ状のヴォイドと、公共施設を絡めた垂直方向のヴォイドに分けられ、それらスケールや用途の異なるヴォイドの重ね合わせ(貫通・隣接・付加など)を検討している。このようにヴォイドを計画することにより、積極的に周辺環境を取り込み、複合された用途相互が関係を取り合い、鉄道・道路・それらを支える土木構築物など様々な都市要素が複合されて内部空間を分節する、といった従来の自律的な大規模複合建築とは異なる在り方をここでは提案している。





うなヴォリュームの配置によって、ある程度まとまっていながら隙間だらけで、他と連続した形で限定されないひとまとまりの空間をつくることができるのではないかと考えています。

大岡山建築賞銀賞
『station square』
高橋寛
TAKAHASHI Hiroshi

高橋——普段から公共空間というのは面白くないなと思っていて、その一つに駅前空間というのがあります。どうして面白くないのかと考えてみたところ、それは駅の前には広場という類型化している形骸化した計画手法が都市計画の中ではまかり通っているためではないかと考えました。新宿の駅前を面白くするためのこの計画は、題名は『station square(=駅前広場)』というのですが、駅前広場を潰してしまおうという計画です。ここはもともと地下街が発達しているので、その構造を利用して8つの建物を分棟で建ち上げました。それぞれの建築の構成は、例えば駅とバス停を繋ぐようなパスを建てて待ち合わせのカフェを上に乗せ、後ろのペンシルビルに対応したような構成にするとか、アルタの大画面に対応して屋根が階段状のスタジアムみたいなものをつくるなど、隣接関係に応じて構成を決めて、いろいろな構成の建物が地下に半分埋まったようなものにしました。

•大学での発表会にて

奥山——割と頑張っている計画だと思うのですが、広場を「潰す」というネガティブな言葉で説明されると面白くありません。「潰す」だけではなく、新しい広場をつくっているのではないですか？ それに現状でも新宿では断片化した場所が集まっている感じで、はっきりとした広場はないのでは。

仙田——駅前広場を潰してこのような建築群をつくるということは、周囲の街並みがほとんど境目なく駅まで繋がっていくことを意図的にやっているのですね。でも非常に高密な閉じた建築群がすべてを覆ってしまうべきではなく、やはり広場的な空間は必要なのではないですか。

高橋——新宿の東口は、西口とか他の計画された駅前とは違って、街

路と街区がどっとなだれ込んでくるような場所なので、広場という駅を特権化するような空間はいらないのではないかと考えました。

•TIT建築設計教育研究会総会にて

坂本——周りとの関係を問題にするというのは今の学生が積極的にやっていることだと思います。これが他とちょっと違うのはそのもの自体をオブジェクティヴに扱って、造形的な表現をともなっていて、自分の存在を消そうという方向に対してこれだけ積極的に形を出したということも評価できるのではないかということでした。

只野——このごろ、CADが発達して、こうしたどこかで見たような形がすぐ出てきてしまうので、高橋君独自のキャラクターがでてくるともっとよかったと思うのですが。

高橋——実は結構いい模型があるのですが、展覧会の方に出していまして、興味がある方はそちらの方を見て下さい。(笑)

[修士論文(制作)]

大岡山建築賞
『環境ビルディング・タイプ 建築による渋谷再編成計画』
米津正臣
YONEZU Masaomi

米津——建築は用途によってタイプ化された構成になっており、一方で首都高速や様々な大きさのビルによって都市の中にも構成と呼べるような多様な空間が潜在しているといえ、建築の内側より外側の方が面白い空間構成をしているのではないかと思いました。具体的には、渋谷の特徴的な場所に11のプロジェクトをつくり、用途との関係からでは浮かび上がらない空間構成を『環境ビルディング・タイプ』として既存の都市環境との相互関係を建築の形式として抽出することで、新しい機能や活動との関わり方を逆に建築側から提案できるのではないかと考えました。例えば01番ですと、周辺のヴォリュームと外部空間から導いた階高の異なる3つの大きさの空間の積層と、公園側の外部空間というような隣接する周辺環境を束にしたような構成で、床のレベル差や階高の差による様々な空間に後から機能が入りこんでくるということです。

•TIT建築設計教育研究会総会にて

坂本——ひとつのオブジェクティブな建築を設計するということにリアリティーを感じなくなってきて、逆に出来上がった都市のうまい利用法がないだろうか、それとの関係をとりながら面白い建築ができないか、ということでしょうか。

服部——用途は後から周辺の現状を肯定しながら染まっていくのではないかということは分かるのですが、11のビルを渋谷のまちのポイントにおくことで、どういう形でそこの魅力を高めようとしているのか、または都市の問題を解決しようとしているのかを質問したい。

米津——私は渋谷のまちは、建物単体でもなく、機能や活動だけでもなく、それらの関わり方が面白いと思うのですが、ただその用途が都市の中にはいろいろあって、一つの建築の中に様々な用途がある複合建築といったあり方ではなく、一つの建築の中でも都市を内包したようなあり方があれば、新しく都市と建築と機能がもっと関わり合っていけるのではないかと思っています。

服部——鳥瞰図を見ると渋谷全体が一つの建築のような感じで、全部がインテリア空間そのものなのが渋谷の魅力だと感じています。建物で魅力があるのは実はなくて(笑)、むしろ界隈性のようなもの。ですから、さらにこの11のプロジェクトを置くことによって、どういう魅力が生まれるのかを知りたかったのだけどね。

米津——僕も同じような感覚なのですが、出てきた物が違ったのかもしれません。建築をつくっているのか、断片化した都市をつくっているのか分からない状態で、単体として統合されないようにつくったつもりで、建築の外の面白さを抽出して凝縮していきました。

坂本——本人も界隈性のようなことも言っていたのですが、それをどう表現するかが難しかったようです。

大岡山建築賞銀賞
『ヴォイドシステムによる巨大複合建築
汐留貨物駅跡再開発計画』
笠井誉仁
KASAI Takanori

笠井——これまでの大規模な建築では、周辺とは無関係に太い道路が引かれてスーパーブロックの街区ができ、そこに巨大なヴォリュームができるというあり方ですが、それに対してここでは、建築に合わせて道路を引き、もう少し周りと連続したスカスカな建築ができないかと考えました。足下に商業施設を伴った大規模建築は多いですが、それらは動線的に連続していても空間的には断絶し、ダイナミックな空間ができていない。ここではその複合の仕方をデザインすることも考えました。建築は面状になると足下の存在と周辺環境との関係が大きくなるので、高密度に用途が配分された断面構成の中に、いろいろな穴を設計しました。例えばショッピングモールでは、市街地の街路がそのまま首都高速の下の通りに連続していき、歩道は途中からめくれ上がって地面レベルになり浜離宮のレベルに連続します。住宅のヴォイドはショッピングモールのトップライトになっていて、モールから住宅やオフィスが見えたりします。ゆりかもめがヴォイドを横切ったり、公園のヴォイドから空も見えるし、地下の駐車場も見える。従来は商業空間しか見えなかったモールの中に複合されている要素すべてが見えてくるのです。さらにそれを支える構造体もものすごい迫力ででてくる。いままで外部空間にあって邪魔だったものがオブジェのように内部空間にでてくる。そういう様々なものが空間に視覚的な変化をあたえ、都市要素が混在しているような内部空間のプロジェクトです。

•TIT建築設計教育研究会総会にて

坂本——いささか荒唐無稽な巨大建築なのですが、いまどきこれだけ天真爛漫に都市化した建築を謳い上げるというのはそれなりに評価していいのではないか、ということでございました。

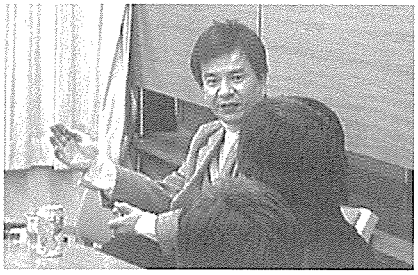
林——昔、丹下先生が清水の市役所を雑誌に出したときにまわりを全部薄く消した写真を発表されたのに端を発するのではないかと思っているのですけれども、周囲のことを考えないで自閉的にやるのが最近でも多いのですが、今回発表された方々はそういうことに対して非常に意識してやっておられてとても貴重だと思いました。それに対して笠井君のは全く違う発想で、良い悪いは簡単に言えない気がしますね。都市の中で人はランドマークになるようなものをなんとか見つけて、それとの関係で自分の位置を定めることが多いと思いますが、こういうところでは自分の位置をどう確認するのか分からなくなる。しかし、発想の転換をすればこういうやり方もあるのかもしれない。なぜなら、外に出て上を眺めないで、カーナビならぬ人ナビを眺めて自分の位置を確認すればそれで良くて、あとはインテリアの空間を楽しめて、外部の光や風が入ってくればよいという世の中が来るかもしれない。しかし本当にできたらエラいことだなとは思います。

仙田——これはどう見てもモロッコのフェズの立体型だと思うんです。そう言う意味ではインテリアとしては様々なモノがあって、ある種メディナ的な空間を非常に現代的にばさっと立体的にやったところの面白さは評価できると思うけど、閉所恐怖症の僕としてはちょっと好きになれないなあ……。

スライド・レクチャー：建築におけるノーテーション

Slide Lecture: Architectural Notation

小嶋一浩[東京理科大学助教授]
KOJIMA Kazuhiro (Associate Professor, Science University of Tokyo)



小嶋一浩
KOJIMA Kazuhiro
1958年 大阪府生まれ
1982年 京都大学工学部建築学科卒業
1986年 シーラカンスを共同で設立
1986年 東京大学大学院博士課程単位取得退学
1988年 同大学工学部建築学科助手
1994年 東京理科大学理工学部建築学科助教授
1998年 C+A(シーラカンス アンド アソシエイツ)に改組
主な作品：氷室アパートメント(1987)、HOUSE TM(1994)、千葉市立打瀬小学校(1995)、吉備高原小学校(1998)など

大学院の授業の一環として、建築家で東京理科大学理工学部の助教授である小嶋一浩氏のスライドレクチャーが、1999年2月1日[月]に行われた。以下は当日の模様を学生編集委員の香川貴範(M2)、小林太加志(M2)がレポートしたものであり、文責は編集部にあります(敬称略)。なお、掲載写真・図版はすべて小嶋一浩氏の提供によります。

[実在型スペースブロック]

私は現在、大学の研究室と事務所の両方でスペースブロック(SB)について研究を進めています。最初のきっかけはデザイン研究の助成(Cf.1)を受けて始めた、立体的で高度に複雑な空間の記述方法の調査研究でした。立体的で複雑な空間がある場所を世界中見てまわったのですが、それを記述しようとすると、従来の平面・断面というノーテーションが現実の空間にまったくシンクロしてこなかったのです。写真によるノーテーションなども試みましたが、単にその場所を理解するのにはいい方法であっても、具体的な設計にもちこむのが難しい。そこで、たとえばこの部屋の内側は、一般的には空間と言われているわけですが、この空間というのは操作性が悪いので、いったん手に持ったりできるような単位にして、それを操作して設計することはできないかと考えたのです。つまり今皆さんがいるこの部屋の壁を型枠として、水を流しこんで凍らせる。すると中に家具や人などが入った透明なブロックが取り出せます。このかたまりがSBです。SBには、実在する空間をもとにした実在型スペースブロック(Existing Space Block: ESB)と、設計ツールとしての生成型スペースブロック(Generated Space Block: GSB)の大きく二種類があります。ESBは建築全体ではなくて、ひとかたまりだと思える実在の空間を取り出したもので、理科大でやっている「ネットワークショップ」というホームページ上に、ポンピドゥ・センターの前の広場のような現実の空間が、同スケールのアクソメでサンプリングされています(Fig.1)。建築をやっている人なら誰でも行ったことがあるだろうし、個々の場所のイメージはあると思うのですが、実際のスケールとか勾配について知っている人は少ないと思います。だからこれはデータベースとしても効用があって、サンプルをダウンロードして自分で適当に組み合わせれば、とりあえず積み木としての空間が成立する。もし似たような大きさのものを考えていたとしたら、そこにそのデータを並べてみるだけでも参考になるし、このデータを出発点にしてモデリングしていってもかまわないというわけです。

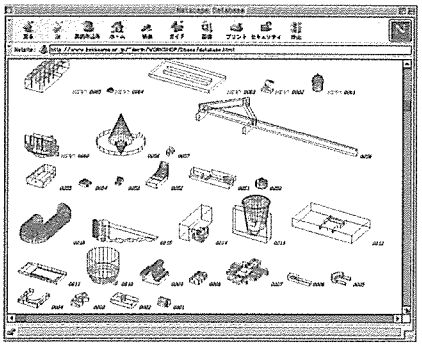


Fig.1 東京理科大小嶋研究室のホームページ
URL: http://www.rs.noda.sut.ac.jp/~koji_lab/

[生成型スペースブロック]

GSB(Fig.2)を使って設計した例のなかでも「那須の別荘(1997)」は一番小さいもので、立体L型を二個を組みあわせて合体させたものです(Fig.3)。最初は別荘だからこんなものは使わないでワンルームの空間をつくればいいと思っていたのですが、ちらかしてもいいところときれいにしておきたいところの最低二部屋はほしいとクライアントから要望があったので、これらの部屋を大学の研究室で研究しているSBの組み合わせで考えれば適切な方法が見いだせるのではないかと考えました。このGSBはL型の平面の上か下が一カ所吹き抜けていて、どこから見ても全部が一度に見えないので、絶対的な大きさに比べて広がりが感じられるおもしろいSBです。また大阪につくった「スペースブロック上新庄(1998)」という単身者用の賃貸アパートでは、2.4mキューブの組み合わせでできる合計22個のSBの積み木を、それぞれ各住戸に割り当てて組み合わせたものがひとつの建築になっています。いろいろな形態を持ったSBを積み重ねていくと、垂直方向の壁が通りにくく壁式構造に向かないのですが、水廻りのコアと構造を一体にしてSBの壁を構造にしています。部分的にはキャンチレバーで飛び出したりもしています。このほか、SBの研究では内部空間と外形のモデリングの関係のスタディもやっています。たとえば2.5mキューブのSBを使って、ほぼ全体に均等な空隙率50%の香港の九龍城塞をモデリングしました(Fig.5)。ゆがんでいるところは長方形にして、高さをちょっと変える程度でほとんど密実に組んでいるもので、いわば上新庄のアパートを延々と拡大したような状態です。こうしたスタディは大学の卒業研究で4年生と一緒にやっているのですが、去年概念的なモデルでつくったので、今年は平面図と断面図で実際に描くところまで進めようと考えています。

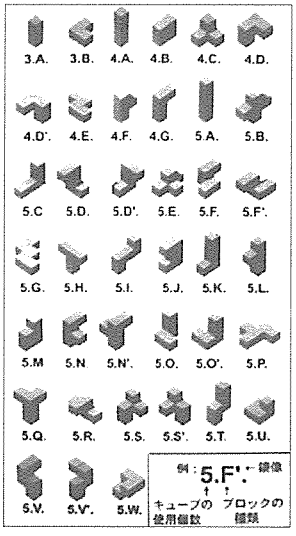


Fig.2 GSBのバリエーション

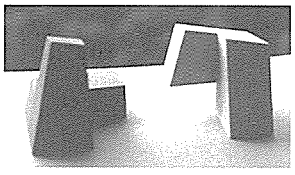


Fig.3 那須の別荘のGSB

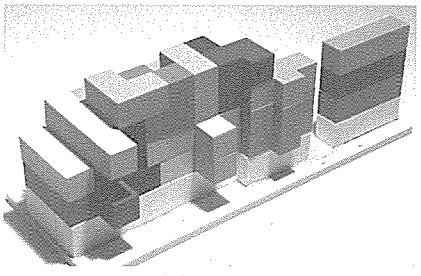


Fig.4 スペースブロック上新庄のGSB

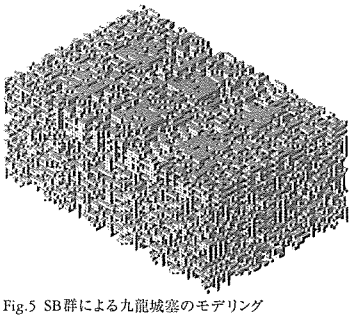


Fig.5 SB群による九龍城塞のモデリング

[アクティヴィティ]

「千葉市立打瀬小学校(1995)」は、オープンスクールの有り得べき姿を考えてつくった学校で、そこで起こる様々なアクティビティ自体を設計できないかと考えていました。たとえば入学式のあとに1クラスずつ退場する様子を300人づつ点で入れ

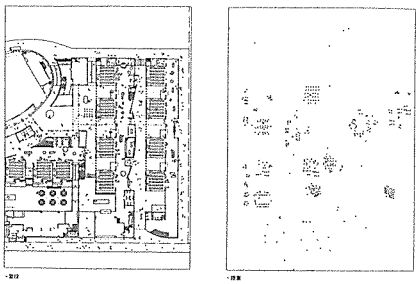


Fig.6 打瀬小学校 マス・アクティヴィティからパーソナルなアクティヴィティの集合へ

たアニメーションをつくって、人をランダムに分布させるにはどうするべきかということをスタディしました(Fig.6)。教室と庭とオープンスペースと、パスと呼んでいる外部の通路、さらに小さなアルコーブをセットした単位を、一旦校舎全体に配置してみて、体育館等を置くことで生じる歪みをどのように吸収するかを考えて、ダイアグラミックに実際の空間の配列を決めています。同じように、動線的にも近道なんだけど雨の日にはちょっと濡れる程度のショートカットと、遠回りなんだけど建物の中を通れる通路といったように、経路を複数化しています。小学校のように何百人もの児童が同時に行動している状態を、従来の動線計画にあてはめるのではなく、もっとそれぞれが勝手気ままに動いているような全体をどう捉えてプランにしていけるかを考えたのです。このあとの岡山の「吉備高原小学校(1998)」でも、こうした考え方は連続していますが、吉備高原では敷地も十分広いので木造の平屋でつくっています。また人間の行為を直接規定するのは家具だと考え、家具だけを並べたプランを描いたりもしました(Fig.7)。教室もあまり方向性がなくて、中庭と交互に現れてきて、外と中とが季節さえよければ気にしないで使える領域みたいなものができたらいいのではないかと考えました。また、いま現場が進んでいる「出雲市地域交流センター(1995~)」では、巨大な単体の公共建築を置くのでなく、建物を小さなスケールのウィングに分節して、中庭とウイングが交互に配置されたプランになっています。駅前広場も含めた全体を木で覆い尽くしたランドスケープにするという提案を行っていて、床自体が広場からマウンドになって繋がり、一番高い部分が1.8mあるので、人の気配はあるけど見通せないような空間をつくっています(Fig.8)。

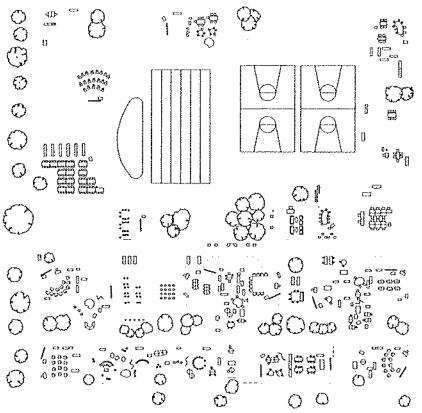


Fig.7 吉備高原小学校 家具と樹木

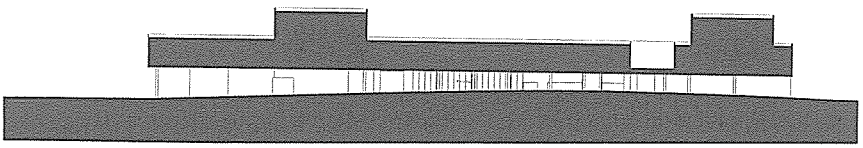


Fig.8 出雲市地域交流センター 断面図

[ノーテーションとモデリング]

「K-PROJECT(1995)」は、南大阪の1500戸のハウジング計画です。このスケールの敷地で1500戸というと容積率が300パーセントぐらいになるので、タワー型超高層をつくらないと工事費の採算がとれません。また幾つか都市計画で決まってくる提供公園や、北側に日影を落とせないという条件、さらに住戸が冬至の4時間日照をとらなければならないという条件などを考えると、高さと平面を同時に変えていかなければならず、こうしたパラメーターだけで形態ができあがってきます(Fig.9)。そこで当時としては高価だった日影のソフトを買い入れて、壁面日影をとりながら全体のモデリングを進めました。そして最終的には、上の方の1住戸を動かすと、別の部分の平面がすべて変わるというくらい、見えない網の目で全ての関係が決められたような、微動だにしない状態に至りました。

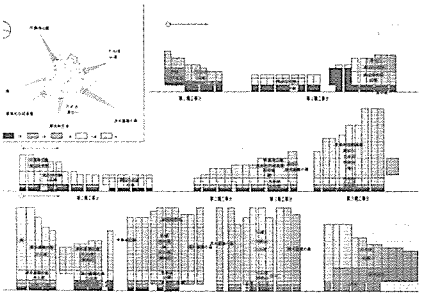


Fig.9 K-PROJECT 断面ダイアグラム

都市においては、たとえばタクシーを同じところで待っていても、全く来ない時と、来るのだけれど全部誰かがすでに乗っている時と、空車ばかりが来る時などがありますが、まるで天気図で雲の分布が刻々と変化していくような、様々な密度の遍在が起こる。これは東京という都市の巨大な規模が呼び起こすものともいえますが、ひとつの建築の中でもそういう密度の遍在があります。たとえば講義室を設計する時に、部屋の高さや光の入り方という条件も当然あるのですが、そのほかに人々の動き、つまりその講義室に何人位いると想定するのかとか、その人たちはどういう風に並んでいるのか、そしてどのように動いていくのかといった人々の行動による密度の遍在があります。こうした現象を直接扱うこと、いわゆる動線計画のような単純化を介在させず、新しいノーテーションを用いて抽象化することによって、実際に空間化していく方法へと展開していけるのではないかと考えているのです。

•質疑応答

質問——SBによって空間をつくり出すことは、設計においては不自由な状態を生み出すことにはならないですか?

小嶋——SBは、空間を区切りのいい単位として取り出せるのではないかという前提でやってますが、壁でできているような建物だけにしか適用できないのはおもしろくないので、今現在概念拡張をしている最中で、アクティビティの話などとも併用できる可能性を探っています。どのような建物であってもすべてをSBで設計できるとは思っているわけではなくて、あくまでも各々の設計条件に対応する性能のいいツールの一つのように考えているのです。

質問——今現在SBには前提とされているスケールがあって、それは住宅のスケールであるように思うのです。またそのことはSBによってつくられる空間が、人間の身体的なスケールを前提にしていることを示しているようにも思えるのですが。

小嶋——必ずしも住宅に限定したものではありませんが、たまたまワンルームマンションとの相性が良かったのです。2.5mキューブにしたのは、住宅スケールというよりは、むしろ部屋にも通路にもなる寸法で、かつ大量につくるのに計算がしやすいからです。しかしSBは、自分の身体が入れられる空間というのを想定して、その積み木で建築をつくるというアイデアが始まりなので、別に2.5mキューブでなくてもいい。空間を記述していく方法であり、そして図書館なら図書館でもいいし「何とかみたいな空間がほしい」といったときにも対応できる方法だと考えています。

質問——モノや現象を記述するということと設計することの関係について、例えば打瀬小学校の人の動きを記述したダイアグラムなど、建築ができていくプロセスに、別々の水準でそういった図面らしきものが存在するような印象を受けました。それらは今まで建築の図面と呼ばれていなかったもの、建てるための図面ではないけど、設計するための図面のようなものです。こうしたノーテーションを工夫することによって可能になることは何だとお考えですか?

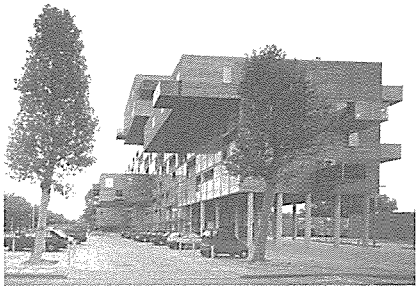
小嶋——建築を設計するということは、そこで起こる現象自体を設計しているという側面があるのではないでしょうか。空間のパッケージだけつくって、あとは使い手におまかせというのではなくて、人々のアクティビティをもう少しなまなましく捕えられないかという思いがあります。人間の身体の動きを表現するノーテーションを考えることは、そうしたアクティヴィティをデザインするきっかけになるように考えています。

Cf.1 ハウジングアンドコミュニティ財団第1回「若手デザイナー助成」報告書 日色真帆+シーラカンス1993

講演会レポート
Lecture synopsis

都市の中の新しい公共性の提案 ——MvRdV講演会報告
Lecture by Jacob van Rijs (MvRdv)
New public quality in big cities

レポート：谷川大輔［博士課程］
report: TANIKAWA Daisuke (Doctoral candidate)


WoZoCo's Apartments for Elderly People, 1997

1999年5月26日［水］に、オランダの建築家グループ・MvRdVのJacob van Rijs氏による講演会が、六本木・TNプローブで行われた。MvRdVはWiny Maas, Jacob van Rijs, Nathalie de Vriesの3人組でロッテルダムを中心に活躍するグループである。van Rijs氏は来年新潟県妻有で行われるアートトリエンナーレに参加するために初来日した。「東京から新潟までの新幹線から見える田園風景には大変感動した」という感想から始まった講演会は、活動の系譜をたどるように彼らが関わってきたプロジェクトの中から最も代表的な幾つかの作品をスライドとCGを用いて説明するものであった。

老人のための集合住宅であるWoZoCo's Apartments for Elderly Peopleは、住宅団地が数多く建てられ人口が過密に集中した環境の解決策として、敷地の北西に建物を寄せて高さを抑え、その北側面に13%の世帯をキャンチレバーで突き出すことで、緑の空地を確保することと光を住戸全体に導くことを提案している。さらに、その北側の大通りに対してヴォリュームを突き出させる形態は、マッシブな団地群が建ち並ぶ中で周辺環境をうまく建築に取り込んで、物的な連続性を獲得している。それは、近代都市計画のように街路や象徴的な建物によって、都市全体を構想していくものではなく、建築が都市に対して部分的に関わっていくことで都市の中の新しい公共性を提案するものである。また、都市計画プロジェクトとして提案されたDesign study for desification of centre of Amsterdam は、オランダ・アムステルダムの歴史的街並みが続く都市の中に、その景観を保存しつつ、最大限の容積を持つ新しい建築を建てる可能性を模索するものである。1街区の建物の既存の壁面を保存しながら、街路からの視線を遮らないようにかつ最大の容積を獲得出来るようなヴォリューム・スタディである。それは、オランダの伝統的町並みや自然環境など周辺環境との連続性を強く意識するもので、前衛でありながらもオランダの伝統的歴史感を重視する立場をとっている。これらを含むプロジェクトの中心的テーマは、著作『FARMAX』『META CITY DATA TOWN』からもわかるように、建築がどのような水準で社会との接点を持つことができるのかといった公共性に対する思考である。ここではオランダの都市問題の解決、つまりオランダの狭い国土に過密に人口が集中したときに、建築はその最過密状態＝FARMAXをどのように解決するかが中心で、そのような論拠を様々な数値データによって客観的に検証し、そこから得られたデータに基づいて建築に形態を与えているのである。

この様に数多くの国家的な規模のプロジェクトに若手建築家が参加できるのは、現在のオランダの大変な好景気によるところが大きく、政府も積極的にそれを支援を行っているからのようだ。しかし、状況が異なる日本でも若手建築家の提案する都市プロジェクトには共通するテーマをいくつか発見できる。例えばハウジング・プロジェクト・トウキョウ(Cf.)は過密都市・東京における都市プロジェクトで「東京の中心に人は住めるか」がテーマである。日本の中心に建てられている公共建築が敷地境界から明確な空地をとって配置されていること注目し、その中間的な領域に建築のヴォリュームを挿入していく。このことで東京の中心に人を住まわせ、同時に周辺環境と物的な連続性を作り出すことで都市環境を再構成していこうとするものである。これもMvRdVのプロジェクトと同様に、周辺環境をうまく建築に取り込んで、都市環境に対して部分的に関わっていく提案である。このような建築と周辺環境と物的な連続性は、都市の中、特に東京のように過密した都市における新しい公共性を獲得し得るのではないだろうか。

Cf. 都市環境構成研究会『ハウジング・プロジェクト・トウキョウ』東海大学出版会、1998

特別講義：「沖縄の環境と文化財」
"Environment and cultural property in Okinawa"

福島駿介［建築家、琉球大学教授］
FUKUSHIMA Shunsuke (Professor, University of the Ryukyus)

レポート：荻野隆博［修士課程］
report: OGINO Takahiro (Master candidate)

本学出身で現在琉球大学の教授を勤められる福島駿介氏の特別講義が、大学院の授業の一環として1999年5月24日［金］、文教施設研究センター会議室で行われた。20年前に沖縄に移り住んだ福島氏は、常に新しい文化を生み出す沖縄の持つ「チャンプル」(沖縄の方言、色々なものを混ぜ合わせるという意)という風土に触れ、沖縄の民家、亀甲墓などの文化財を研究していくうちに、その空間に反映されている様々な精神的関係が現在の生活の中にも生き続けていることに着目した。そして沖縄という特殊な風土の中で文化財を保存していくことの意義、これからの沖縄への期待を語った。

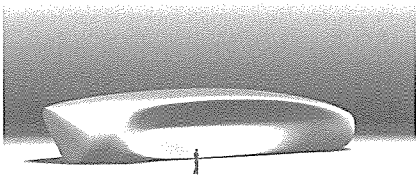
講演：「ムービングアーキテクチャー」
"Moving architecture"

オレ・ボーマン［建築家、アーキス編集長］
Ole Bouman (Editor, *archis* magazine)

レポート：高橋寛［修士課程］
report: TAKAHASHI Hiroshi (Master candidate)

講演会の風景(右端にオレ・ボーマン氏)

オランダの建築雑誌アーキスの編集長で建築家のオレ・ボーマン氏の講演が、大学院の授業の一環として1999年6月12日［土］、緑が丘M011大講義室で催された。デジタルメディアの発達によって技術的にも文化的にも流動的な状況に曝されている建築は、従来の定義では成立し得ないと考えるボーマン氏は、より流動的な「ムービングアーキテクチャー(動く建築)」を主張する。氏はその可能性を、プロジェクションによる表面の動き、コンピューターとのインタラクション、オンライン建築、現実とヴァーチャルな世界の混合体としての建築という4水準から探っており、その実践である自作プロジェクト「TransPORT 2001」のCGも紹介された。講演には外部からの参加者もみられ、ボーマン氏との間で白熱した議論が繰り広げられた。


TransPORT 2001

TIT建築設計教育研究会会則

[第1条]名称
本会はTIT建築設計教育研究会と称する。
[第2条]目的
本会は東京工業大学工学部建築学科及び大学院建築学専攻における学生の設計能力の向上を側面的に支援するとともに、学生と会員、会員相互の交流を促進し、設計技術向上の相互啓発を行うことを目的とする。
[第3条]事業内容
本会は次の事業を行う。
①国内外の建築家・特別講師等の招聘、②卒業設計・修士制作への賞の授与と作品保存、③展示会・講演会等のイベントの開催、④総会・運営委員会の開催、機関誌等出版物の発行、⑤その他、本会の目的にかなう事業
[第4条]会員
本会は本会の目的に賛同する会員によって構成される。会員は東京工業大学の卒業生を中心とした個人または、上記の個人の関与する法人とし、その会費を基金として本会を運営する。
[第5条]会費
本会の会員の会費は法人会員は1口10万円とし、0.5口(5万円)よりとする。期間は1年間以上6年間までとする。(期間削除=第8回総会にて承認)個人会員は1口1万円とし、1口よりとする。(個人会員=第8回総会にて承認)
[第6条]役員
本会は次の役員を置く。
運営委員9名(運営委員長1名及び監査役1名を含む)
[第7条]総会
会員(法人の場合はその代表)等による総会は年に1回以上開催するものとする。
[第8条]会計
本会の会計年度は1月1日に始まり、12月31日に終わる。また、会計報告は年1回会員に公表する。
[第9条]存続期間
本会の存続期間は平成2年10月1日より平成8年9月30日までとする。(この項削除=第5回総会にて承認)
[第10条]会則
本会則は平成2年10月1日より実施する。本会則の改廃は総会の決裁を得るものとする。また本会則の運営にあたっては必要により別に細則を設ける。
(以上)
〈細則〉
TIT建築設計教育研究会会則・第10条により下記のとおり細則を定める。
[第1条]役員
本会の役員の構成は下記による。
運営委員9名(学外運営委員6名、学内運営委員3名)
運営委員の任期は3年とし、重任をさまたげない。東京工業大学建築学科の学内運営委員は主任教授その他2名とし、また学外運営委員は会員または法人会員の代表者のうち、学内運営委員の合議により6名を選任する。
運営委員長(会の代表者)1名及び監査役1名は学外運営委員の中より運営委員の互選により選任する。
[第2条]総会
総会は会員(法人の場合はその代表)及び東京工業大学建築学科教官(教授・助教授)出席による集会とする。
役員による事業報告、事業計画の審議、設計教育に関する意見交換等を行い、必要により会則・細則の改廃の決裁を行う。
(以上)

1998年度役員(99.05.21現在)

顧問:中島隆(1951卒)鹿島学術振興財団専務理事
顧問:林昌二(1953卒)(株)日建設計最高顧問、NUI都市・建築研究所長
運営委員長:戸尾任宏(1954卒)(株)建築研究所アーキヴィジョン代表取締役
副委員長:山下和正(1959卒)(有)山下和正建築研究所代表取締役
監査役:藤江澄夫(1960卒)清水建設(株)取締役専務執行役員プロポーザル本部長
運営委員:岡部富雄 (1959卒)(株)構造計画研究所常務取締役
運営委員:仙田満(1964卒)東京工業大学教授
運営委員:服部紀和(1964卒)(株)竹中工務店取締役
運営委員:坂本一成(1966卒)東京工業大学教授
運営委員:八木幸二(1969卒)東京工業大学教授

1999年度法人会員(99.09.02現在)

(社名/本会への代表)
大林組/國富勲、鹿島建設/中島隆、構造計画研究所/富野壽、清水建設/藤江澄夫、大成建設/光岡宏、竹中工務店/服部紀和、日建設計/三栖邦博、松田平田/和田信昭、レーモンド設計事務所/森山興眞、IAO竹田設計/竹田秀道、環境デザイン研究所/仙田順子、久米設計/伊平則夫、建築研究所アーキヴィジョン/戸尾任宏、清田育男計画設計工房/清田育男、日本設計/高橋徹、山田守建築事務所/山田達郎、アモ設計事務所/篠崎好明、葛西潔建築設計事務所/葛西潔、金箱構造設計事務所/金箱温春、武田光史建築設計事務所/武田光史、伊達計画文化研究所/伊達美穂、山下和正建築研究所/山下和正、山下設計/井上雄治、渡辺組/渡辺達夫

1999年度個人会員(99.03.17現在)

(氏名(卒年))
田口武一(S10)/東久世秀禧(S10)/黒田正巳(S13)/吉江憲吉(S14)/高田清(S16)/石田繁之介(S16)/堯天義久(S19)/栗原勝(S22)/石野治(S23)/池田忠彦(S25)/遠藤正明(S25)/中島隆(S26)/佐久田昌昭(S27)/濱田昭二(S27)/中村晃(S28)/林昌二(S28)/田中正美(S29)/戸尾任宏(S29)/吉井一夫(S29)/高木賢(S30)/田口好孝(S30)/内藤昌(S30)/城間勇吉(S31)/渋田実(S32)/中神弘(S32)/松下謹三(S32)/青柳司(S33)/太田雅三(S33)/佃隆介(S33)/増田一真(S33)/清水康久(S34)/富野壽(S34)/村口昌之(S34)/山下和正(S34)/永井雄一(S35)/野村邦夫(S35)/藤江澄夫(S35)/星野利一(S35)/松野公一(S35)/後藤宣夫(S36)/佐々木雄二(S36)/鈴木歌治郎(S37)/最上達雄(S37)/三栖邦博(S38)/有田桂吉(S39)/岡部富雄(S39)/片野毅(S39)/仙田満(S39)/只野康夫(S39)/西野敬史(S39)/野口三郎(S39)/服部紀和(S39)/平川長(S39)/満田恒男(S39)/味生威(S40)/野崎英彦(S40)/森下清子(S40)/岩沢二郎(S41)/坂本一成(S41)/志岐孝之(S41)/鈴木清友(S41)/大嶋顕世(S42)/小西敏正(S42)/光岡宏(S42)/矢口彰(S42)/奥村光男(S43)/西村博道(S43)/花島晃(S43)/細入誠一(S43)/村田靖夫(S43)/和田章(S43)/藍澤宏(S44)/佐藤俊作(S44)/清水弘道(S44)/田中享二(S44)/牧圭介(S44)/八木幸二(S44)/山口洋一郎(S44)/岡本慶一(S45)/岡本聖司(S45)/鳥羽広明(S46)/梅干野晃(S46)/山口潤二(S46)/大野隆造(S47)/猪子順(S47)/西尾秀平(S47)/杉原繁樹(S47)/苅谷武郎(S48)/日置滋(S48)/藤岡洋保(S48)/尹原基(S48)/有里公徳(S49)/高田典夫(S49)/豊田雪夫(S49)/三橋伸夫(S50)/上山博夫(S50)/河野晴彦(S50)/小林謙一(S50)/清水寧(S50)/土屋隆(S50)/高橋寛(S51)/田中一晴(S51)/宮木宗和(S51)/松永浩一(S51)/木谷靖孫(S52)/前田康憲(S52)/熊谷昌彦(S53M)/浦春彦(S53)/白川裕信(S53)/宮本文人(S53)/飯利昌人(S53)/常木康弘(S54)/武田直行(S54)/小室清高(S55)/三上貴正(S55)/吉田親史(S55)/伊東龍一(S56)/乾靖(S56)/仲野順一(S56)/宮本昌明(S56)/高橋晶子(S57M)/津金猛(S57M)/酒井星志(S57)/西田達生(S57)/山口勝巳(S57)/安部武雄(S58D)/坂田弘安(S58)/横山裕(S58)/新井貴(S59)/帽田秀樹(S59)/大佛俊泰(S60)/所司護(S60)/若松均(S60)/中村芳樹(S61M)/奥山信一(S61)/山田泰範(S61)/鈴木達也(S62)/塚本由晴(S62)/鈴木重則(S63)/今井賢治(H1)/栗原正明(H1)/鹿野秀馬(H2)/木島千嘉(H3M)/櫻井康雄(H4)/菅原正則(H5M)/保住秀樹(H5)/藤岡務(H6M)/村田淳(H7)/七田裕(H8M)/吉田佳代(H9)/井上寿(現職)/以上151名

運営委員会

[第1回運営委員会](1999年4月14日)
以下の事項について討議、議決された。
①1998年度決算報告案の検討。②1999年度予算案の検討。③個人会員の入会状況の報告。④第9回総会開催を5月21日とする。
[第2回運営委員会](1999年5月21日)
以下の事項について討議、議決された。
①1998年度決算報告案の承認。②1999年度予算案の承認。③個人会員の入会状況の報告。

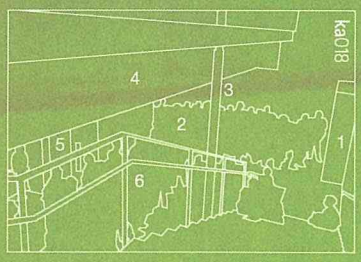
第9回総会

1999年5月21日、蔵前工業会館にて会員39名の参加を得て開催され、以下の事項について報告、意見交換がなされた。
①1998年度決算報告。②1999年度予算案の検討、承認。③1999年度会費納入状況報告。④個人会員の入会状況の報告。⑤大岡山建築賞受賞式。⑥懇親会。

編集：東京工業大学工学部建築学科 ka 編集委員会
編集委員長=坂本一成
委員=八木幸二／三上貴正／五十嵐規矩夫／塚本由晴[幹事]／寺内美紀子／中井邦夫／足立真
学生編集委員=伊藤立平／吉村英孝／遠藤康一／清水加陽子／丸山美紀／香川貴範／小林太加志／長岡大樹／野村陽子／大村卓／高橋寛／荻野隆博
編集協力：デザイン=秋山伸＋久世健／翻訳=デイヴィッド・スチュアート
表紙：佐川町立桜座；ホールへの入場を待つ町民たち[©桜座]
発行：TIT建築設計教育研究会[1999年12月発行]
定価：800円

ka018

Autumn/Winter, 1999-2000



佐川町立桜座ロビー見おろし。開場直後、ホールへの入場を待つ人々。
設計時は2階で「もぎり」と考えていたが、実際はこの1階出入口がよく使われる。
[解説：高橋晶子／写真提供：桜座]

1：客席出入口
2：入場待ちの人々
3：鋼棒90Φの芯に鋼管165Φをかぶせモルタル（耐火被覆）を充填した柱
4：ポストテンションをかけて梁せいを抑えた床
5：エレベータ
6：フロートガラス＋飛散防止フィルム貼りの手すり腰壁